

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第35冊

鹿田遺跡 13

— 第26次調査 —

(医学部動物実験施設改修に伴う発掘調査)

2019年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学鹿田キャンパスにひろがる鹿田遺跡の発掘調査を、本学が開始したのは1983年度以降です。現在、学内設置部局である埋蔵文化財調査研究センターが調査を担っていますが、同体制を整える契機となったのは、37年前、1981年度に実施された医学部附属動物実験施設新営工事です。同工事の際に、本学が岡山市教委への必要な対応を欠いたことで、同地点に広がる埋蔵文化財の破壊をまねくこととなり、その事態を背景に学内に調査組織が設置されるに至りました。

同工事地点は、その後の発掘調査成果から、鹿田遺跡の中世集落を評価する上で重要な位置にあったことが予想されることとなりました。鎌倉時代の濠がめぐる大型の屋敷地空間の南端ライン上にあたる可能性が高まったからです。その解明は、同集落の中心的な屋敷地の実態を蘇らせるものであり、消滅したデータを鑑みるに、それを検証できないことは非常に残念なことでした。

鹿田遺跡第26次調査となる本調査では、調査地点が問題の建物の東側に並ぶことから、同仮説の検証に期待がもたれるなかで、屋敷地南端ラインに加えて南東コーナー部を構成する濠の存在をも確認することができました。それによって従来の仮説を検証することができた点は大変貴重な成果となりました。また、弥生～古墳時代のデータからは、同時期における集落南西部の土地利用の状態が描き出されています。鹿田遺跡では、近年、水田畔の報告などの耕作地の広がり報告されていますが、かつては予想されなかったものです。こうした遺構の認定は難しい場合が多いなかで、本調査では、積極的にその可能性を求める取り組みが進められました。こうした姿勢を、新たな成果への手がかりを得る一歩としたいところです。

本調査の成果によって、かつて失われた貴重なデータの復元に対して、ほんの一部ではありますが、多少なりとも責務を果たせたのではないのでしょうか。本遺跡では、これまで27回におよぶ発掘調査が大きな成果を上げてきています。そうした調査の始まりの礎となった場所での本調査を通して、改めて鹿田遺跡の発掘調査あるいは本学埋蔵文化財保護の原点に立ち返り、今後につなげていくことが大切でしょう。

調査にあたっては、建設工事現場と近接した中での調査であり、安全管理などの様々な面で関連機関・関連部局の方々には大いにご支援いただきました。関係各位に改めて感謝申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長(理事) 菅 誠 治
副センター長 山 本 悦 世

目 次

第1章 歴史的・地理的環境 (山口雄治)	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡	1
第2節 鹿田遺跡	3
a. 構内座標の設定	3
b. 遺跡の概要	5
第2章 調査に至る経緯と概要 (山口)	9
第1節 調査に至る経緯と経過	9
a. 調査に至る経緯	9
b. 調査と報告書の体制	9
c. 調査の経過	10
第2節 調査の概要	11
第3章 調査の記録	13
第1節 調査地点と層序	13
a. 調査地点の位置	13
b. 層序	14
c. 地形復元	17
第2節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物	18
a. 井戸	19
b. 土坑	22
c. 溝	24
d. 耕作関連遺構	29
e. 焼土溜まり	30
第3節 古代の遺構・遺物	30
a. 土坑	30
第4節 中世前半の遺構・遺物	31
a. 井戸	32
b. 土坑	37
c. 溝	39
d. ビット	52
第5節 近世の遺構・遺物	53
a. 土坑	53
第6節 包含層ほかの出土遺物	54
第4章 自然科学的分析	
第1節 鹿田遺跡第26次調査小区函溝群の軟X線写真撮影・観察..... (渡辺正巳)	56
第2節 鹿田遺跡第17・26次調査出土木製品類と自然木の樹種..... (能城修一)	65
第3節 鹿田遺跡第26次調査出土曲物の樹種同定..... (森吉田生物研究所)	74
第4節 鹿田遺跡第26次調査出土曲物付着有機物の材質調査..... (森吉田生物研究所)	77
第5節 鹿田遺跡第26次調査出土漆製品の塗膜構造調査および樹種同定..... (森吉田生物研究所)	78

第6節 鹿田遺跡第26次調査出土動物遺存体	江川達也	81
第7節 鹿田遺跡第26次調査出土種子と種子圧痕	(岩崎志保・沖 陽子)	82

第5章 結語	87
--------	----

遺構一覧表	88
-------	----

写真図版

挿 図 目 次

第1章	図27 溝9断面・出土遺物	27	
図1 周辺遺跡分布図	2	図28 溝10断面	27
図2 岡山大学鹿田キャンパス内における 発掘調査地点と構内座標	4	図29 溝11断面・出土遺物	28
第2章	図30 溝12断面	28	
図3 調査風景他	10	図31 溝13断面	28
図4 遺構全体図 (弥生時代後期～古墳時代前期前葉)	11	図32 溝14断面	29
図5 遺構全体図(古代～近世)	12	図33 帯状高まり・溝15・16断面	29
第3章	図34 小区画溝群	29	
図6 調査地点位置図	13	図35 焼土溜まり	30
図7 A地点調査区断面および断面位置	15	図36 古代遺構全体図	31
図8 B地点調査区断面	16	図37 土坑8・出土遺物	31
図9 調査区断面写真	16	図38 中世前半遺構全体図	32
図10 弥生時代～古墳時代前期前葉遺構全体図	18	図39 井戸3	33
図11 井戸1	19	図40 井戸3出土遺物1	34
図12 井戸1出土遺物	20	図41 井戸3出土遺物2	35
図13 井戸2	21	図42 井戸3出土遺物3	36
図14 井戸2出土遺物	22	図43 土坑9・出土遺物	37
図15 土坑1	22	図44 土坑10	37
図16 土坑2・出土遺物	23	図45 土坑10出土遺物	38
図17 土坑3・出土遺物	23	図46 土坑11・出土遺物	38
図18 土坑4	23	図47 土坑12	39
図19 土坑5	24	図48 土坑13	39
図20 土坑6	24	図49 土坑14	39
図21 土坑7	24	図50 溝17断面・出土遺物	40
図22 溝1・2・3・4断面	25	図51 溝18断面・出土遺物	41
図23 溝5断面	25	図52 溝19断面・出土遺物	42
図24 溝6断面・出土遺物	26	図53 溝20断面	42
図25 溝7断面・出土遺物	26	図54 溝21断面・出土遺物	42
図26 溝8断面	27	図55 溝22a断面1	44
		図56 溝22a断面2	45
		図57 溝22a張り出し部断面	45

図58 溝22b断面	46	図8 植物珪酸体ダイアグラム: OS1	61
図59 溝22出土遺物1	47	図9 植物珪酸体ダイアグラム: OS2	61
図60 溝22出土遺物2	48	図10 顕微鏡写真: 植物珪酸体	63
図61 溝22出土遺物3	49	図11 顕微鏡写真: 花粉・胞子	64
図62 溝22出土遺物4	50	第2節	
図63 溝22出土遺物5	51	図1 鹿田遺跡第17・26次調査出土	
図64 溝23断面	51	木製品類と自然木の顕微鏡写真(1)	68
図65 溝24断面	52	図2 鹿田遺跡第17・26次調査出土	
図66 溝25断面	52	木製品類と自然木の顕微鏡写真(2)	69
図67 溝26断面	52	図3 鹿田遺跡第17・26次調査出土	
図68 ビット1・出土遺物	53	木製品類と自然木の顕微鏡写真(3)	70
図69 近世遺構全体図	54	第3節	
図70 土坑15	54	図1 顕微鏡写真1	75
図71 包含層出土遺物	55	図2 顕微鏡写真2	76
第4章		第4節	
第1節		図1 断面写真	77
図1 調査区の配置	56	第5節	
図2 調査区平面図(試料採取地点)	56	図1 分析資料と徐膜断面	79
図3 試料採取地点断面図	56	図2 断面写真	80
図4 軟X線写真観察結果: OS1	58	第7節	
図5 軟X線写真観察結果: OS2	58	図1 出土種子(1)	84
図6 花粉ダイアグラム: OS1	59	図2 出土種子(2)	85
図7 花粉ダイアグラム: OS2	59	図3 土器瓦痕の位置・拡大写真とSEM画像	86

表 目 次

第3章		表2 樹種一覧(第26次調査)	72
表1 調査区断面における各層位レベル一覧	16	第3節	
第4章		表1 岡山大学鹿田遺跡出土木製品同定表	74
第1節		第4節	
表1 微化石概査結果	59	表1 調査資料	77
表2 花粉化石組成表	60	第5節	
表3 植物珪酸体化石組成表	61	表1 調査資料	78
第2節		表2 漆器の断面観察結果表	78
表1 鹿田遺跡第17・26次調査で出土した		第6節	
木製品類と自然木の樹種	71	表1 鹿田遺跡第26次調査出土動物遺存体種名	81
表1 a 鹿田遺跡第17次調査で出土した		表2 鹿田遺跡第26次調査出土動物遺存体属性	81
木製品類と自然木の樹種	71	第7節	
表1 b 鹿田遺跡第26次調査で出土した		表1 検出種子一覧	83
木製品類と自然木の樹種	71	表2 種子圧痕同定結果一覧	85

図版目次

図版1	古墳時代の井戸1	図版11	中世前半の溝22②
図版2	古墳時代の井戸2・土坑1	図版12	中世前半の溝23③
図版3	古墳時代の土坑2～6	図版13	中世前半の溝22④)～26・ピット、近世の土坑15
図版4	古墳時代の土坑7、弥生・古墳時代の溝1～11	図版14	古墳時代の井戸出土遺物
図版5	弥生・古墳時代の溝12～16・帯状高まり・焼土溜まり	図版15	中世前半の土坑・溝出土遺物①
図版6	古墳時代の小区西溝群	図版16	中世前半の溝出土遺物②
図版7	中世前半の井戸3	図版17	古墳時代・中世前半の井戸出土木製品①
図版8	古代の土坑8、中世前半の土坑9～12	図版18	中世前半の井戸出土木製品②
図版9	中世前半の土坑13・14・溝17～19	図版19	中世前半の溝出土木製品③
図版10	中世前半の溝20～22①	図版20	中世前半の溝出土木製品④)、土製品、石製品

例言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学医学部動物実験施設改修に伴って実施した鹿田遺跡第26次調査の発掘調査報告書である。
調査地点は、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。
発掘調査地点は鹿田地区溝内埋蔵CD56～CJ58、CJ61～CK62区に位置し、期間は2014年8月18日～11月17日、調査面積は295.5m²である。
2. 発掘調査および報告書作成は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われた。委員諸氏に御礼申し上げる。
3. 本書作成に当たっては、以下の方々にご指示・ご協力いただいた。また、能城氏・沖氏・江川氏からは玉類を賜った。記して感謝申し上げます。
石材同定：鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科）、木材同定：能城錦一氏（明治大学）、種実同定：沖陽子氏（岡山大学特命教授）、動物遺存体同定：江川達也氏（笠岡市教育委員会）
4. 発掘調査時の遺構写真・写真撮影は、調査体制の項で記載する調査研究員が行った。
5. 報告書作成に当たっての主な担当は以下の通りである。
<遺物>土器・土製品・石器：(実測・浄書・観察表) 南健太郎・山口隆治
(実測補助) 有賀紅美・大久保雅子・小野素子・西本高美
木製品：(実測・浄書) 南・小野、(観察表) 南
写真撮影：南
<遺構>浄書：山口
6. 本書の執筆分担は目次に示した。
7. 編集は山本悦世（副センター長）・清家章（調査研究室長）の指導のもと、山口が担当し、南の協力を得た。
8. 発掘調査の概要は「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2014」に一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。
9. 本書で利用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成6年度発行)を合成して使用したものである。
10. 本書に掲載した記録・出土遺物は全て本センターで保管している。

凡例

1. 本書で用いる高度値は海拔表高であり、方位は国土座標V座標系（日本測地系）の座標北である。
2. 遺物番号は遺構別に番号を付するが、土製品にはT、石器にはS、木器にはWを付して通し番号とする。
3. 遺構に関するマークは一覧表にまとめた。
4. 拓本は、内・外面を掲載する場合は、左側に外面、右側に内面を置く。片面の場合は外面を基本とした。
観察表の表記基準は以下の通りである。
①胎土は、微砂：砂粒径0.5mm以下、細砂：0.5～1mm、粗砂：2mm以上
②法量の単位は「cm」である。数値の差が3mm以下の場合は、平均値とし、以上の場合は併記した。
5. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnと表記した。一般的なものでは省略している。また、下記の記号を用いて含有量を示している。
◎：顕著な含有、○：含有、△：少量の含有
6. 巻末図版の遺物番号は、本文中の遺物番号に一致する。

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のはほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。その位置は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたり、河口近く形成された三角州帯上に立地している。現在の旭川は、本遺跡の東方約1kmを児島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。また、本遺跡は海岸線から北に約7.5km程度の距離をもつが、中世以前には、遺跡の南側近くに瀬戸内海の影響が強く及んでいたことが想定される。

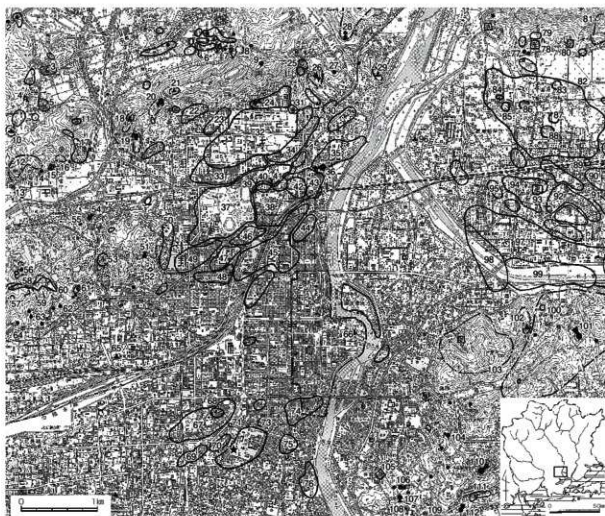
遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまで遡り、旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている¹⁾。縄文時代では、本遺跡が所在する平野部北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認される²⁾。こうした人間活動が広がりをみせるのは、縄文時代中期以降である。竪穴住居や貯蔵穴群などが残る中期中葉～後期中葉の津島岡大遺跡³⁾、旭川を挟んで後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡⁴⁾は、その代表的遺跡である。いずれも丘陵裾付近に形成された集落であるが、これらの遺跡は、一時的な中断を挟みながらも、弥生時代早期（突帯文土器の段階）につながっていく。

弥生時代前期では、津島岡大遺跡³⁾～津島遺跡周辺⁵⁾あるいは百間川沢田遺跡⁴⁾～原尾島遺跡⁶⁾において水田遺構が調査されている。早期とされる津島江道遺跡の水田時期についての評価は確定していない⁷⁾が、水稲農耕の情報が岡山平野にかなり早い段階でもたらされ、受容されていたことは確かであろう。

集落では、前期前半は津島遺跡³⁾に限定的であるが、その後、南方遺跡⁸⁾・雄町遺跡⁹⁾・百間川沢田遺跡⁴⁾・原尾島遺跡⁶⁾などが出現する。さらに数が増加していくのは中期後半以降である。中期後半～後期前葉の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と臨海性の高い南群に二分される。前者では、三角州の形成に伴うかのように、前期末葉～中期前半の代表的集落である南方遺跡から絵園遺跡¹⁰⁾や上伊福九坪遺跡¹¹⁾へと場所が移動し、後期には津島遺跡³⁾や伊福定国前遺跡¹²⁾などを含めた広がりの中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡¹⁾、後期には天瀬遺跡¹³⁾が加わり、遺跡群のまとまりをみることが出来る。一方、旭川東岸では、雄町遺跡⁹⁾などのように前期から後期に至る継続性の高い遺跡が多いという特徴が指摘されるが、同平野の南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡¹⁴⁾、後期に同原尾島遺跡⁶⁾へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期にはいと平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に数多く築かれているが、こうした弥生墳丘墓や前方後円（方）墳は、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡のある旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の根根上に位置する操山109号墳・網浜茶白山古墳¹⁵⁾の系列を当てることができる¹⁶⁾。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎え、神宮寺山古墳¹⁷⁾、金蔵山古墳¹⁸⁾、淡茶白山古墳¹⁹⁾という全長150m級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡³⁾帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模が縮小する傾向が、旭川西岸の南群に顕著に認められ、海側に近い鹿田遺跡周辺では遺跡は消滅する。旭川東岸の百間川遺跡群周辺でもそうした傾向が認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況がみてとれる。



- | | | | |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (縄文～近世) | 31. 朝原鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 |
| 2. 富原西側古墳 (古墳) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 関西高松山古墳群 | 89. 藤町遺跡 (弥生～古墳) |
| 3. 荒津御寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若百古墳 (古墳後期) | 90. 乙之島遺跡 (弥生) |
| 4. 上ノ成塚跡 (奈良) | 34. 津島江田遺跡 (縄文～近世) | 63. 乙之島古墳 (古墳後期) | 91. 岡遺跡 (弥生) |
| 5. 矢野塚塚跡 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・岡遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町?) | 93. 幡多塚寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 藤跡池古墳群 (古墳後期) | 37. 津島遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 赤尾山遺跡 (弥生～室町) |
| 9. 丹生山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂頭塚 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (奈良) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中渡遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (設立岡山病院) 遺跡 | 98. 百間川原尾山遺跡 |
| 12. 中瀬津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方中蔵遺跡 (弥生～近世) | (鎌倉～室町?) | (縄文中期末～近世) |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方藪ノ内遺跡 (弥生～近世) | 71. 敷布池 (奈良・大供遺跡?) | 99. 百間川西田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 14. 若百八幡堂古墳 (古墳) | 44. 北方芝田遺跡 (弥生～近世) | 72. 大供中近遺跡 (弥生～室町) | 100. 藤山219号遺跡 (旧石塚) |
| 15. 東瀬津貝塚 (不明) | 45. 坂田遺跡 (弥生～近世) | 73. 敷布池 (弥生) | 101. 金藏山古墳 (古墳前期) |
| 16. 東瀬津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 坂田遺跡 (弥生～平安) | 74. 天樂遺跡 (弥生～近世) | 102. 砂神寺城跡 (戦国) |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚 | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 75. 新近遺跡 (奈良～近世) | 103. 藤山古墳群 (古墳後期) |
| (鎌倉～室町?) | 48. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世) | 104. 藤山03号墳 (古墳前期) |
| 18. 高山城 (新+追加) 跡 (室町) | 49. 上伊福遺跡・伊福定因宮遺跡 | 77. 曾入塚古墳 (古墳後期) | 105. 瀬原寺 (飛鳥～平安) |
| 19. 七ノ成墳丘・古墳群 (弥生～古墳) | (弥生～近世) | 78. 貫田塚寺 (飛鳥～室町) | 106. 瀬原茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 20. 都日坂墳丘・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾封神社南遺跡 | 79. 貫田塚寺堂跡 (奈良) | 107. 藤山09号墳 (古墳前期) |
| 21. 平田山城 (戦国) | (弥生～平安) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 藤山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島原居遺跡 (古墳～室町) | 51. 津島古墳 (古墳前期) | 81. 湯辺古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 52. 砂神寺遺跡 (弥生) | 82. 瀬原岡付岡遺跡 | 110. 瀬茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 53. 南津寺 (奈良?) | 83. 北ノ塚遺跡 (弥生～室町) | 111. 瀬茶臼山古墳 (弥生～室町) |
| 25. 津島東3丁目墳・地蔵(弥生・古墳) | 54. 南津古墳 (古墳前期) | 84. 瀬原岡付跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山段塚 (鎌倉～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 55. 十二本塚古墳 | 85. 瀬原岡付塚遺跡 (南園長) 遺跡 | |
| 27. 不動堂古墳 | 56. 山崎城跡 (室町～江戸) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 28. 前古墳群 (古墳前期・後期) | 57. 矢塚山西古墳群 (古墳後期) | 87. 中ノ谷(高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 29. 砂尻山城跡 (戦国) | 58. 矢塚山西遺跡 (弥生) | | |
| 30. 翠田遺跡 (弥生) | 59. 矢塚山東古墳群 (古墳後期) | | |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000、1/3,750,000)

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡²⁶、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺²⁷、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刷印須恵器などが出土した百間川米田遺跡²⁸などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺²⁹が知られる。その対岸では、8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡³⁰。そしてその西約500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡³¹が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人々の交流が、本遺跡と関わりの深い鹿田庄成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理学の研究や発掘調査成果から摂関家殿下渡領である鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土³²し、また、南東1kmの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている³³。旭川東岸では、百間川遺跡群において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝などの大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。大供本町遺跡でも同時期の屋敷地の並びが調査されている³⁴。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

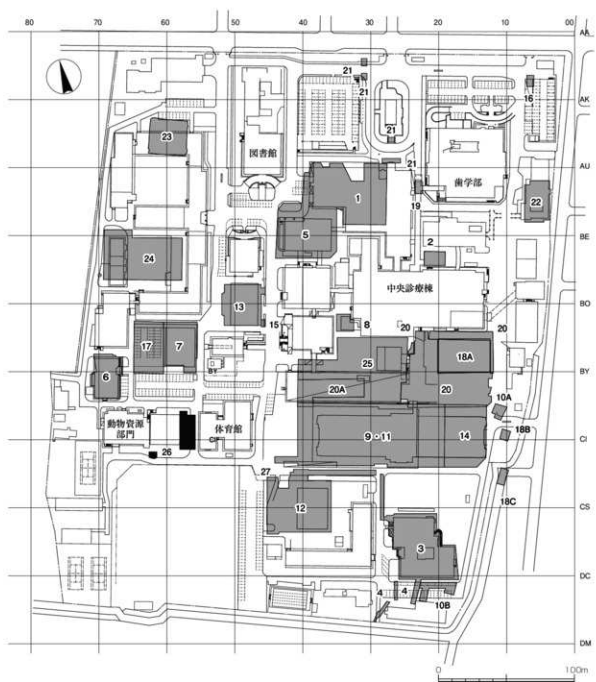
第2節 鹿田遺跡

a. 構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内に所在する鹿田遺跡の調査にあたり、周辺の市街地街区および構内の建物主軸に合致させた局地座標として、鹿田地区構内座標を設定している（図2）。鹿田遺跡の調査における位置関係の記録は、すべて構内座標系に基づくものである。

1983年から2002年度までの構内座標は、国土座標第V座標系（日本測地系）の（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、同座標軸の北を東へ15度回転させた座標軸を基軸とする局地座標系であった。2002年4月1日の改正測量法施行にともない、本センターでも2003年度以降に刊行した報告書からは世界測地系を採用することとしたが、日本測地系によって設定した構内座標系を踏襲したまま、日本測地系に基づく座標値のみを世界測地系へと変換することとした³⁵。すなわち、地図上に投影される局地座標系の相対的位置関係を保持したまま、座標値のみを世界測地系へと置き換えることとしたのである。結果、構内座標原点の座標は、（ $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ ）と変換された。ただし、日本測地系と世界測地系では、基準となる楕円体や測地座標系が異なるため、両者の座標軸は平行とはならない。したがって、日本測地系に基づいて設定した局地座標を用いる本構内座標の北は、日本測地系に基づく座標北であり、世界測地系の座標北ではない。

構内座標は、原点から5m間隔で座標軸に平行するグリッドラインを設定して細分する。ライン名については、東西ラインでは2文字のアルファベットの組み合わせ、南北ラインは2桁のアラビア数字で表記している。すなわち、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとにAB、AC、…、AZ、BA、BB、…BZとし、原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとに01、02、…79、80とする。これらのラインの交差によって形成される5m四方の区画は、その北東角で交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区、…、



- | | | |
|---------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟 | 10 第10次調査：共同講堂連 | 19 第19次調査：渡り廊下 |
| 2 第2次調査：NMR-CT室 | 11 第11次調査：病棟 | 20 第20次調査：中央診療棟関連 |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 21 第21次調査：外来診療棟周辺地環境整備 |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 13 第13次調査：総合教育研究棟 | 22 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 5 第5次調査：管理棟 | 14 第14次調査：病棟 | 23 第23次調査：JFホール |
| 6 第6次調査：アイトップセンター | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外溝】 | 24 第24次調査：医歯薬融合棟 |
| 7 第7次調査：基礎研究棟 | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター | 25 第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期） |
| 8 第8次調査：R1治療室 | 17 第17次調査：基礎研究棟 | 26 第26次調査：動物実験施設（本調査地点） |
| 9 第9次調査：病棟 | 18 第18次調査：中央診療棟 | 27 第27次調査：自家発電設備 |

※建物名称は調査次の呼称による。

図2 岡山大学鹿田キャンパス内における発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

と呼称する。

b. 遺跡の概要

2017年度までに27次にわたる発掘調査が行われている本遺跡は、弥生時代中期末葉・後期前半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後半～平安時代前期、平安時代後期～戦国時代に集落が営まれた遺跡である。また、古代～中世では、藤原摂関家殿下渡領鹿田庄の故地とされる。

【土地形成と集落展開】

本遺跡出土土器で最も古く遡る時期は縄文時代中期末であり、それに続くのが弥生時代早期・前期である。いずれも第1次調査地点で出土している³⁰。出土点数は各1点で極めて少量である点は、該期の人間活動の痕跡が希薄であったことを示すと同時に、各時期において陸地が存在した可能性を示唆する。こうした状況から、本遺跡は旭川河口に形成された縄文時代の砂堆をベースにした臨海性の高い集落遺跡と評価される。

その後、近年の調査から、地形面で大きな変化は弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことが分かってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成し（第23次調査地点³¹）、中期中頃には河道が多量の土砂によって埋没している（第12次調査地点³²）。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

最初に集落が形成されたのは第1次調査地点（岡山大学病院外来診療棟）である。弥生時代中期末葉には、このごく限定された範囲に遺構が形成されており、東西50～60m・南北50m程度の比較的小さな居住域が復元される。後期に入ると、居住域は東側（第19次・22次調査地点³³）と南側（第5次・2次・18次調査地点³⁴）に広がり、東西220m・南北100m程度の範囲に拡大する。古墳時代初頭には、東側の広がりは影を潜め、西側（第17次調査地点³⁵）に居住域が展開する。居住域周辺域（第12次・13次・20次調査各地点³⁶）には、土器溜まりの形成が顕著となる。また、南側（第9次・11次・14次調査地点）には後期～古墳時代初頭の水田域が確認されており³⁷、同時期には、海岸線までは一定の距離があったことが想定される。一方、北側（第21次³⁸・23次調査地点³⁹）の調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側が、深い谷地形あるいは河道が中世段階まで存在したことが明らかとなっている。

このように、弥生時代中期後葉～古墳時代において、鹿田遺跡は旭川西岸部のなかで、北側の遺跡集中域から切り離されて海に突き出したような場所に形成され、沖積作用の影響を受けながら居住域が展開した状況が復元される。

平安時代前期においてもこうした地形に大きな変化は確認できない。遺跡の南側は第1次調査地点と1m程度の比高を残している。こうした地点が耕作地として利用されるのは中世以降である。

10世紀における集落の中断を経て、集落が改めて成立する平安時代後期（11世紀～12世紀）の集落構造は以前とは全く異なる。現在の地割りに沿った方向を示す溝で区切られた屋敷地の集村景観が復元される⁴⁰。特に、12世紀には、東西方向について1町単位を基にした方形地割りがなされ、敷地北端と南端のやや低い地域には耕作地の広がりが確認される（第16次調査地点ほか）。さらに、鎌倉時代には、溝で区切られた開放的な屋敷地から、大形の溝を屋敷地周辺にめぐらせた閉鎖的な屋敷地空間へと変化する⁴¹。屋敷地の拡大も特徴的である。該期の屋敷地は、溝で区画された敷地に数棟の建物群と井戸の構成が一般的であり、中には墓を有する場合がある。瓦器や東播系の遺物や輸入陶磁器など、各地域からの流通品が数多く出土しており、流通拠点の様相をうかがわせる。瓦や呪符木簡、そして銅鏡などは宗教的建物の存在を彷彿とさせる。こうした状況は、殿下渡領「鹿田庄」の実態を反映していると考えられる。

鎌倉時代末には、屋敷地の配置は、第9次・11次・14次調査地点付近を軸に東西方向に並ぶ傾向を強め16世紀に至る。街道の存在も見え隠れしているようである。江戸時代（17世紀）に入ると、屋敷地から耕作地へと遺跡

の様相は大きく変化する。各調査地点において畦畔や野壺などが認められる。時代背景を考えると、江戸時代開始前後に行われた岡山城下町の再編による影響が想定される。ただし、18世紀には第18次調査B地点に船着き場⁹⁴や第18次調査A地点周辺に屋敷地が存在した可能性があり、近代に続く大庄屋の存在を想定させる資料が増えてきている。

【海・河川との関係】

本遺跡は旭川西岸平野の南端付近で、海に突き出すような地形に立地していることは前述したとおりである。弥生時代～古墳時代には、海との関連を窺わせる製塩土器や土鍾・石鍾が数多く出土する。また、瀬戸内海南岸や畿内からの搬入土器の存在も注目される。旭川西岸における集落の中で、一定の役割をもつ場所であったと考えられる。

その後も、平安時代前期の橋、そして同時代後期に属する傀儡回しの人形頭である猿形木製品⁹⁵や鎌倉時代末～室町時代初めに属する猿形木製品⁹⁶などは人や物資の盛んな流通を示しており、瓦器や国内外からの陶磁器類・砥石や石鍋など多様な出土品とあわせて、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端を端的に示している。

【藤原摂関家殿下渡領「鹿田庄」との関係】

鹿田庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁4（817）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされている⁹⁷。同時期の資料としては、第1次発掘調査地点（岡大病院外来診療棟）付近で確認された建物群や大形井戸（おおよそ8世紀後半～9世紀代初め）のみであったが、近年集落の西端に位置する第24次調査地点で8世紀後半の井戸が加わった⁹⁸。その内部からは絵馬が2枚重なって出土している。こうした資料は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考える上で重要な手がかりになろう。また、中世における流通拠点の性格も、鹿田庄の性格を考える上で重要である。加えて、近年の調査では、第25次調査地点において13世紀後半～末の烏帽子⁹⁹、第20次調査地点において16世紀の猿の水漬が出土しており¹⁰⁰、本地点の管理者が武士であったことをうかがわせる。

本章は、下記報告の文章の一部加筆・修正したものである。

山本悦景編 2017『鹿田遺跡10』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

註

- (1) 鎌木義昌 1962『第一編 原始時代』『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『朝政鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a. 山本悦景編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第5冊
b. 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第7冊
c. 空崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第21冊
- (4) a. 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書59
b. 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書84
- (5) 山本悦景編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第19冊
- (6) a. 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b. 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c. 高崎 東ほか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d. 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e. 高崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f. 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
g. 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
h. 高田恭一郎編 2000『北方地蔵遺跡2 北方敷ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
i. 柳瀬昭彦 1988『中溝遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡岡大実行委員会
j. 柳瀬昭彦 1988『南方釜田遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡岡大実行委員会

- (7) a 宇垣匡善編 1999『百間川原尾鳥道跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
 b 平井 勝編 1995『百間川原尾鳥道跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (8) a 高畑知功 1988『津島江道遺跡』岡山県埋蔵文化財報告 18
 b 草原孝典 1999『津島江道（岡北中）遺跡』岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度
- (9) 前掲註6)a～f文献
- (10) a 岡山市道跡調査団 1971『南方道跡発掘調査概報』
 b 岡山市道跡調査団 1981『南方（国立病院）道跡発掘調査概報』
 c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方道跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
 d 安川 満編 2016『南方道跡』岡山市教育委員会
- (11) 高橋 謙・正岡陸夫ほか1972『藤町道跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 1
 前掲註6)a文献
- (12) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
 b 正岡陸夫編 1984『百間川原尾鳥道跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
 c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾鳥道跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
 d 高田恭一郎編 2008『百間川原尾鳥道跡7 百間川二の叉手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- (14) 内藤善史編 1996『絵図道跡 南方道跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (15) a 中野雅美 1984『上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）道跡』岡山県埋蔵文化財報告 14
 b 中野雅美・根本修 1986『上伊福九坪道跡』岡山県史 考古資料編
- (16) 前掲註6)a～f文献
- (17) a 杉山一雄編 1998『伊福定因前道跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
 b 金田善敬編 2005『伊福定因前道跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
 c 龜山行雄編 2010『伊福定因前道跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- (18) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内道跡発掘調査報告第3冊
- (19) 出宮徳尚 1986『天瀬道跡』岡山県史 考古資料編
- (20) 高畑知功 1982『百間川釜基道跡1・百間川今谷道跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51
 前掲註30)文献
- (22) 宇垣匡善 1990『網浜茶臼山古墳・榎山109号墳の測量調査—古墳の前期古墳Ⅲ—』『古代古墳』第12集
- (23) 松本武彦 1993『岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団』『鹿田遺跡3』岡山大学構内道跡発掘調査報告第6冊
- (24) 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』岡山市教育委員会
- (25) 西谷真治・鎌本義昌 1959『金蔵山古墳』倉敷考古誌
- (26) 近藤義郎 1986『漆茶臼山古墳』岡山県史 考古資料編
- (27) 草原孝典 2004『ハガ道跡』岡山市教育委員会
- (28) 高橋伸二 2005『史跡貫田庵寺跡』岡山市教育委員会
- (29) 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻道跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- (30) a 中野雅美 1977『吉備における平城宮式瓦について』[川入・上東]岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
 b 草原孝典 2002『鹿田庄の設置背景』『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (31) 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (32) 南健太郎編 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内道跡発掘調査報告第33冊
- (33) 前掲註30)文献
- (34) 出宮徳尚 1985『岡山県二日市道跡』『日本考古学年報』35 日本考古学協会
- (35) 岡山市教育委員会 2006『大供本町道跡発掘調査現地説明会資料』
- (36) 光本 順 2004『日本園地系から世界園地系への移行に伴う構内座標の変更について』[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002]
 前掲註38)文献
- (38) 南健太郎編 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内道跡発掘調査報告第31冊
- (39) 山本悦世 2001『鹿田遺跡第12次調査』岡山大学構内道跡調査研究年報 18
- (40) a 野崎貴博 2010『鹿田遺跡第19次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008
 b 岩崎志保 2012『鹿田遺跡第22次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011
- (41) a 前掲註38)文献
 b 松本武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内道跡発掘調査報告第11冊
 c 山本悦世ほか 2008『鹿田遺跡第18次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007
- (42) 山本悦世 2008『鹿田遺跡第17次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006
- (43) a 前掲註38)文献
 b 光本 順編 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内道跡発掘調査報告第26冊

- c 山本悦世ほか 2011「鹿田道跡第20次調査」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2009』
- 94 a 山本悦世編 2017「鹿田道跡10」岡山大学構内道跡発掘調査報告第32冊
b 岩崎志保 2014「鹿田道跡 8」岡山大学構内道跡発掘調査報告第29冊
- 95 光本 順 2012「鹿田道跡第21次調査」『岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 96 前掲註58文献
- 97 a 山本悦世 2007「中世の集落構造と遷移—鹿田道跡の場合—」『鹿田道跡 5』岡山大学構内道跡発掘調査報告第23冊
b 山本悦世 2015「鹿田道跡の土地区画と岡山平野の桑里関連遺構」『桑里制・古代都市研究』30 桑里制・古代都市研究会
- 98 前掲註57文献
- 99 光本 順 2013「第18次調査B・C地点」『鹿田道跡 7』岡山大学構内道跡発掘調査報告第28冊
- 50 前掲註59文献
- 51 山本悦世 2007「鹿田道跡 5」岡山大学構内道跡発掘調査報告第23冊
- 52 「鹿田」の初出は12817（弘仁4）年、興福寺南円堂で行なわれた法華会の科米72石を「鹿田地子」であてたとする記事、「鹿田庄」の初出は1900（昌泰3）年、鹿田庄の地子を興福寺長講会科にあてたとする記事にみられるもので、いずれも『興福寺縁起』による。
鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・兎野史料と絵図」『新道道跡』岡山市教育委員会
- 53 前掲註52文献
- 54 山口肇治編 2018「鹿田道跡12」岡山大学構内道跡発掘調査報告第34冊
- 55 前掲註54 c 文献

第2章 調査に至る経緯と概要

第1節 調査に至る経緯と経過

a. 調査に至る経緯

本調査は、岡山大学医学部動物実験施設改修に伴う発掘調査である。岡山大学鹿田キャンパスでは、2014年に動物実験施設の増築が行われることとなり、自然生命科学研究支援センター動物資源部門鹿田施設の東側に接した本地点（以下A地点）において、発掘調査の計画がなされた。

本調査地点西側に建つ動物実験施設（西半部）では、本センター設置以前の1981年度の新営に際して岡山市・県教育委員会によって立会調査が実施された¹⁾。工事掘削後の調査区壁面調査であったが、壁面には中世の溝や土坑と思われる多くの遺構が確認された。したがって、隣接する本調査地点にも遺構の広がりが見られたため、発掘調査を実施した。1981年度に確認された遺構の詳細は不明確であったことから、当時の遺構確認にも期待がもたれた。また、本調査地点北側の第7次調査地点では、古墳時代初頭の遺構・遺物が報告されており、本地点にも各時期の遺構が広がっていることが予想された。

発掘調査開始後、外溝工事計画が進行する中で、同施設南側において排水槽設置のために発掘調査対象となる地点が追加された（以下B地点）。工事工程の都合からA地点と調査の同時完了を求められたため、調査員の増員などを行うことで発掘調査体制の強化をはかり、B地点の調査を同時進行にして対応した。

調査面積はA地点では273㎡で調査員2名が担当し、B地点の開始とともに3～4名で行った。B地点では22.5㎡で、調査員1名が担当した。

b. 調査と報告書の体制

調査主体	岡山大学	学 長	森田 潔
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	門岡 裕一
〃	〃	副センター長	新納 泉
調査研究員（調査主任・報告書作成）	〃	助 教	山口 雄治
調査研究員（調査担当・報告書作成）	〃	助 教	南 健太郎
調査研究員（調査担当）	〃	助 教	野崎 貴博
〃	〃	教 授	山本 悦世

運営委員会委員

【発掘調査年度（2014年度）】

財務・施設担当理事（センター長）	門岡 裕一	大学院自然科学研究科教授	
大学院社会文化科学研究科教授			（調査研究専門委員） 鈴木 茂之
（副センター長）	新納 泉	埋蔵文化財調査研究センター教授	
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義		（調査研究室長） 山本 悦世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二	施設企画部長	須崎 茂弘
大学院環境生命科学研究科教授・ 附属図書館長	沖 陽子		

【報告書作成年度（2018年度）】

財務・施設担当理事（センター長）	菅 誠治	大学院医歯薬学総合研究科教授	大橋 俊孝
埋蔵文化財調査研究センター教授 （副センター長）	山本 悦世	大学院社会文化科学研究科教授 （調査研究室長）	清家 章
大学院社会文化科学研究科教授・ 附属図書館長	今津 勝紀	大学院自然科学研究科教授 （調査研究専門委員）	鈴木 茂之
大学院社会文化科学研究科教授	松本 直子	施設企画部長	松山 忠生
大学院環境生命科学研究所教授	加藤 鎌司		

c. 調査の経過

【A地点】

表土掘削及び基礎の撤去は8月18日に開始し、27日に完了した。調査員1名が対応した。調査区東半では近代の耕作土を確認できたが、西半では弥生時代後期の基盤層まで、また南側の一部ではそれよりも深く建物基礎に伴う攪乱が及んでいた。

発掘調査は8月28日から開始し、調査員2名が担当した。近代の耕作土を下げると、近世の土坑が1基検出された。その後、層位ごとに調査を進め、中世では大型の溝や井戸・土坑・ピットなどを検出した。溝からは多数の遺物に加えて獣骨も出土した。有機質遺物は、資料の同定に備え、土ごと切り取って持ち帰った。10月24日に中世層までの調査を終了させた。この時点で、B地点における調査が開始となり、調査員1名の体制となった。

古代の遺構は、基盤層まで現代の削平が及んでいたA地点西半において土坑のみ検出した。続いて東半を古墳

時代前期前葉の層まで下げ、当該期の井戸・土坑・溝・小区画溝群などを検出した。この段階で、進行状況と工期を勘案して調査員2名を増員して調査を行った。小区画溝群は、分析のために一部断面を切り取って持ち帰った。その後、弥生時代後期の基盤層まで掘り下げを行い、溝を検出した。2014年11月17日にすべての作業を完了した。

なお、調査と同時並行で隣接する動物実験施設の改修工事も行われており、その影響で調査の中断を余儀なくされたこともあったが、大学施設企画部、建設業者と調整しつつ十分に安全面に配慮して調査を行った。現地説明会は11月1日に行い約100名の参加を得た。

【B地点】

表土掘削は10月23・24日に行った。調査員1名が対応した。調査区北側では排水管によって包含層が破壊されていたため、その南側が調査対象域となった。

発掘調査は10月27日から開始した。調査にあたってはA地点にいた調査員2名のうち、1名が担当することになった。近代層を下げると、中世の溝を検



小区画溝群検出風景



現地説明会の様子

図3 調査風景他

出した。他に古墳時代前期前葉の溝、弥生時代後期の帯状高まりと溝を確認した。その後、基盤層まで掘り下げを行い、2014年11月10日にすべての作業を完了した。

注

(1) 吉留秀敏・山本悦世・柴 一郎 1985「岡山大学構内遺跡調査研究年報1」岡山大学埋蔵文化財調査室

第2節 調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代前期前葉、古代～近世までの遺構が確認された。以下にその概要を述べる。

弥生時代後期～古墳時代前期前葉 (図4)

弥生時代後期では、A地点で溝7条・焼土溜まり、B地点で溝1条・畦畔と考えられる帯状高まりが、古墳時代前期前葉ではA地点で井戸2基・土坑7基・溝5条・小区画溝群が、B地点では溝3条が検出された。すなわち、A地点では井戸をはじめとする生活関連遺構が、B地点では畦畔といった生産遺構が確認されている。

弥生時代後期以前の地形は、A地点北半が高く、南東部が低くなる。弥生時代後期には、A地点の北端には焼土溜まりがあり、東半には南北方向の溝が走る。これらの溝は等高線に直行している。B地点では帯状高まりと溝が確認される。帯状高まりは畦畔と考えられ、CJ～CKライン間以南に展開するものと考えられる。こうした遺構配置は、旧地形の高低差と関連しているといえよう。

古墳時代前期前葉になると、地形はおおよそ平坦になる。A地点の南半では井戸がつけられる。東半では溝が前代とはほぼ同様の位置と同様の方向で展開する。これらには高い連続性がうかがえる。南東部では小区画溝群が確認された。B地点では溝があるのみである。

古代～近世 (図5)

古代では、A地点で土坑1基のみ確認された。中世前半では、井戸1基・土坑5基・溝10条が確認できた。



図4 遺構全体図 (弥生時代後期～古墳時代前期前葉) (縮尺1/300)

調査に至る経緯と概要

他に中世の遺構として土坑1基・ピット群がある。そのほとんどがA地点で確認された。中世前半には東西・南北方向の溝による区画が特徴的である。A地点の中央部を大型の溝が南北に走り、CE～CFライン間では東西方向の大型の溝がこれに接続する。この南北溝の西側には井戸があることから、これらの溝は屋敷地を区画する溝と考えられる。本調査地点は、その交点部の様相を明らかにした。これらの溝は13世紀前半～14世紀のものである。なお、本調査地点の北側約50mに位置する第7次調査地点の溝20～23に接続することから、屋敷地の南北幅が約57m、約1/2町であることが明らかとなった。

近世では土坑1基を確認した。

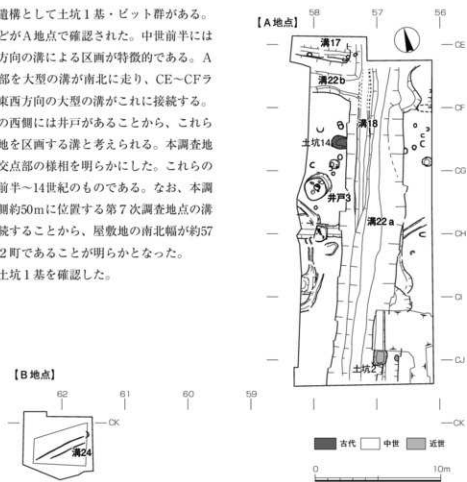


図5 遺構全体図 (古代～近世) (縮尺1/300)

第3章 調査の記録

第1節 調査地点と層序

a. 調査地点の位置

本調査地点は、岡山大学鹿田キャンパスの西南部に位置する。鹿田地区の構内座標では、A地点がCD56～CJ58区、B地点がCJ61～CK62区である（図6）。調査以前には、A地点は一部焼却炉として利用されていた。

報告済みの調査地点との関係は以下の通りである。本調査地点の北約50mには第7次調査地点、北西約80mには第6次調査地点、東約100mには第9・11次調査地点、第20次A地点・第25次調査地点がある。未報告ではあるが、第7次調査地点の西隣には第17次調査地点、南東約100mには第12・27次調査地点がある。

本調査地点の北側にある第6・7次調査地点では、微高地に展開する古墳時代初頭の竪穴住居のほか、12世紀～14世紀の屋敷地が報告されている¹⁾。東側の第9・11次調査地点、第20次A地点・第25次調査地点では、弥生時代後期～古墳時代にかけての水田域や11世紀～16世紀の屋敷地が報告されている²⁾。また、本調査地点の南側では、試掘・確認調査によって、中世以降の耕作地の広がり確認されている³⁾。このように周辺では、弥生～古墳時代にかけての集落や中世の屋敷地の展開に関する調査成果が得られている。本調査地点は、これら既往の調査成果の広がりや、鹿田遺跡の南西端部の状況を考える上で重要な位置といえる。

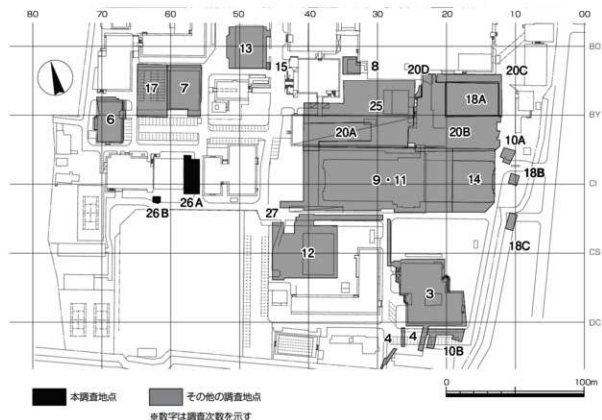


図6 調査地点位置図（縮尺1/3,000）

b. 層序

本調査地点は、A地点では近現代の建物建築に伴う破壊によって、その西半のほとんどが<10層>まで、また南北方向の大溝がつくられていたことによって、中央部では<13層>までの層位が破壊を受けていた。そのため、北・西・南側の調査区壁面の情報は断片的にならざるを得なかった。また、B地点の調査区北側断面についても同様である。ここでは、両地点の土層関係はもとより調査区内においても分断された土層を対応させつつ、層位と地形について報告する(図7～9、表1)。なお、本調査報告書内では基本土層の表記については< >を付けて表す。

本調査で確認された土層は13層に大別される。以下、各層の概要を記載する。

<1層>(大正期以降) 大正10～11年の医学校建設に伴う造成土および現在に至る工事関連の造成土である。標高は、A地点の北側で2.36m、南側で2.43mを測り、B地点では2.35mを測る。厚さは0.8m程度である。

<2層>(近代) 淡灰白色砂質土で明治～大正期の耕作土にあたる。医学校建設時に大きく削平を受けており、A地点の東半、B地点の南西部の一部にのみ検出された。上面の標高は1.55～1.46m前後を測り、厚さは0.1m程度である。遺物は出土していない。

<3層>(近世) 明緑灰褐色砂質土で鉄分を含む。A地点の東半およびB地点において確認できた。上面の標高は1.43～1.35mを測る。北側で高く、南へ行くほど低くなる。厚さは0.1m程度である。遺物は13号ポリ袋3袋程度である。土師器・近世陶磁器片を多く含むが、ほとんど小片である。

<4層>(中世前半) 緑灰褐色砂質土で鉄分を含む。上面の標高は1.35～1.26mを測る。A地点東壁の③地点では若干低くなるもの、④地点や南壁の⑤地点では再び高くなっている(図7、表1)。高低差はあるものの、調査区全体では概ね平坦であったと考えられる。厚さは0.05～0.16m程度である。

遺物は13号ポリ袋3袋程度である。吉備系土師器碗の破片が非常に多く、中世の磁器片も若干含む。そのほとんどが小片である。遺構は、A地点を南北に縦断する溝22aが掘り込まれていることを確認した。本層の時期は溝の時期から中世前半と考えられる。

<5層>(中世前半) 明灰茶褐色砂質土で鉄分・砂を含む。上面の標高は1.31～1.19mを測る。A地点の南西部が最も高く、周囲よりも0.05～0.1m程度高い。土層の厚さは0.1m程度である。

遺物は13号ポリ袋3袋程度である。吉備系土師器碗の小片が最も多いが、古墳時代の土師器や陶磁器片も若干含む。小片・細片がそのほとんどを占める。本層の時期は中世前半と考えられる。

<6層> 灰茶褐色砂質土で下方に向けて砂質が若干強まる。上面の標高は1.2～1.13mを測る。A地点では1.13～1.15mであるが、B地点では1.2mとなっており、南へ向けて高くなる。土層の厚さは、0.1m程度である。

遺物は13号ポリ袋1/4袋程度である。古墳時代の土師器小片が出土した。遺構は中世の溝20が掘り込まれていることを確認した。上下の土層との関係から中世前半～古墳時代前期前葉としか考えることができない。

<7層>(古墳時代前期前葉) 茶褐色砂質土でマンガンを顕著に含む。色調・マンガンの含有率によって、A地点南側以南では2層に分けることができる。上層の<7a層>はA地点の南部およびB地点にのみ確認される。マンガが多く、暗色を強める。上面の標高は、1.1～1.06mを測る。A地点北半の<7b層>は南半の<7a層>とほとんど標高差がないことから、<8層>以下の低位部に<7a・b層>が堆積しているといえる。地形は、B地点の方が若干高いものの、概ね平坦であるといえる。

遺物は、コンテナ(287L箱)1/2箱程度である。吉備型甕の破片が最も多い。中世の吉備系土師器碗も少量含むが、小片であり混入と判断される。遺構は、A地点では土坑4、小区溝溝群、B地点では溝12が掘り込まれていることを確認した。また、本層上面で古墳時代前期前葉の井戸1・2を確認した。

<8層>(弥生時代後期～古墳時代前期前葉) 淡灰黄色砂質土で灰色粘土を含む。A地点南東部でのみ確認されている。<9層>の落ち込む地点に堆積していることが予想される。上面の標高は0.83mであり、土層の厚さ

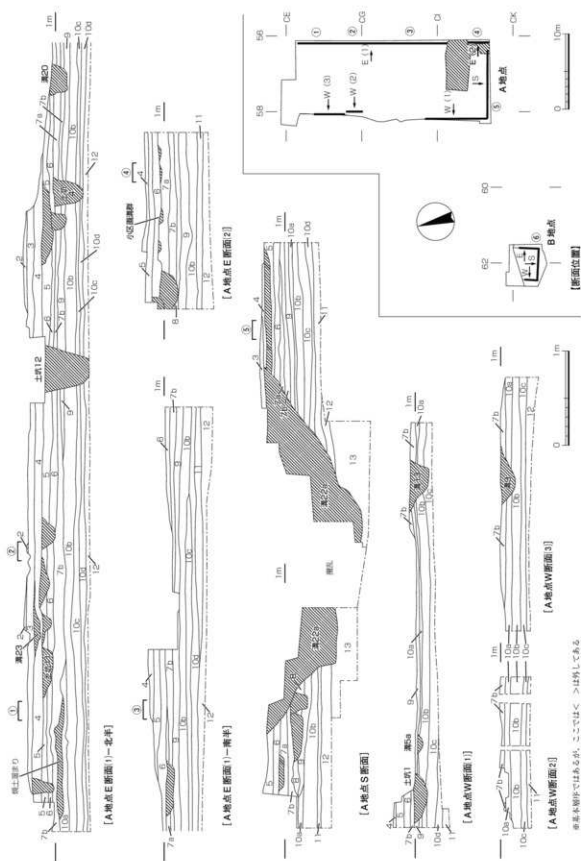


図7 A地点調査区断面および断面位置 (縮尺1/40・1/500)

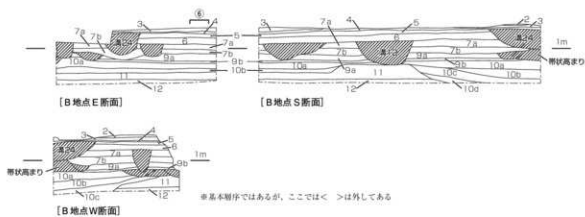
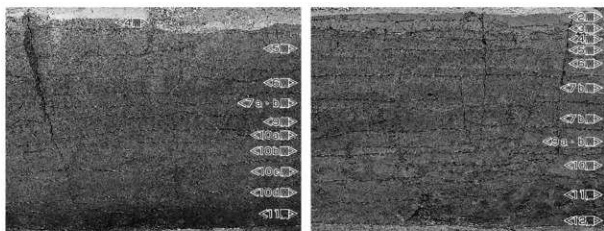


図8 B地点調査区断面 (縮尺1/40)



左:A地点南壁(北から) 右:B地点西壁(東から)

図9 調査区断面写真

表1 調査区断面における各層位レベル一覧 (数字は標高m)

断面位置	A地点				B地点
	①	②	③	④	⑤
<2層>	-	1.46	-	-	-
<3層>	1.43	1.43	-	-	1.35
<4層>	1.35	1.32	1.26	1.31	1.29
<5層>	1.19	1.22	1.2	1.25	1.26
<6層>	1.13	1.13	1.09	1.18	1.15
<7 a層>	-	-	-	1.07	1.08
<7 b層>	1.06	1.02	0.99	0.9	1.02
<8層>	-	-	-	0.83	-
<9 a層>	-	-	0.89	0.75	0.96
<9 b層>	-	-	-	-	0.83
<10 a層>	0.92	-	-	-	0.87
<10 b層>	0.82	0.86	0.79	0.62	0.84
<10 c層>	0.66	0.69	0.68	-	0.72
<10 d層>	0.55	0.64	0.61	-	0.58
<11層>	-	-	-	0.46	0.54
<12層>	0.51	0.32	0.51	0.39	0.53

は0.1m程度である。遺物は出土していないが、本層の時期は弥生時代後期～古墳時代前期前葉と考えられる。

<9層> (弥生時代後期～古墳時代前期前葉) 黒灰色粘質土で植物の影響による腐植土層であると考えられる。

<10層>が低くなるCFラインよりも南側で確認できる。B地点では、上層に明黄灰色粘土ブロックを多く含むことから、2層に分けた。上面の標高は、0.96～0.75mを測り、A地点の南東部が最も低い。土層の厚さは、0.1m程度である。

遺物は出土していない。遺構は、B地点において溝が確認された。本層における湿地環境を鑑みれば、水田の耕作土を形成する土層と考えられる。本層の時期は周辺の調査地点の成果から弥生時代後期～古墳時代前期前葉と考えられる。

<10層> (弥生時代後期) 明黄灰色粘質土で鉄分の沈着が顕著である。下層ほど砂を多く含み、4層に分けることができる。<10b層>は調査区全面に広がっているが、<10a層>は高位部に、<10c・10d層>は<11層>の低位部に堆積し、起伏のある面を形成する。概して<10a層>はA地点北半に堆積している。上面の標高は、北部で0.92m、南東部で0.62m、南西部で0.87mである。CHラインより南東へ向かって下がっていることが確認でき、その高低差は0.3m程度である。土層の厚さは、最も標高が高いA地点北部では0.41mであるが、低い南部やB地点では0.15m前後である。

遺物は出土していない。遺構は、A地点では焼土溜まりを、B地点では畦畔と考えられる帯状高まりを確認した。本層の時期は、周辺の調査地点の成果から弥生時代後期と考えられる。

<11層> (弥生時代) 黒灰色粘質土で植物の影響による腐植土層であると考えられる。A地点南半のみ確認される。上面の標高は、A地点の南東部で0.46m、南西部で0.54m、B地点では0.65mを測り、東部に向かって下がる。遺物は出土していない。弥生時代後期以前の堆積層であり、旭川西岸の弥生時代早～前期に確認される「黒色土」に対応する可能性が考えられる。

<12層> 黄褐色粘質土であるが、A地点の北側では青灰色を呈する。上面の標高は0.53～0.39mを測る。上層の<11層>と同様に南東に向かって下がる。遺物は出土していないが、弥生時代の基盤層と考えられる。

<13層> 灰色～暗灰色粘質土である。A地点の南壁において確認できた。上面の標高は約0.3mを測る。遺物は出土していないが、弥生時代の基盤層と考えられる。

c. 地形復元

本調査地点における古地形は、弥生時代後期以前におけるA地点南東部が低い状態から古墳時代前期前葉には平坦となって大きく変化するものの、それ以後の地形に大きな変化はない。ここでは上に示したデータから各時期の地形について復元してみたい。

弥生時代～古墳時代は<11層>～<7層>が相当する。<12層>段階ではA地点南東部が周囲に比べ0.1m程低い地形となっている。<11層>は、A地点南東部にのみ認められ、<12層>の低位部に堆積する。土質から湿地状を呈してたと考えられる。弥生時代後期の基盤層と考えられる<10層>も<12層>と同様の地形を呈する。A地点の北半には微高地が形成されて南部との高低差が0.3m程となり、地形に大きな高低差が生まれている。<9層>と<8層>は、<10層>の低位部に堆積する。特に<9層>は土質から湿地状を呈していた環境であったことがうかがわれる。古墳時代前期前葉の<7層>になると、それ以前の地形の高低差は解消されるようになり、標高1.07m前後で平坦となる。その後、中世前半の<6層>～<4層>は、A地点の北側よりも南側の方が若干高くなっている。以前の地形とはその高低が逆転していることから、土地改変によって地形環境が大きく変化している可能性がある。近世の<3層>では、若干北部が高くなり、南に向かって下がるものの、概ね平坦な地形となっている。

註

- (1) a 松本武彦・山本悦世編 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第11冊
 b 山本悦世編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第23冊
 (2) a 山本悦世編 2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第32冊
 b 山口雄治編 2018『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第34冊
 (3) 光本 順 2011「1. 学生サークル種新宮予定地」『紀要2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

検出面は<10層>～<7層>である。その時期は、<10層>が弥生時代後期、<9層>が弥生時代後期～古墳時代前期前葉、<7層>が古墳時代前期前葉と考えられる。弥生時代後期では、A地点で溝7条・焼土溜まり、B地点で溝1条・帯状高まりである。古墳時代前期前葉になると、A地点では井戸2基・土坑7基・溝5条・小区画溝群、B地点では溝3条である(図10)。A地点東半の弥生時代後期の溝と古墳時代前期前葉の溝は、ほぼ同様の位置に構築されていることから、これらの遺構には高い連続性をうかがうことができる。

以下、個別遺構の説明に当たっては、<10層>～<7層>検出遺構を合わせて記載することとする。



図10 弥生時代～古墳時代前期前葉遺構全体図(縮尺1/200)

a. 井戸

井戸1 (図11・12、図版1)

CH56区に位置する。<7層>で検出した。上面の標高は0.9m、底面は同-0.55mで、深さは1.45mを測る。平面形は円形と考えられる。南北は1.42mで、東西は遺構西部に破壊を受けていることから1.2mが残存する。全体として1.4m程度の規模と考えられる。底面は直径0.5m程度の円形を呈する。断面形は底面からはほぼ垂直に立ち上がった後に、標高0.4m付近から緩やかに開口する。

理土は28層に分層し、4群にまとめることができる。1群は1～4層、2群は5～16層、3群は17～23層、4群は24～28層である。1群は茶灰色を基調とする砂質土で、粘土ブロックを少量含む。2群は灰色を基調とする砂質土である。5～7層は粘土ブロックと少量の焼土を含む。8～9層は少量の粘土ブロックに加えて多量の炭を含む点特徴的である。9層からは土器片も出土した。10～13層も粘土ブロック・焼土・炭などを含み、特に11～13層には焼土が多く混じる。14～16層は粘土ブロックや炭が混じる。3群は、暗灰～黒灰色を基調とする粘質土である。全体として粘土ブロックと炭・焼土が混じる。粘土ブロックの含有量は下層ほど減少しており、焼土は上層の17・18層で確認される。炭は17～22層に含まれており、特に22層に多く土色が黒灰色を呈している。4群は炭化植物層と暗灰色を基調とする粘質土であり、粘土ブロックが少量含まれる。28層の下面は砂層となっている。28層の上面に完形の壺や甕(図12)が据え置かれていた。その上部には24層とした炭化植物層が堆積し、木材片も出土している。

以上の状況から、埋没過程を復元すると以下のようになる。井戸の廃棄に際して4群が投入される。28層上面に壺・甕が据え置かれ、26・27層で埋められる。24層の炭化植物層は、この段階で燃焼行為が行われたことを示唆するが、壁面にその痕跡は確認できなかった。その後、全体に炭や焼土を含んだ粘質土(3群)と砂質土(2群)が投入される。3・2群共に炭や焼

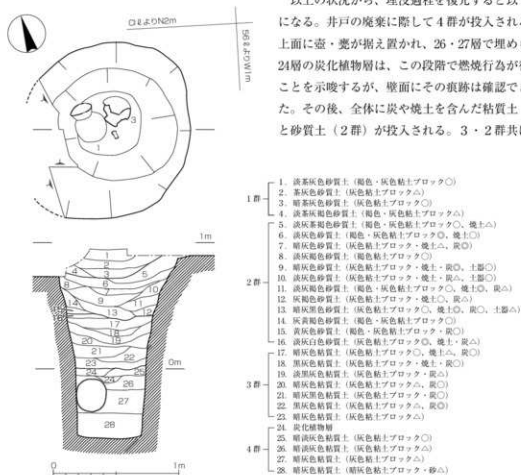


図11 井戸1 (縮尺1/30)

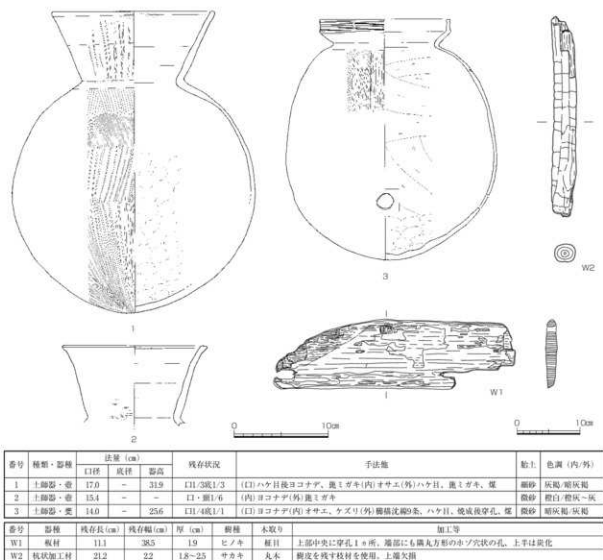


図12 井戸1出土遺物(縮尺1/4・1/6)

土が多量に含まれる層があるが、24層のような炭化植物が多量に含まれてはいないことから、燃焼行為があったとは考えにくい。最終的に1群の砂質土で埋没が完了する。

遺物は、コンテナ(28 $\frac{1}{2}$ 箱)3箱分で、壺・甕・鉢・高杯や板材・加工材といった木製品が出土した(図12)。これらのほとんどは4群埋土から出土したものである。

本井戸の時期は、出土遺物から古墳時代前期前葉に属すると考えられる。

井戸2(図13・14、図版2)

C157区に位置する。<7層>で検出した。上面の標高は0.93m、底面は同-0.7mで、深さは1.63mを測る。平面形は、南北1.6m、東西1.85mの楕円形と考えられる。底面は直径0.54m程度の円形を呈する。断面形は底面からはほぼ垂直に立ち上がった後に、西側では標高0.3m付近から緩やかに開口し、東側では同0.6m付近に段をもちながら開口するY字形を呈する。

埋土は31層に分層し、7群にまとめることができる。1群は1~4層、2群は5~14層、3群は15~21層、4群は22~26層、5群は27~29層、6群は30層、7群は31層である。1群は暗灰茶褐色を基調とする砂質土である。

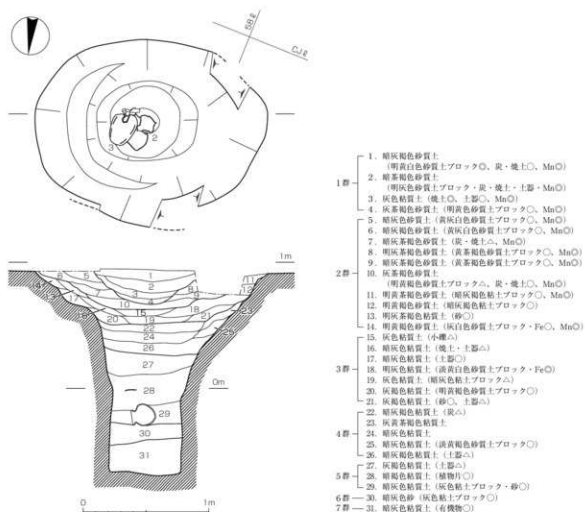
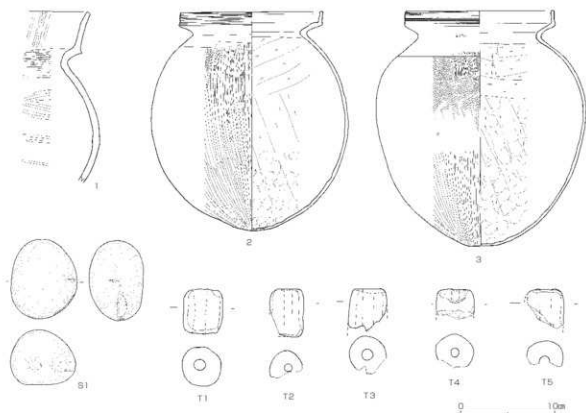


図13 井戸2 (縮尺1/30)

1・2層には特に砂質土ブロックと炭・焼土をよく含む。2群は暗茶褐色を基調とする砂質土(5～10層)と壁際に堆積する黄褐色を基調とする砂質土(11～14層)である。両層ともに砂質土ブロックを含む。3群は灰褐色を基調とする粘質土である。砂質土ブロックを全体的に含み、ところによって小礫や砂を含む。4群は暗灰褐色を基調とする粘質土である。ブロックなどの包含物をあまり含まない。5群は暗灰色を基調とする粘質土である。28層では植物片、29層では粘土ブロックや砂を含む。完形の土器(図14-2・3)を含む多くの土器と木製品などが出土した。6群は30層の粘質土ブロックを含む暗灰色砂層である。7群は31層の有機質を含む暗灰色粘質土である。

以上の状況から、埋没過程を復元すると以下ようになる。7・6群を投入した後に完形の甕2点を重ねて置き、29・28層で埋められる。その上層の4群はブロックをあまり含まない土層であることから、比較的丁寧に埋められた可能性がある。その後、ブロックをよく含む3・2群と、ブロック・炭・焼土を含む1群が投入され埋没が完了する。なお、1群には炭と焼土が多く含まれているが、燃焼材や層界面における被熱痕跡などは確認できなかったため、燃焼行為があったとは考えにくい。

遺物はコンテナ(28L/箱)3箱分で、壺・甕・高杯が出土した(図14)。完形の甕(図14-2・3)は4群から出土したもので、上下に重ねて置かれていた。他に土製品として土甌、石製品として敲石、1kgを超える板状



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法物	胎土	色調
		口径	底径	器高				
1	土師器・鉢	-	-	-	-	(口)ミガキ(内)ミガキ(外)ハケ目後ミガキ、煤	細砂	緑褐色
2	土師器・壺	14.8	3.9	23.1	口1/底1/1	(口)ヨコナデ(内)ナサエ、亀ヶズリ(外)縞横沈線6条、ハケ目後ミガキ、煤	細砂	緑褐色
3	土師器・壺	15.3	3.5	24.9	口1/底1/1	(口)ヨコナデ(内)ナサエ、亀ヶズリ(外)縞横沈線11条、ハケ目後ミガキ、煤	細砂	緑褐色

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形態・手法物	胎土	色調
T1	土師	4.8	4.2	4.2	82.5	孔径1.5cm(上)、1.3cm(下)、ナデ	細砂	淡褐色
T2	土師	5.1	3.6	2.5	49.7	孔径0.8cm(上・下)、ナデ	細砂	緑褐色
T3	土師	4.4	3.8	3.9	51.3	孔径1.1cm(上)、ナデ	細砂	淡褐色
T4	土師	3.1	4.0	3.5	42.0	孔径0.9cm(上)、ナデ	細砂	緑褐色
T5	土師	4.2	3.8	1.6	41.0	孔径1.1cm(上)、ナデ	細砂	暗褐色

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S1	最石	8.4	6.8	5.8	530.9	黒い石	腰部に磨打痕

図14 井戸2出土遺物(縮尺1/4)

の礫などが出土した。

本井戸の時期は、出土遺物から古墳時代前期前葉に属すると考えられる。

b. 土坑

土坑1(図15、図版2)

CJ58区に位置する。<9層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。検出面は標高0.98m、底面は同0.78mで、深さは0.2mを測る。平面形は、遺構北東部を残すのみではあるが、円形と考え

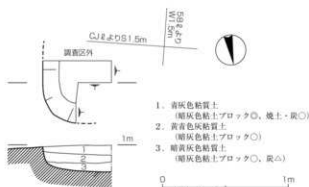


図15 土坑1(縮尺1/30)

られる。残存値で東西0.5m、南北0.55mを測る。断面形は箱形を呈する。

埋土は3層に分けられた。1層は青灰色粘質土で、暗灰色粘土ブロック・焼土・炭を含む。2・3層は黄灰色を基調とする粘質土である。3層には炭が少量混じる。

遺物は、土師器の小片が少数確認されるのみであるが、掘り込み面から本遺構の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。

土坑2 (図16、図版3)

CE56区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高1.05m、底面は同1.0mで、深さは0.05mを測る。平面形は、北および東半を破壊されるが、円形と考えられる。残存値は、東西0.78m、南北0.8mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土は1層で、淡黄褐色砂質土である。遺物は12号ポリ袋1/4袋が出土した。糞や高杯などの小片である。本遺構の時期は出土物から古墳時代前期前葉と考えておきたい。

土坑3 (図17、図版3)

CG56区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高1.03m、底面は同0.96mで、深さは0.07mを測る。平面形は、南半および東端部を破壊されているが、円形と考えられる。残存値は東西0.75m、南北0.5mを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土は1層で、黄灰褐色砂質土である。遺物は、12号ポリ袋1/5袋が出土したが、いずれも小片であり時期を特定することはできなかった。土師が1点出土した。本遺構の時期は検出面から古墳時代前期前葉と考えられる。

土坑4 (図18、図版3)

CG56区に位置する。<7層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。検出面は標高1.03m、底面は同0.54mで、深さは0.49mを測る。平面形は直径0.45mを測る円形である。断面形は椀状を呈する。土坑として報告するが、柱穴の可能性もある。

埋土は4層に分けられた。1～3層は灰褐色

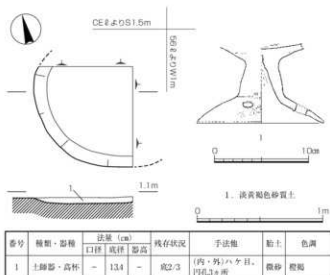


図16 土坑2・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

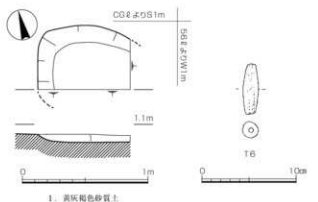


図17 土坑3・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

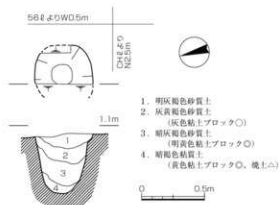


図18 土坑4 (縮尺1/30)

の砂質土で、2・3層には粘土ブロックが含まれる。4層は暗褐色粘質土で粘土ブロック・焼土を含む。

遺物は、12号ポリ袋1／8袋分が出土した。古備型甕が確認されるが、ほとんど小片である。本遺構の時期は出土遺物や掘り込み面から古墳時代前期前葉と考えられる。

土坑5 (図19、図版3)

CH56区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高0.85m、底面は同0.39mで、深さは0.46mを測る。平面形は、直径0.61mを測る円形と考えられる。断面形は椀状を呈する。

埋土は8層に分けられた。1～3層は灰褐色を基調とする砂質土である。4～6層は、暗灰褐色を基調とする粘質土で暗褐色粘土ブロックを含む。7・8層は暗灰褐色・暗灰色の粘質土である。

遺物は、12号ポリ袋1／8袋分が出土した。土師器を含むが小片である。本遺構の時期は出土遺物と検出面から古墳時代前期前葉と考えられる。

土坑6 (図20、図版3)

CF56区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高1.05m、底面は同0.85mで、深さは0.2mを測る。平面形は、南半を破壊されているが、直径0.76mを測る円形と考えられる。断面形は逆台形を呈する。

埋土は3層に分けられた。1・2層は淡灰色を基調とする砂質土である。3層も砂質土であるが、褐色粘土ブロックをよく含むことにより淡灰褐色を呈する。

遺物は、12号ポリ袋1袋分が出土した。製塩土器や甕を含むが小片である。本遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期前葉と考えられる。

土坑7 (図21、図版4)

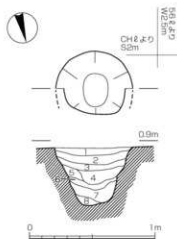
CI57区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高1.05m、底面は同0.67mで、深さは0.38mを測る。平面形は、北西部を井戸2によって破壊されているが、楕円形と考えられる。東西1.05m、南北は残存値で0.57mを測る。断面形は椀状と考えられる。

埋土は4層に分けられた。1層は黄灰褐色粘質土で、黄灰色粘土ブロックをよく含む。2層は灰褐色粘質土で灰色粘土ブロックを含む。3・4層は、黄灰色～淡黄灰色の粘質土で少量の灰色粘土ブロックを含む。4層には炭が少量混じる。

遺物は、土師器小片が3点出土した。本遺構の時期は出土遺物と切り合い関係から古墳時代前期前葉と考えられる。

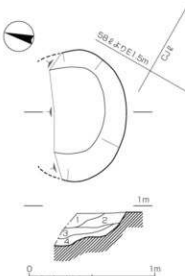
c. 溝

A・B両地点において溝を検出した(図10)。A地点の北部・東半およびB地点では南北方向、A地点の南部では



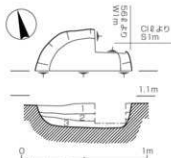
1. 明灰褐色砂質土 (炭△, FeO)
2. 明灰褐色砂質土 (FeO)
3. 灰褐色砂質土 (FeO)
4. 暗灰褐色粘質土 (暗褐色粘土ブロック△)
5. 灰褐色粘質土 (暗褐色粘土ブロック△)
6. 暗灰色粘質土 (暗褐色粘土ブロック△)
7. 暗灰褐色粘質土
8. 暗灰色粘質土

図19 土坑5 (縮尺1/30)



1. 黄灰褐色粘質土 (黄灰色粘土ブロック○)
2. 灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
3. 黄灰色粘質土 (灰色粘土ブロック△)
4. 淡黄灰色粘質土 (灰色粘土ブロック・炭△)

図21 土坑7 (縮尺1/30)



1. 暗淡灰色砂質土
2. 淡灰色砂質土
3. 淡灰褐色砂質土 (褐色粘土ブロック○)

図20 土坑6 (縮尺1/30)

東西方向に走る。溝が検出された<10層>では、A地点の南東部が最も低い地形を呈することから、これらの溝の多くは等高線に直行して走っているといえよう。同じく<7層>は概ね平坦ではあるが、A地点東部の溝は<10層>段階のものと並行しており、継続的に利用されていた可能性がうかがえる。また、B地点においては<9層>・<10層>で溝が検出された。

溝1 (図22、図版4)

CE57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.88m、底面は同0.71mで、深さは0.17mを測る。傾きはN0°であり、長さ1.5mほど確認された。幅は0.9mを測り、断面形は皿状を呈する。

埋土は3層に分けられた。これらは橙茶褐色を基調とする砂質土である。1層は粘土ブロックと砂をよく含み、2層は砂質土ブロックと炭を含む。

遺物は、12号ポリ袋1/3袋分が出土した。粟・鉢・高杯を含むが小片である。本遺構の時期は検出面から弥生時代後期と考えられる。

溝2 (図22、図版4)

CE57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.8m、底面は同0.71mで、深さは0.09mを測る。傾きはN25°Wであり、長さ1.2mほど確認された。溝1に切られているため、幅が0.26mのみ残存する。断面形は碗状を呈する。

埋土は1層で灰黄褐色粘質土である。粘土ブロックと砂を含む。

遺物は、12号ポリ袋1/3袋分が出土した。壺の破片である。本遺構の時期は出土遺物および切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

溝3 (図22、図版4)

CE57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.85m、底面は同0.72mで、深さは0.13mを測る。傾きはN24°Wであり、0.8mほど確認された。溝1に切られており、幅が0.5mのみ残存する。断面形は碗状を呈する。

埋土は2層に分けられた。1層は橙茶褐色砂質土で、砂と炭を含む。2層は明橙灰色砂質土で、砂質土ブロックと炭をよく含む。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

溝4 (図22、図版4)

CE57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.85m、底面は同0.75mで、深さは0.1mを測る。傾きはN45°Eであり、0.7mほど確認された。溝3に切られているため、幅は0.37mのみ残存する。断面形は碗状を呈する。

埋土は1層で、淡灰褐色砂質土で、粘土ブロックと砂を含む。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

溝5 (図23、図版4)

CJ56～58区に位置する。<10層>で検出した。中世の溝22aに切られており調査区の

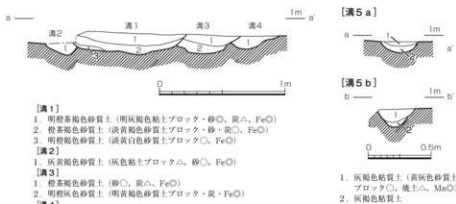


図22 溝1・2・3・4断面 (縮尺1/30)

図23 溝5断面 (縮尺1/30)

東西に分断されているが、走行方向および断面形状から同一の溝と判断し、西側を溝5 a、東側を5 bとして報告する。検出面はa断面で標高0.96m、B断面で同0.91m、底面はa断面で同0.86m、B断面で同0.76m、深さは0.1~0.15mを測る。東に向かって傾斜する。傾きはN65.5°Wであり、湾曲しながらも直線的に調査区外へ伸びているものと考えられる。幅は0.3mを測り、断面形は椀状を呈する。

埋土は2層に分けられた。1層は灰褐色粘質土で黄灰色砂質土ブロックや焼土を含む。2層は灰褐色粘質土である。

遺物は、12号ポリ袋1/8袋分が出土した。ほとんどが甕の破片である。本遺構の時期は検出面から弥生時代後期と考えられる。

溝6 (図24、図版4)

CE~CF56区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.92m、底面は同0.76mで、深さは0.16mを測る。傾きはN12°Eであり、直線的に調査区外へ伸びるものと考えられる。幅は0.57mを測り、断面形は椀状を呈する。

埋土は3層に分けられた。1層は明灰茶褐色砂質土、2層は灰黄茶褐色砂質土、3層は明灰橙褐色砂質土であり、いずれも砂質土ブロックを含む。3層のみ鉄分の沈着が多い。

遺物は、12号ポリ袋1/3袋分が出土した。甕・鉢・高杯を含むが小片である。他に土鍾が2点出土した。本遺構の時期は検出面から弥生時代後期と考えられる。

溝7 (図25、図版4)

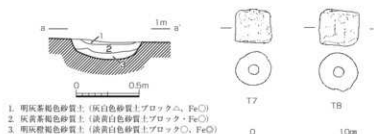
CE~CF56区に位置する。<10層>で検出した。検出面はa断面で標高0.94m、b断面で同0.86m、底面はa断面で同0.8m、b断面で同0.66m、深さは0.14~0.2mを測る。傾きはN15°Eであり、溝6と併走して直線的に調査区外へ伸びるものと考えられる。幅は0.63mを測り、断面形は椀状を呈する。

埋土は3層に分けられた。1層は淡灰茶褐色砂質土、2層は灰色砂質土で、砂を含む。3層は灰黄褐色砂質土で、粘土ブロックと砂を少量含む。

遺物は、12号ポリ袋1/3袋分が出土した。甕と高杯を含むが小片である。他に土鍾が1点出土した。本遺構の時期は検出面から弥生時代後期と考えられる。

溝8 (図26、図版4)

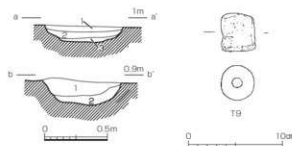
CI57区に位置する。<9層>で検出した。検出面は標高0.96m、底面は同0.79mで、深さは0.17mを測る。傾きはN73°Wであり、1.1m程確認された。直線的に伸びていると考えられるが、調査区東側では検出されなかった。幅は



1. 明灰茶褐色砂質土 (灰白色砂質土ブロック、Fe \circ)
2. 灰黄茶褐色砂質土 (淡黄白色砂質土ブロック、Fe \circ)
3. 明灰橙褐色砂質土 (淡黄白色砂質土ブロック、Fe \circ)

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形態・手法他	胎土・色調
T7	土鍾	3.5	3.8	3.7	561	孔徑1.1cm(上)、オサエ、ナデ、黒唐	微砂 灰褐色
T8	土鍾	3.6	4.2	4.1	745	孔徑1.1cm(上)、オサエ、ナデ、黒唐	微砂 灰褐色

図24 溝6断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)



1. 淡灰茶褐色砂質土 (砂 \circ)
2. 灰色砂質土 (砂 \circ)
3. 灰黄褐色砂質土 (暗褐色粘土ブロック、砂 \circ)

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形態・手法他	胎土・色調
T9	土鍾	4.0	3.6	3.7	636	孔径0.9cm(上)、1.2cm(下)、オサエ、ナデ	微砂 淡灰褐色

図25 溝7断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

0.54mを測り、断面形は碗状を呈する。

埋土は4層に分けられた。1・2層は灰褐色を基調とする粘質土で、灰色粘土ブロックを含む。3・4層は灰色を基調とする粘質土である。

遺物は、高杯片が少量出土した。本遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期前葉と考えられる。

溝9 (図27、図版4)

CF57区に位置する。〈7層〉で検出した。検出面は標高0.93m、底面は同0.73mで、深さは0.2mを測る。傾きはN104°Eであり、長さ2.6m程確認された。直

線的に伸びていると考えられるが、調査区東側では検出されなかった。幅は0.76mを測り、断面形は逆台形を呈する。

埋土は3層に分けられた。1・2層は灰褐色を基調とする粘質土、3層は暗灰色粘質土で、いずれも灰色粘土ブロックを含む。

遺物は、12号ポリ袋1/3袋分が出土した。壺・甕・高杯を含むが小片である。他に砥石も出土した。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。

溝10 (図28、図版4)

CF57区に位置する。〈7層〉で検出した。検出面は標高1.05m、底面は同0.95mで、深さは0.1mを測る。傾きN19°Eの溝であり、溝11に切られている。幅は0.42mを測り、断面形は碗状を呈する。

埋土は3層に分けられた。1層は淡灰白褐色砂質土で、2・3層は灰黄色を基調とする砂質土である。いずれも砂質土ブロックを少量含む。

遺物は、12号ポリ袋1/6袋分が出土した。壺・高杯を含むが小片である。本遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期前葉と考えられる。

溝11 (図29、図版4)

CF・CG57区に位置する。〈7層〉で検出した。検出面は標高0.99m、底面はa断面で同0.84m、b断面で同0.81m、深さは0.14～0.18mを測る。傾きN6°Eの溝であり、CGライン付近では西へ、CHライン付近では東へ流れる。幅はa断面で0.76m、b断面で0.91mを測り、断面形は皿状を呈する。

埋土は5層に分けられた。1・2層は灰褐色を基調とする砂質土で、灰色系の粘質土ブロックを含む。3層は暗灰色砂質土で黄灰色粘土ブロックをよく含む。4層は灰色粘質土で黄灰色粘土ブロックを含む。これらの埋土中には小礫が多く含まれていた。

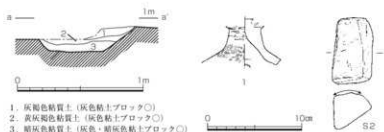
遺物は、12号ポリ袋1袋分が出土した。壺・甕・高杯を含むが小片である。他に土鍬が3点出土した。

本遺構の時期は検出面および出土遺物から古墳時代前期前葉と考えられる。



1. 明灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
2. 灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック△)
3. 灰色粘質土 (黄灰色粘土ブロック△)
4. 明灰褐色粘質土 (砂△)

図26 溝8断面 (縮尺1/30)

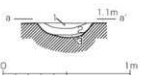


1. 灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
2. 黄灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
3. 暗灰色粘質土 (灰褐色粘質土ブロック○)

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法	粘土	色調
		口径	底径	器高				
1	土師器・高杯	-	-	-	実1/6	(内)ナデ(外)ハケ目殺ミゴキ、内丸4mm	磁砂	暗褐色

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石種	特徴
S2	砥石	6.5	4.0	3.8	170	砂質カルシウム系	上面に磨蝕

図27 溝9断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)



1. 淡灰白褐色砂質土 (褐色砂質土ブロック△)
2. 淡灰黄色砂質土 (淡黄色砂質土ブロック△)
3. 明灰黄色砂質土 (淡黄色砂質土ブロック△)

図28 溝10断面 (縮尺1/30)

溝12 (図30、図版5)

CK61・62区に位置する。<7層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。検出面は標高0.94m、底面は同0.76mで、深さは0.18mを測る。傾きはN20°Wであり、調査区外へ直線的に伸びている。幅は0.5mを測り、断面形は椀状を呈する。

埋土は4層に分けられた。1・2層は灰褐色を基調とする粘質土、3層は暗黄灰色粘質土、4層は暗灰色粘質土であり、いずれの層も灰色粘土ブロックを含む。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は検出面から古墳時代前期前葉と考えられる。

溝13 (図31、図版5)

CE57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.89m、底面は同0.54mで、深さは0.35mを測る。端部から0.96mほどしか確認できなかったため土坑の可能性もあるが、断面が緩く立ち上がることから溝と判断した。傾きはN19°Eである。幅は1.46mを測り、断面は皿状を呈すると考えられる。

埋土は6層に分けられた。1・2層は灰褐色を基調とする砂質土で、褐色粘土ブロックを含む。3・4層は灰黄色を基調とする砂質土で灰色粘質土ブロックを含む。5・6層は茶褐色を基調とする粘質土で、6層では少量の炭を含む。

遺物は、12号ポリ袋1/5袋分が出土した。鏃・鉢・高杯を含むが小片である。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期前葉と考えられる。

溝14 (図32、図版5)

CK61・62区に位置する。<10層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。検出面は標高0.79m、底面は同0.68mで、深さは0.11mを測る。傾きはN97°Eであり、調査区外へ直線的に伸びている。幅は0.44mを測り、断面形は皿状を呈する。調査区西壁では本溝の北側0.15mに溝状の落ち込みが確認できた。擾乱によって詳細を確かめることはできなかったが、この落ち込みが溝である場合、本遺構は畦畔に伴う溝の可能性が考えられる。

埋土は3層に分けられた。1層は黄褐色粘質土、2層は黄灰色粘質土で、両層ともに灰色粘土ブロックを含む。

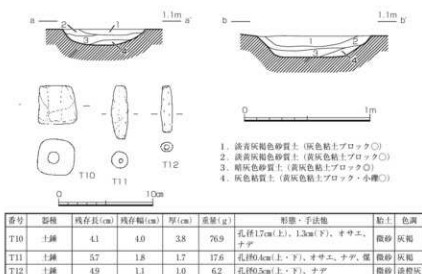


図29 溝11断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

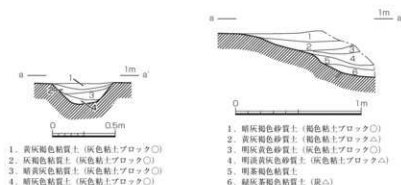


図30 溝12断面 (縮尺1/30)

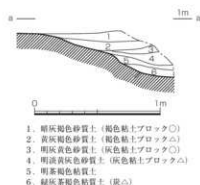


図31 溝13断面 (縮尺1/30)

3層は灰色粘質土である。

遺物は出土しなかった。本遺構の時期は検出面から弥生時代後期と考えられる。

溝15・16 (図33、図版5)

CK61・62区に位置する。<9層>で検出した。溝15の検出面は標高0.92m、底面は同0.81mで、深さは0.11mを測る。幅は0.3mで断面は碗状を呈する。埋土は3層で、灰色系の粘質土である。

溝16の検出面は標高0.9m、底面は同0.82mで、深さは0.08mを測る。幅は0.3mで断面は碗状を呈する。埋土は3層で、灰色を基調とする粘質土である。

これらの溝は傾きN76°Eであり、0.5m程離れて並行に走っていることから、その間には畦畔の存在が想定されるものの、両溝の間隔が一定でないこともありその評価は確定できない。遺物は出土しなかったが、検出面から本遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期前葉と考えられる。

d. 耕作関連遺構

帯状高まり (図33、図版5)

CK61・62区に位置する。この高まりは<10層>上面に北東～南西方向に形成されており、溝12・15・16に切られる。両脇には<9層>が、上部には<7層>が堆積する。

高まりは、上面の標高が0.92m、下面が0.8mであり、高さは0.12mを測る。幅は0.5m程度である。<10層>上面に1～6層を盛って構築されている。灰色を基調し、灰褐色～黄灰色を呈する粘質土であり、黄灰色粘土ブロックを含む。<10層>に由来する土を盛ったものと考えられる。6層に細分できることから、数段階にわたり構築・補修された可能性が考えられる。本遺構は畦畔の可能性がある。

遺物は出土しなかったが、検出面から本遺構の時期は弥生時代後期以前と考えられる。

小区画溝群 (図34、図版6)

CI・CJ56区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高1.0mである。東西・南北に走る幅0.2～0.25m程、深さ0.06～0.1m程、断面碗形の溝によって東西0.55m、南北1.1m以上の不整形長方形に空間が区画される。溝はaとbは接続するものの、cとは接続しない。検出された

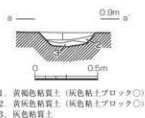


図32 溝14断面 (縮尺1/30)

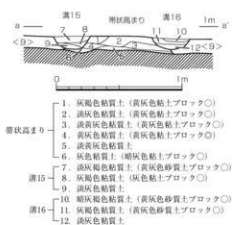


図33 帯状高まり・溝15・16断面 (縮尺1/30)

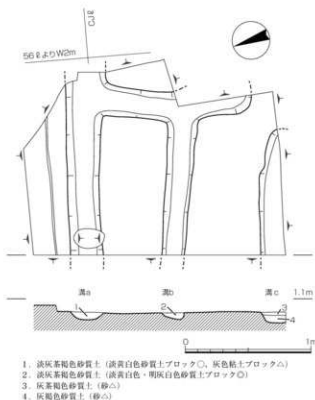


図34 小区画溝群 (縮尺1/30)

範囲は2×1.6mと狭いものの、調査区東・南壁面観察からは溝aとcの外側にも展開している可能性が高い。

溝の埋土は1～2層で、砂やブロックを少量含む淡灰茶褐色砂質土～灰茶褐色砂質土である。遺物は、12号ポリ袋1/8袋分が出土した。甕や高杯を含むが小片である。本遺構の時期は出土遺物と検出面から古墳時代前期前葉と考えられる。

本遺構は島の可能性を考え、断面の軟X線観察および花粉、プラント・オパール分析を実施した。軟X線分析では攪乱によって土壌構造が十分に観察できず、花粉、プラント・オパール分析ではイネやジュズダマ属の植物珪酸体が検出されたものの、その量は少なかつたため、島であると断定することはできなかった（本巻自然科学的分析参照）。しかし、溝によって区画された空間が連続的に配置される点は、島を想起させるものであり、ここでは耕作関連遺構に含めて報告した。今後、その評価を慎重に行っていく必要がある。

e. 焼土溜まり

CE56区に位置する。<10層>から掘り込まれていることを調査区断面から確認した。検出面は標高1.0m、底面は同0.87mで、深さは0.13mを測る（図35、図版5）。遺構東半部は調査区外であるが、平面形は不整形円形と考えられる。東西1.1m以上、南北は2.2mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。

埋土は1層で、焼土をよく含む砂質土である。焼土の分布には粗密が認められ、南半に偏在している。本遺構の底面や側面に被熱痕跡などは確認できなかった。遺物は出土していない。

本遺構は焼土などを廃棄した土坑の可能性があり、掘削面から弥生時代後期と考えられる。

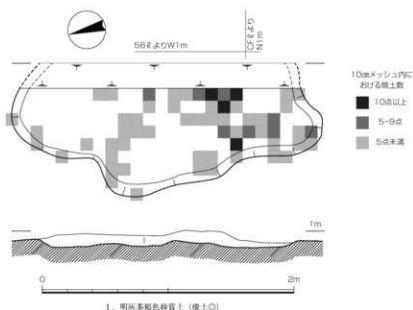


図35 焼土溜まり（縮尺1/30）

第3節 古代の遺構・遺物

<6層>に対応する遺構群であり、土坑1基を検出した（図36）。検出できたのはA地点の西部のみであり、極めて遺構密度が稀薄といえる。

a. 土坑

土坑8（図37・図版8）

CF57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.91m、底面は同0.3mで、深さは0.61mを測る。平面形は楕円形で、東西1.52m、南北1.04mを測る。断面形は逆台形を呈する。

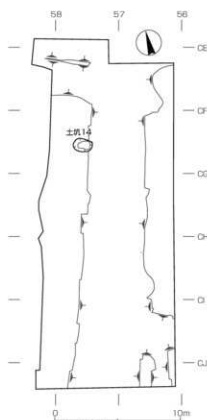


図36 古代遺構全体図 (縮尺1/300)

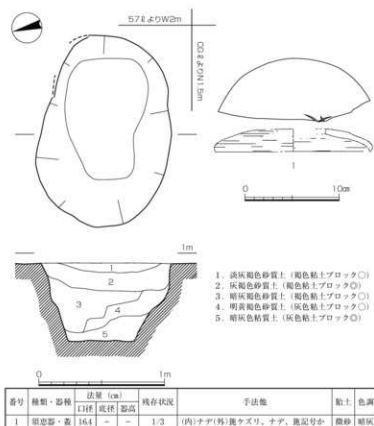


図37 土坑8・出土遺物 (縮尺1/30×1/4)

埋土は5層に分けられた。中世の土層とは異なり、全体的に砂の含有量が少ない。1～4層は粘土ブロックを含む砂質土で、上層の1～3層は灰褐色を基調とし、4層は明黄褐色を呈する。5層は暗灰色粘質土で粘土ブロックをよく含む。

遺物は、12号ポリ袋1/2袋分が出土した。須恵器片を含む。本遺構の時期は出土遺物から9世紀と考えられる。

第4節 中世前半の遺構・遺物

検出面は〈5層〉・〈4層〉であり、両層ともに中世前半に属する。井戸1基・土坑5基・溝10条が中世前半の遺構として認識できたが、土坑1基とピット群については中世としか判断できなかった(図38)。また中世後半の遺構は確認できなかった。本調査地点では、中世後半の遺構が稀薄と考えられることから、遺構出土遺物が少数であっても、吉備系土師器碗等の破片が出土している場合は、その遺構の時期を中世前半と判断した。

13世紀前葉では、東西方向に走る溝17と南北方向に走る溝18による区画が特徴的である。その後、大型の溝22a・bによって区画され、14世紀末で継続する。これらの溝は、本調査地点の北側約50mにある第7次調査地点の溝20～23に接続すると考えられ、屋敷地の区画をなす。南北に走る溝22aの両側には、井戸や土坑があることから屋敷地の存在が示される。区画の規模は、東西に走る第7次調査地点の溝20～23と本調査地点の溝22b間の距離が南北約57mで、約1/2町であることが明らかとなった。

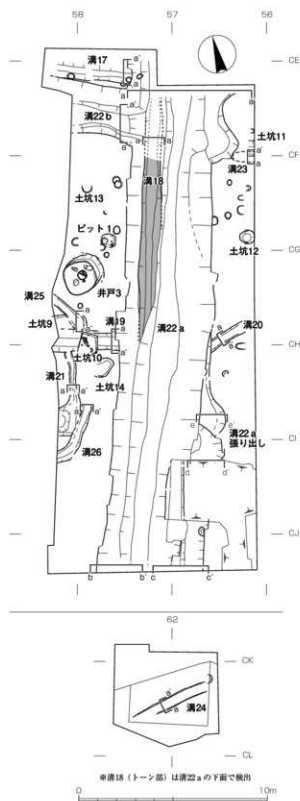


図38 中世前半遺構全体図 (縮尺1/200)

a. 井戸

井戸3 (図39~42, 図版7)

CG57・58区に位置する。<10層>で検出した。新段階と古段階の2段階がある。ただし、古段階の埋土は新段階の裏込めの可能性もある。古段階では、検出面は標高0.9mであるが、埋土の標高は1.15mまでである。底面の標高は-0.65mであることから、本遺構の深さは少なくとも1.8m以上である。平面形は、新段階によって破壊を受けているため定かではないが、方形の可能性が考えられる。断面形は、底部から直線的に立ち上がる。

埋土は18層に分層し、5群にまとめることができる。1群は31~32層、2群は33~36層、3群は37~39層、4群は40~43層、5群は44~48層である。1群は、灰褐色を基調とする砂質土で粘土ブロックや砂を含む。2群は、淡灰色を基調とする粘質土である。3群は灰褐色を基調とする粘質土で、砂や炭・焼土を含む点が多数である。4群は灰色を基調とする粘質土で、粘土ブロックや砂を含む。5群は暗灰色を基調とする粘質土で、粘質土ブロックや砂を含む。また46層には有機物が含まれる。

遺物は吉備系土師器碗の小片が数点出土したのみである。

新段階では、検出面は標高1.15mであり、底面は同-0.96m、深さは2.11mを測る。平面形は東西1.7m、南北1.7mの隅丸方形を呈する。底面も同様に隅丸方形であり、東西1.73m、南北1.62mを測る。東側はオーバーハングする。断面形は、底面からはほぼ垂直に立ち上がるが、東側は古段階の埋土の影響であろうか緩い凹凸をもって立ち上がる。底面中央部やや東寄りには曲物が据え置かれており、その周囲には人頭大の礫が平坦な面を上にした状態で3点出土した。これらの礫はその中心点から0.7~0.8m離れて置かれている。本来は南東部にも礫が存在し、井戸枠の礎石として方形に配置されていたものと考えられる。

埋土は30層に分層し、6群にまとめることができる。1群は1~7層、2群は8~11層、3群は12~18層、4群は19~26層、5群は27~29層、6群は30層である。1群は淡灰色を基調とする砂質土で、1・

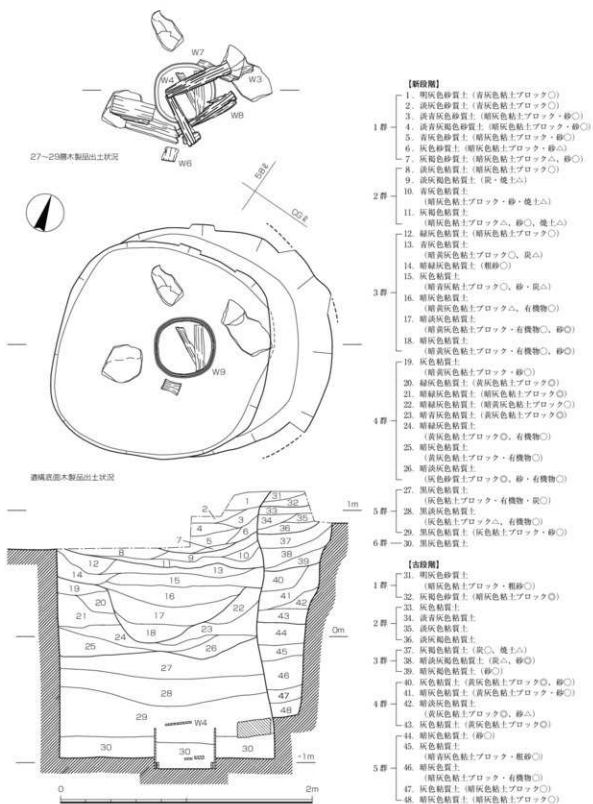
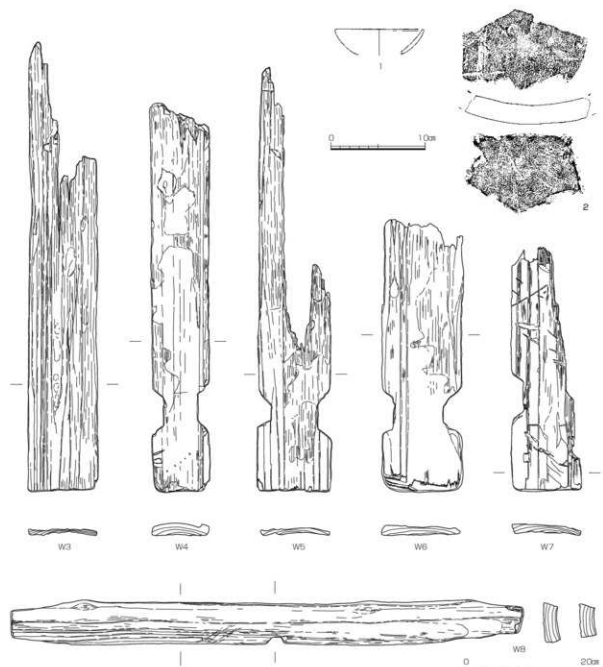


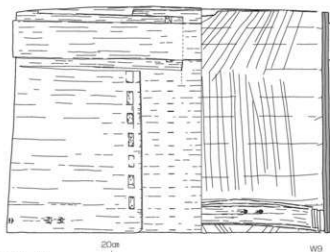
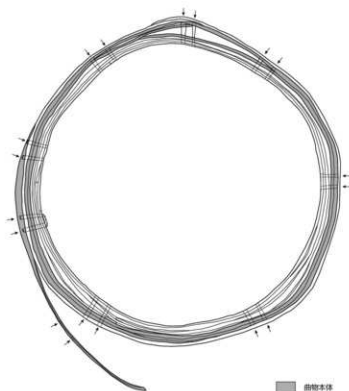
図39 井戸3 (縮尺1/30)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法他	胎土	色調
		口径	底径	器高・厚				
1	土師器・椀	9.4	-	-	131/5	(内・外)ヨコナデ	微砂	淡橙白褐
2	埴土質・平瓦	-	-	2.6	-	(内)布目織(外)格子目ヲキ後ヨコナデ	細砂	灰白
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	縦横	水取り	加工等	
W3	井戸枠立板	71.5	11.2	0.5-1.1	スギ	板目	水口平頭。平滑な仕上げ	
W4	井戸枠立板	61.8	9.4	1.2-2.0	スギ	板目	下端に左右対称の抉り。水口平頭	
W5	井戸枠立板	66.5	11.8	0.6-1.6	スギ	板目	下端に左右対称の抉り。水口平頭	
W6	井戸枠立板	43.4	13.0	0.9-1.8	スギ	板目	下端に左右非対称な抉り(右側が大きく抉られる)。水口平頭	
W7	井戸枠立板	38.7	11.0	0.9-1.5	スギ	板目	下端に抉り(左右非対称であり、位置も異なる)。水口平頭	
W8	井戸枠残木	81.5	7.1	2.0-2.5	スギ	板目	中央に片側だけの抉り。両水口をホゾ状に加工	

図40 井戸3出土遺物1 (縮尺1/4・1/6)

2層には青灰色粘土ブロックを含み、3～7層には暗灰色粘土ブロックと砂が含まれる。2群は灰褐色を基調とする粘質土で、粘土ブロックと砂に加えて、炭や焼土を少量含む。3群は灰色～暗灰色を基調とする粘質土で、粘土ブロック・砂・炭を含む。16～18層は土坑状に落ち込み、土器小片や有機物などが少量含まれている。4群は暗緑灰色～暗灰色を基調とする粘質土であり、粘土ブロックと砂を含む。24～26層では、上記に加えて有機物を含む。5群は黒灰色粘質土であるが、包含物の差異によって分けられる。28層は粘土ブロックと有機物を含むが、27層はこれらに加えて土器片や炭を少量含む。6群は黒灰色粘質土単層である。本井戸の底面に据えている曲物の中と周囲に堆積しているもので、構築段階の土層と考えられる。曲物の周囲にある礎石と考えられる人頭大の礫が本層の上に置かれている点も、30層が構築段階の土層であることを示している。



番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	本取り	加工等
W9	曲物	51.5	49.6	33.1	スギ	様目	2枚合わせ、蓋の厚さ4mm、内面ケズリ、ケジネ、内面下部に補強材を4枚まわし、ヒモで固定。厚さ2つ1組で8ヶ所、全面10段以上の横段積じ

図41 井戸3出土遺物2 (縮尺1/6)

が、27層はこれらに加えて土器片や炭を少量含む。6群は黒灰色粘質土単層である。本井戸の底面に据えている曲物の中と周囲に堆積しているもので、構築段階の土層と考えられる。曲物の周囲にある礎石と考えられる人頭大の礫が本層の上に置かれている点も、30層が構築段階の土層であることを示している。

曲物および3点の礎石は、新段階の掘り方の中央に位置しているわけではなく、東に寄って配される。そのため、東側は礫が壁面にほとんど接するのに対し、西側では幅広く残っており、余掘り部分が多い。

なお、冒頭でも述べたように、古段階の埋土は新段階の裏込めである可能性も考えられる。それは、曲物や礎石が新段階の中央部に配されていないこと、および西側の余掘りの幅が広いことによる。前者では、古段階も含めた掘り方を考えれば曲物などはおよそ中央部に位置し、後者では、井戸の廃棄に際した井戸枠材の抜き取り等に伴う掘り返しによって生じたとも考えられる。本井戸では、時間差の他にこうした可能性も残す。

遺物は、コンテナ(28リットル/箱)3箱分であるが、ほとんどが井戸枠に用いられた板材であり、土器片は極め

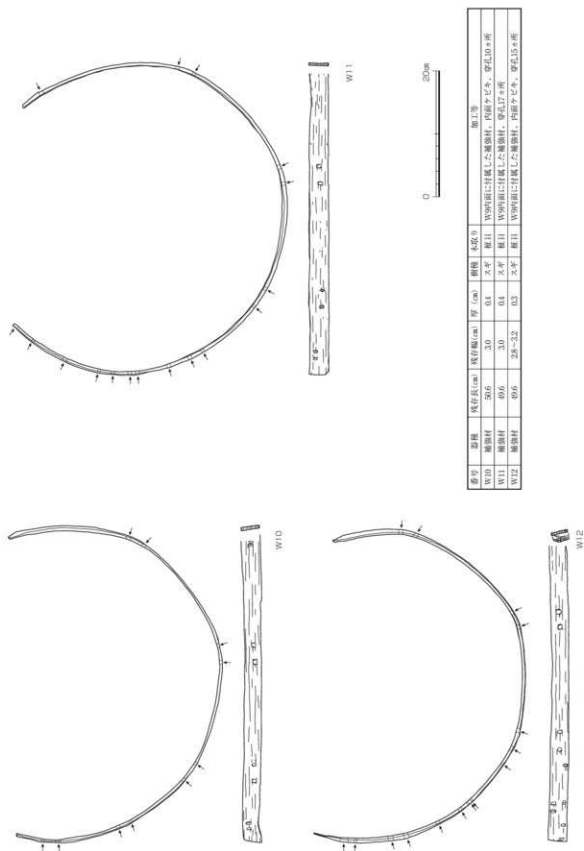


図42 井戸3出土遺物3 (縮尺1/6)

て少量であった(図40~42)。完形の曲物(図41)には、その底部内側に補強材として籐が4重に回されており、アサ類と思われるヒモによって固定されていた。曲物内からは他に籐が3枚出土しており(図42)、これらも補強材であったと考えられる。井戸枠の立板や椀木(図40-W3~8)は曲物(図41)の上部に例れ込むような状態で出土した。本井戸は、礎石の配置から方形縦板組の井戸枠が設置された、方形の井戸であったと考えられる。

本井戸の時期は、出土遺物から14世紀代と考えられる。

b. 土坑

土坑9(図43、図版8)

CG58区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.72m、底面は同0.5mで、深さは0.22mを測る。平面形は、遺構西部が調査区外へ伸びるものの、長方形と考えられる。東西1.71m以上、南北0.93mを測る。断面形は逆台形を呈する。溝19・25に切られる。

理土は6層に分けられた。1層は、明緑灰褐色砂質土で灰色粘土ブロックを含む。2~4層は灰褐色を基調とする粘質土であり、黄灰色粘土ブロックや砂を含む。5・6層は、暗青灰色・灰色粘質土で、6層では包含物をあまり含まない。

遺物は、12号ポリ袋1袋分が出土した。吉備系土師器椀・皿・鍋などが確認されるが、ほとんど小片である。本遺構の時期は出土遺物から12世紀末~13世紀初頭と考えられる。

土坑10(図44・45、図版8)

CG・CH57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.85m、底面は同0.56mで、深さは0.29mを測る。平面形は、南西部を一部破壊されるが、方形と考えられる。東西1.08m、南北1.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。

理土は8層に分けられた。1・2層は、淡灰色・淡灰褐色を呈する砂質土で、共に褐色粘土ブロックを含む。3~6層は灰褐色を基調とする砂質土であり、包含物をあまり含まない。7・8層は、灰色を基調とする粘質土で、土坑底面と壁面に薄く堆積して

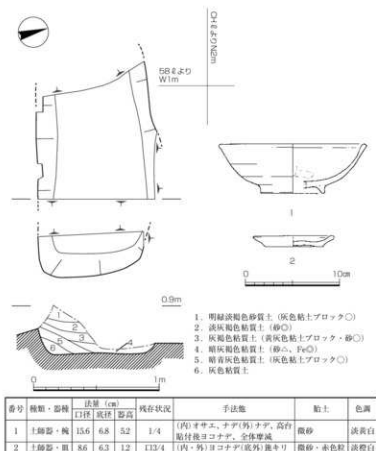


図43 土坑9・出土遺物(縮尺1/30・1/4)

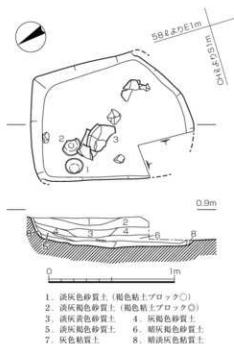
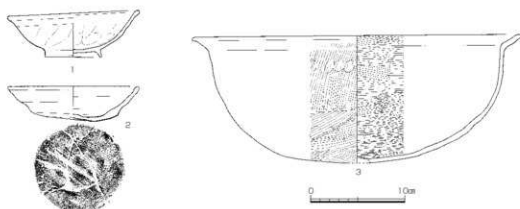
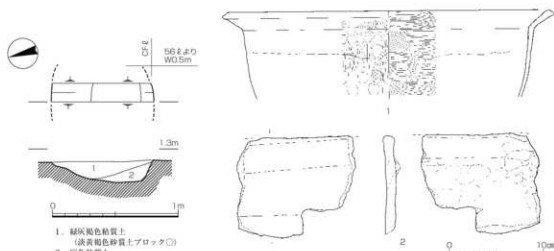


図44 土坑10(縮尺1/30)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法態	胎土	色調
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	14.0	6.0	4.3~5.0	1/1	(内)オサエ、ナデ(外)ナデ(底外)高台貼付後ヨコナデ	微砂	白帯
2	土師器・杯	13.5	7.1	3.5	1/2・3或1/1	(内・外)ヨコナデ(底外)板目織	微砂	淡褐色
3	土師器・碗	35.0	-	13.4	1/2・3	(内)オサエ、ハケ目(外)口縁ナデ、胴部オサエ、ハケ目、底	微砂	淡褐

図45 土坑10出土遺物 (縮尺1/4)



1. 緑灰褐色粘質土
(淡黄褐色砂質土ブロック付)
2. 灰色粘質土

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法態	胎土	色調
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	35.2	-	-	1/1・6	(内)ハケ目(外)口縁ナデ、胴部オサエ、ハケ目、ナデ、内外面度	粗砂	橙褐
2	土師器・壺	-	-	-	-	受け部片(内)ヨコナデ(外)オサエ、ヨコナデ、貼付突起、剥落面しい	粗砂	暗褐

図46 土坑11・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

いる。木材等の痕跡の可能性はある。

遺物は、12号ポリ袋1袋分が出土した。吉備系土師器碗・鍋が確認されるが、小片が多い。本遺構の時期は出土遺物から13世紀前葉と考えられる。

土坑11 (図46、図版8)

CE56区に位置する。〈5層〉から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。検出面は標高1.21m、底面は同1.04mで、深さは0.17mを測る。調査区端部で検出されたことから平面形は明らかではない。南北0.81m、東西は残存値で0.15mである。断面形は碗状を呈する。

埋土は2層に分けられた。1層は緑灰褐色粘質土で淡黄褐色砂質土ブロックを含む。2層は灰色粘質土である。

遺物は、12号ポリ袋1袋分が出土した。吉備系土師器碗・鍋が確認されるが小片である。本遺構の時期は出土

遺物と掘り込み面から中世前半と考えられる。

土坑12 (図47、図版8)

CF56区に位置する。<5層>で検出した。検出面は標高1.22m、底面は同0.52mで、深さは0.7mを測る。平面形は直径0.8mを測る円形である。断面形は逆台形を呈する。

埋土は8層に分けられた。1～4層は灰褐色を基調とする砂質土で、1・3層に粘土ブロックを含む。5～7層は淡黄灰褐色～淡灰色の砂質土であり、8層は暗灰色砂質土である。5層以下では包含物をあまり含まない。

遺物は、12号ポリ袋1/2袋分が出土した。吉備系土師器碗・瓦などが確認されるが、ほとんど小片である。本遺構の時期は出土遺物から中世前半と考えられる。

土坑13 (図48、図版9)

CF57区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高0.97m、底面は同0.91mで、深さは0.06mを測る。平面形は、北半部を破壊されているが、直径0.52mを測る円形と考えられる。断面形は浅い皿状を呈する。

埋土は1層で、炭を含む淡灰色砂質土である。遺物は、12号ポリ袋1/8袋分が出土した。吉備系土師器碗の小片である。本遺構の時期は出土遺物から中世前半と考えられる。

土坑14 (図49、図版9)

CH57区に位置する。<7層>で検出した。検出面は標高1.05m、底面は同0.8mで、深さは0.25mを測る。平面形は、西端部を一部破壊されるが、楕円形と考えられる。東西0.96m、南北0.9m以上を測る。断面形は皿状を呈する。

埋土は3層に分けられた。1層は淡青灰褐色粘質土で、灰色粘土ブロックを含む。2・3層は黄灰色を基調とする粘質土で、2層には灰色粘土ブロックが含まれる。

遺物は出土していないが、本遺構の時期は中世と考えられる。

c. 溝

溝17 (図50、図版9)

CE57・58区に位置する。<5層>で検出した。溝22bに切られている。検出面は標高1.1m、底面は同0.15mで、深さは0.95mを測る。明確な底面を検出できたわけではないため、本来の底面はもっと低い可能性もある。傾きはN69°Wである。幅は現状で1.4mを測り、断面形状は不明確である。

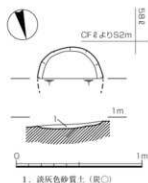
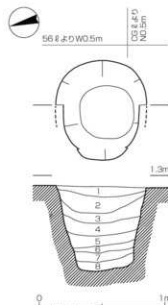


図48 土坑13 (縮尺1/30)



1. 灰褐色砂質土
2. 灰褐色粘土ブロック付砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 黄灰褐色砂質土
5. 淡黄灰褐色砂質土
6. 淡灰色砂質土
7. 淡黄灰色砂質土 (淡黄色粘土ブロック付)
8. 暗灰色砂質土

図47 土坑12 (縮尺1/30)

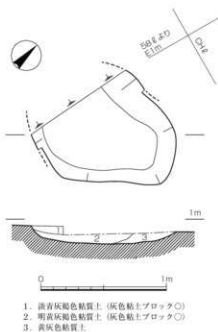


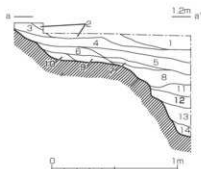
図49 土坑14 (縮尺1/30)

埋土は14層に分けられた。1～5層は淡灰～灰色を基調とする砂質土で、1層に褐色粘土ブロックをよく含む。6～10層は灰褐色を基調とする砂質土で、8・10層に褐色粘土ブロックを含む。11・12層は灰色を基調とする粘質土であり、灰色粘土ブロック・木質・炭を含む。13・14層は暗灰色を基調とする粘質土である。包含物は上層と同様であるが、その量は少な

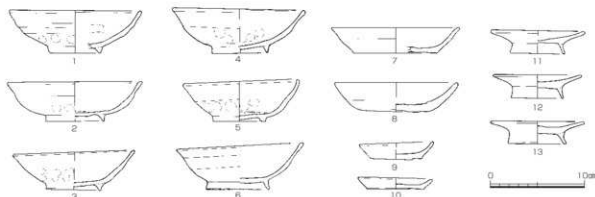
い。

遺物は、コンテナ (28 $\frac{1}{2}$ 箱) 1/3箱分が出土した。吉備系土器 器碗・杯・皿・台付皿の他に、鍋などがあるが、そのほとんどは小片である。

本遺構の時期は出土遺物から13世紀前葉と考えられる。



1. 淡褐色砂質土 (褐色粘土ブロック○)
2. 淡灰色砂質土
3. 淡灰白色砂質土
4. 灰色砂質土 (褐色・淡灰色粘土ブロック○)
5. 淡灰色砂質土
6. 淡灰褐色砂質土
7. 灰褐色砂質土
8. 灰色砂質土 (褐色粘土ブロック○)
9. 灰褐色砂質土
10. 淡灰色粘質土 (褐色粘土ブロック○)
11. 淡灰色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
12. 灰色粘質土 (灰色粘土ブロック△、木質○、炭△)
13. 暗灰色粘質土 (木質・炭△)
14. 暗灰色粘質土 (灰色粘土ブロック・木質・炭△)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法施	胎土	色調
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	140	5.6	4.5	I1/3底1/5	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙白
2	土師器・碗	144	6.2	4.2	I1/3底1/4	(内)ナデ、重ね焼き痕粘土付着(外)オサエ、ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙灰
3	土師器・碗	132	5.7	3.6-4.4	I1/2底2/3	(内)ナデ、重ね焼き痕(外)オサエ、ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙白
4	土師器・碗	140	6.0	3.9-5.0	1/1	(内)オサエ、ナデ、重ね焼き痕(外)オサエ、ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙黄
5	土師器・碗	125	5.6	3.8-4.7	I1/2	(内)オサエ、ナデ、重ね焼き痕粘土付着(外)オサエ、ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	灰白
6	土師器・碗	13.3×14.3	6.8	4.1-5.0	I1/2	(内)ナデ、重ね焼き痕(外)ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙黄
7	土師器・杯	136	9.0	2.7	I1/5底1/3	(内・外)ナデ、摩滅	微砂	淡橙灰
8	土師器・杯	12.6×13.1	8×8.8	2.5-3.2	1/1	(内・外)ナデ、摩滅(底外)板目直	微砂・赤色粒	淡橙
9	土師器・皿	80	5.5	1.5-2.0	I4/5底1/4	(内・外)ナデ	微砂	淡橙白
10	土師器・皿	7.8	6.1	1-1.3	1/1	(内・外)ナデ(底外)垂ネリ	微砂	淡橙灰
11	土師器・台付皿	100	5.9	2.4	I(-)底2/3	(内・外)ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙灰
12	土師器・台付皿	94	5.5	2.5-3.2	I1/3底2/3	(内・外)ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙灰
13	土師器・台付皿	100	6.2	2.4	I(-)底1/2	(内・外)ナデ、高台貼付後ナデ	微砂	淡橙白

図50 溝17断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

溝18 (図51、図版9)

CE・CG57区に位置する。溝22を完掘した後にその下面で検出された。検出面は標高0.43m、底面は同-0.03mで、深さは0.46mを測る。A地点の北壁では底面が0.05mであることから南へ傾斜していることがわかる。傾きはN15°Eであり、北側は調査区外へ伸びているが、南側はCGライン以南では完全に溝22aによって破壊されている。幅は0.88mを測り、断面形状は逆台形である。

埋土は6層に分けられた。1～2層は灰色を基調とする粘質土で、砂や木質・炭を含む。3～6層は暗灰色を

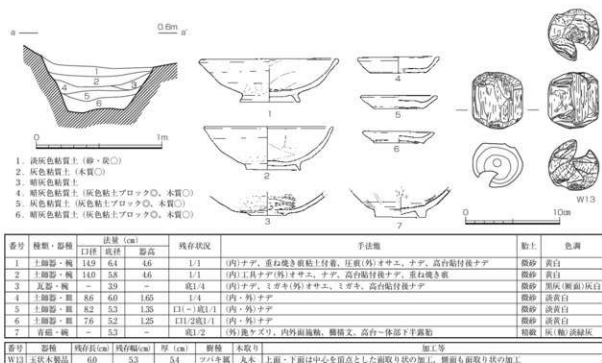


図51 溝18断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

基調とする粘質土で、特に4層以下では灰色粘土ブロック・木質を含む。

遺物は、12号ポリ袋2袋分が出土した。吉備系土師器碗・皿・青磁碗があるが、大多数は吉備系土師器碗の小片である。他に玉状加工材や板材が出土した。

本遺構の時期は出土遺物から13世紀前葉と考えられる。

溝19 (図52、図版9)

CG・CH57・58区に位置する。<10層>で検出した。土坑9を切り、溝22aに切られている。検出面は標高1.1m、底面は同0.8mで、深さは0.3mを測る。傾きはN104°Eであり、調査区外に直線的に伸びている。幅は1.12mを測り、断面は逆台形を呈する。

埋土は4層に分けられた。1層は淡青灰色砂質土で灰色粘土ブロックを含む。2層は淡灰色粘質土、3層は青灰褐色粘質土であり、両層ともに鉄分がよく沈着しており灰色粘土ブロックを含む。4層は灰色を基調とする粘質土である。包含物は暗灰色粘土ブロックが含まれているが、明度に差があり2層に細分できる。

遺物は、12号ポリ袋2袋分が出土した。吉備系土師器碗・皿・鍋などがある。他に白磁片も含まれる。石製品には、砥石や礮石がある。

本遺構の時期は出土遺物から13世紀前半と考えられる。

溝20 (図53、図版10)

CG56区に位置する。<6層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。溝22aに切られている。検出面は標高1.01m、底面は同0.75mで、深さは0.26mを測る。傾きはN64°Eであり、調査区外に直線的に伸びている。幅は0.46mを測り、断面は逆台形を呈する。

埋土は6層に分けられた。1・2層は灰褐色を基調とする砂質土で、3～6層は灰黄色～灰黄褐色を基調とする砂質土である。3・4・6層には淡黄色砂質土ブロックを含む。

遺物は、12号ポリ袋1/2袋分が出土した。吉備系土師器碗の小片である。

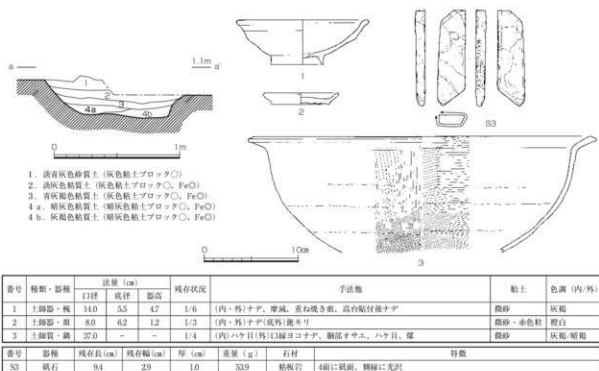


図52 溝19断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)



図53 溝20断面 (縮尺1/30)

本遺構の時期は出土遺物から中世前半と考えられるが、掘り込み面や切り合い関係から12世紀代の可能性も残す。

溝21 (図54、図版10)

CH58区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.8m、底面は同0.47mで、深さは0.33mを測る。傾きはN12°Eであり、北側は溝19に切られ、それ以北では確認できなかった。また南側はCIライン付近で西へ方向を変え調査区外に伸びているものと考えられる。幅は0.72mを測るが、西へ方向を変えるCIライン付近では幅1.15m程になっている。断面は凹凸のある皿状を呈する。

埋土は4層に分けられた。1・2層は灰色を基調とする砂質土である。3・4層は灰褐色を基調とする粘質土で、両層ともに砂を含むが、3層には砂がブロック状に含まれる。

図54 溝21断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

遺物は、12号ポリ袋2袋分が出土した。吉備系土師器椀・皿・鍋を含む小片である。本遺構の時期は出土遺物から13世紀代と考えられるが、切り合い関係を考慮すると12世紀末～13世紀初頭の可能性がある。

溝22 (図55～63、図版10～13)

57ライン上を南北に貫くものを溝22a、CE～CFライン間を東西に走るものを溝22bとして報告する。これらはCE～CF57を交点とする同一の区画を形成する溝と考えられる。溝22aは、断面観察により3段階に分けることができ、それぞれ溝22a-1・2・3とした。溝22bは、上面が大きく削平されていたため2段階のみ確認することができた。調査においては可能な限り遺物を分けて取り上げた。

溝22a：溝22a-1・2は、<4層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した(図55・56)。最も新しい溝22a-1では、検出面は標高1.38m、底面はa断面で同0.4m、b断面で同0.3mを測り、南へ向けて深くなる。深さはa断面では0.98mを測る。幅は4.48mであり、断面は丸みを有する逆台形を呈する。溝の傾きは、N19°Eであり調査区外に伸びる。平面形を明確に捉えることは困難で、断面観察により認識した。

埋土は、a断面1～29層、b断面1～12層であり、3群にまとめることができる。1群はa断面1～17層、b断面1～4層、2群はa断面18～22層、b断面5～10層、3群はa断面23～29層、b断面11～12層である。1群は灰～灰褐色を基調とする砂質土で、褐色ブロックを含む。2群は緑灰～青灰色を基調とする粘質土で、粘土ブロックと多くの砂を含む。3群は灰～暗灰色を基調とする粘質土で粘土ブロックを含む。

溝22a-2では、検出面は標高1.34m、底面はa断面で-0.45m、b断面で-0.23m、深さは1.57～1.79mを測る。北側の方が深い。幅はa断面で6.15m、CGライン付近では4.72mを測る。a断面の幅が広いのは、CFライン以北において溝の掘り方が湾曲しているからである。これは、後述する溝22bとの交点に当たっていることによると考えられる。断面は、西側の標高0.3m付近に幅0.9m程のテラスが形成される二段掘状の逆台形を呈する。このテラスは、CHライン以北に認められるものである。溝の傾きは、N19°Eであり調査区外に伸びる。

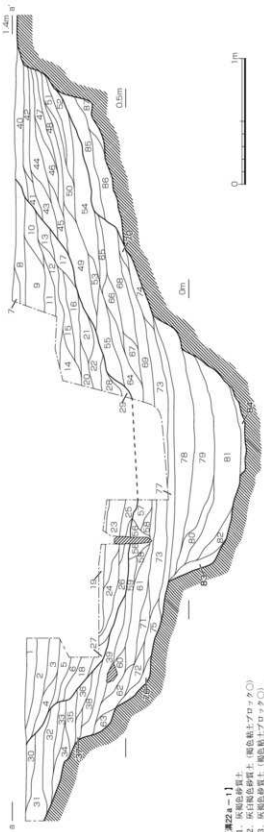
埋土は、a断面で30～84層、b断面で13～22層に分けられ、4群にまとめることができる。1群は、a断面30～55層、b断面13層、2群はa断面56～70層、b断面14～16層、3群はa断面71～76層、b断面17～19層、4群はa断面77～84層、b断面20～22層である。1群は、灰褐色を基調とする砂質土で、粘土ブロックをあまり含まない。2群は灰黄～灰黄褐色を基調とする粘質土で、粘土ブロックを含む。b断面の2群は、色調が暗灰色を基調とするが、土質に他断面との差異はない。3群は青灰色を基調とする粘質土で、粘土ブロックや木質を含む。4群は灰～暗灰色を呈する粘質土で、粘土ブロック・炭・木質・砂などを含む。

本溝の東側には、CIライン付近において一部が楕円形の土坑状に張り出す部分がある(図38・57)。検出面は標高1.4m、底面は同0.65m、深さ0.75mを測る。幅は現状で1.65mであり、断面は椀状に緩く開く。埋土は10層に分けられる。1～6層は灰褐色を基調とする砂質土で粘土ブロックを含み、7～10層は暗灰褐色を基調とする砂質土である。

溝22a-3は、CIライン以南で主に確認できた。c断面から、検出面は1.28m、底面は0.16m、深さは1.12mを測る(図56)。幅は、c断面から復元すると3m程度と推定される。断面は逆台形を呈す。傾きはN12°Eであり、溝22a-2と同様に調査区外に伸びる。

埋土はa断面で3層、c断面で16層に分けられ、3群にまとめることができる。1群はc断面1～4層、2群はa断面85～87層、c断面5～13層、3群はc断面14～16層である。1群は黄～褐灰色を基調とする砂質土で、粘土ブロックをあまり含まない。2群は灰褐色を基調とする砂質土で粘土ブロックをよく含む。3群は暗灰色を呈する粘質土で粘土ブロックを含む。

本溝においても、溝22a-2とはほぼ同様の位置に、楕円形を呈する土坑状の張り出し部が認められる(図57)。検出面は標高1.03m、底面は同0.75m、深さは0.28mを測る。幅は、現状で1.4mであり、断面は椀状を呈する。埋土は3層で灰褐色を基調とする砂質土である。1層では、吉備系土師器椀等の細片が多く出土した。



【圖21-1】

1. 灰褐色砂質土
2. 灰白褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
3. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
4. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
5. 暗褐色粘板状土 (褐色粘土プロット)
6. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
7. 灰褐色砂質土
8. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
9. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
10. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
11. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
12. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
13. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
14. 灰褐色砂質土 (砂)
15. 灰青灰色粘質土 (褐色粘土プロット)
16. 灰青灰色粘質土 (褐色粘土プロット)
17. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
18. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
19. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
20. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
21. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
22. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
23. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
24. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
25. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
26. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
27. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
28. 灰褐色粘質土

【圖21-2】

29. 灰白褐色砂質土
30. 灰白褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
31. 灰白褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
32. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
33. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
34. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
35. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
36. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)
37. 灰褐色砂質土
38. 暗褐色粘質土
39. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
40. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
41. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
42. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
43. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
44. 暗褐色粘質土
45. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
46. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
47. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
48. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
49. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
50. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
51. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)

【圖21-3】

52. 暗褐色粘質土
53. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
54. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
55. 灰褐色砂質土
56. 灰褐色砂質土 (灰褐色粘土プロット)
57. 灰褐色砂質土
58. 暗褐色粘質土
59. 暗褐色粘質土
60. 暗褐色粘質土
61. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
62. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
63. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
64. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
65. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
66. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
67. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
68. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
69. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
70. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
71. 灰褐色砂質土 (褐色粘土プロット)

【圖22-1】

72. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
73. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
74. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
75. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
76. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
77. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
78. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
79. 灰褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
80. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
81. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
82. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
83. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
84. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)

【圖22-2】

85. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
86. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)
87. 暗褐色粘質土 (褐色粘土プロット)

圖55 溝22 a 断面1 (縮尺1/30)

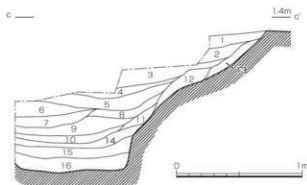
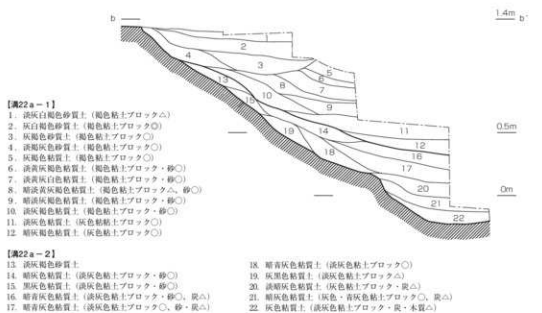


図56 溝22a 断面2 (縮尺1/30)

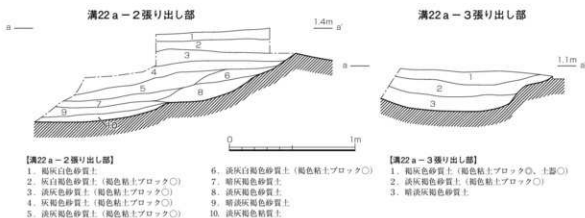


図57 溝22a 張り出し部断面 (縮尺1/30)

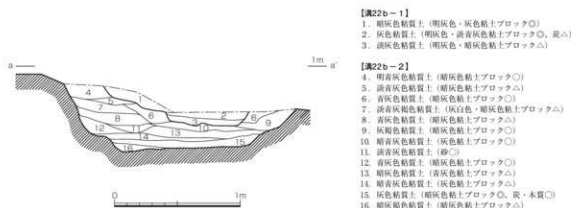


図58 溝22b断面 (縮尺1/30)

溝22b: <10層>で検出した (図58)。溝22b-1では、検出面は標高0.85m、底面は同0.53m、深さは0.32mを測る。溝22a-2のテラスの標高は0.3mであることから、0.2m程の高低差をもって接続している。幅は、現状で1.18mを測り、断面は丸みを有する逆台形と考えられる。溝22b-2では、検出面は標高0.86m、底面は同0.33m、深さは0.53mを測る。前段階同様に高低差をもって溝22aと接続するが、調査区北半では溝22a-3が同2によって破壊されているため、どの程度の高低差であったかは不明である。幅は現状で1.88mであるが、溝22aと同程度の規模をもっていたと想定される。断面は前段階同様丸みを帯びた逆台形を呈する。傾きは、1・2ともにN71°Wであり、西側は調査区外に伸び、東側は溝22aの影らみ部に接続する。

溝22b-1の埋土は1～3層であり、灰～暗灰色を基調とする粘質土で粘土ブロックを含む。溝22b-2の埋土は4～16層であり、青灰色を基調とする粘質土で粘土ブロック・炭・木質を含む。

溝22の出土遺物と時期：出土遺物はコンテナ (28リットル/箱) 6箱分が出土した。吉備系土師器碗・杯・皿・付付皿・鍋・瓦・備前焼のすり鉢・青磁・白磁・砥石・硯・土鍾が出土した (図59～63)。吉備系土師器碗には13世紀前半～14世紀前半までのものが含まれている。また、備前焼のすり鉢には14世紀代のもの (図60～39) や近世に下る資料 (図60～40・41) もある。後者は、溝22a-1の最上層から出土したものである。他に、板材や加工木・杭・蓋・下駄が出土した (図61～63)。また、小破片であり図化は困難であったが、漆碗の小片も出土している (本巻自然科学的分析参照)。

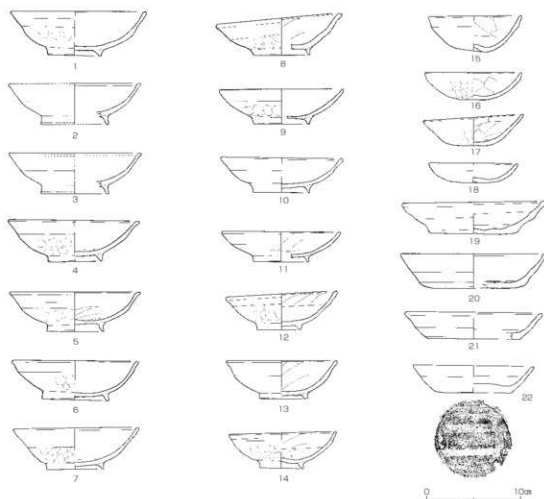
本溝の時期は、出土遺物から13世紀前半～14世紀代と考えられる。本溝は、その位置関係および概ね一致する底面の標高、埋没時期から、本調査地点北側約50mに位置する第7次調査地点で検出された13世紀末～14世紀前半の溝20～23に接続するものと考えられる。しかし、第7次調査地点の溝20～23は4条が切り合っていたのに対し、本調査地点では3条の切り合いしか確認できなかった。また、第7次調査地点では、同じ位置に近世の溝も構築されている。本溝では、攪乱によってその中央部が破壊を受けていたため近世の溝を検出できなかったと考えられるが、上層からは近世の遺物が出土していることから、本調査地点においても近世の溝が伸びていたことがうかがえる。

溝23 (図64、図版13)

CF56区に位置する。<4層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。検出面は標高1.33m、底面は同1.23mで、深さは0.1mを測る。端部から0.55mほどしか確認できなかったため土坑の可能性もあるが、断面が緩く立ち上がることから溝と判断した。傾きはN76°Wである。幅は0.83mを測り、断面は皿状を呈する。

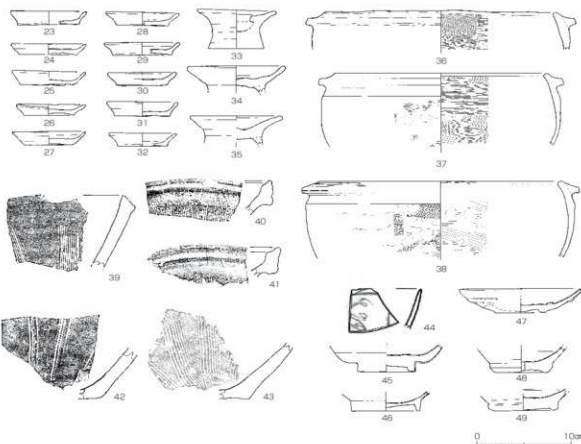
埋土は3層に分けられた。1層は灰茶褐色砂質土、2層は明緑灰色砂質土で粗砂を含む。3層は粗砂層である。

遺物は、12号ポリ袋1/3袋分が出土したが、ほとんどが吉備系土師器碗の小片である。本溝の時期は出土



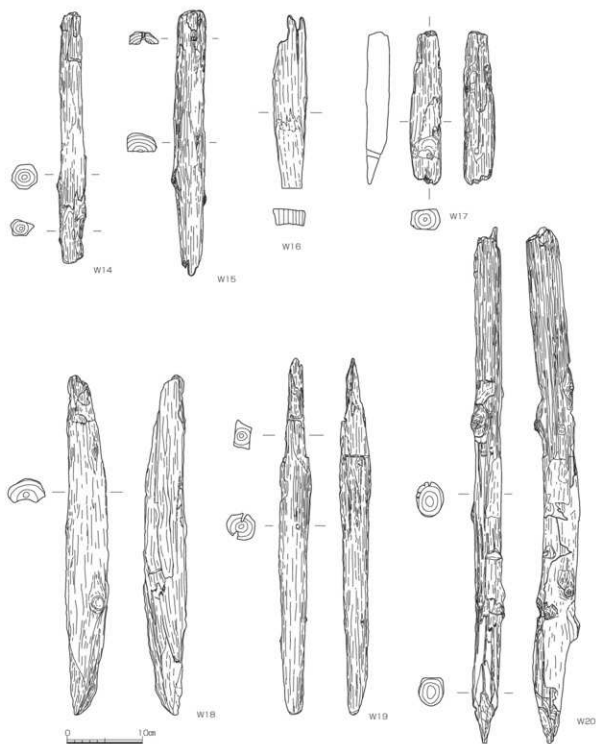
番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法施	胎土	色調 (内/外)
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	14.4	5.4×6.1	4.7	口3・6底1/1	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡灰褐
2	土師器・碗	14.1	6.1	4.4	口1・2底1/1	(内)ナデ、赤ね焼き黄粘土付着(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡灰褐
3	土師器・碗	14.0	7.0	4.3	口1・6底1/4	(内)ナデ、赤ね焼き黄粘土付着(外)ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡黄白
4	土師器・碗	13.9	5.8	4.1~4.7	口5・6	(内)ナデ、赤ね焼き黄粘土付着(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	黄褐
5	土師器・碗	13.9	6.0	4.2	口1・4底1/1	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ、全体黄褐色	微砂	黄白
6	土師器・碗	13.5	7.1	4.2	口1・2底1/1	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡褐
7	土師器・碗	13.4	6.0	4.4	口1・1底1/1	(内)ナデ、赤ね焼き黄粘土付着(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡灰褐
8	土師器・碗	13.4	6.0	3.3~4.4	1/3	(内)ナデ、赤ね焼き黄(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	灰白
9	土師器・碗	13.2	6.0	3.7	口1・3底1/4	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡灰褐
10	土師器・碗	13.0	6.0	4.2	口1・6底1/3	(内)ナデ、赤ね焼き黄粘土付着(外)ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡黄白
11	土師器・碗	12.6	5.8	3.2	1/6	(内)ナデ、赤ね焼き黄粘土付着(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	黄白
12	土師器・碗	11.8	4.8	3.5~4.1	1/1	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	黄灰
13	土師器・碗	11.8	5.1×5.7	4.1	口3・4底1/1	(内)ナデ、赤ね焼き黄(外)ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	淡黄白
14	土師器・碗	11.4	4.6	3.5~4.0	1/1	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、高台胎付後ナデ	微砂	黄白
15	土師器・碗	10.0	3.1	3.2~4.1	1/1	(内)ナデ(外)ナデ、赤ね焼き黄	微砂	黄白/黄灰
16	土師器・碗	10.2	3.0	3.9	1/3	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、赤ね焼き黄	微砂	黄白
17	土師器・碗	10.6	4.4	2.7~3.3	口1・2底1/1	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ、赤ね焼き黄	微砂	黄白
18	土師器・碗	9.4	4.4	2.1	1/2	(内)ナデ(外)ナデ	微砂	淡黄褐
19	土師器・杯	15.2	8.9	3.3~4.1	1/1	(内・外)ナデ(底外)黄キリ	微砂・赤色粒	橙白
20	土師器・杯	15.0	10.2	3.7	口1~1底1・3	(内・外)ナデ(底外)黄キリ後ナデ	微砂・灰	淡灰褐
21	土師器・杯	14.6	10.3	2.8	1/4	(内・外)ナデ(底外)黄キリ	微砂・赤色粒	橙白/橙白
22	土師器・杯	12.8	8.1	2.9	口1・4底1/1	(内・外)ナデ(底外)黄キリ、黄白黄	微砂	淡灰褐

図59 溝22出土遺物1 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法施	胎土	色調 (内/外)
		口径	底径	器高				
23	土師器・皿	8.1	6.2	1.4	E22-3底3/4	(内・外)ナデ(底外)裏キリ後ナデ, 板目煎	微砂	淡橙灰
24	土師器・皿	8.0	6.1	1.2	1/1	(内・外)ナデ(底外)裏キリ	微砂	淡橙灰
25	土師器・皿	7.8	5.8×6	1.1~1.6	1/1	(内・外)ナデ(底外)裏キリ後ナデ	微砂	淡橙
26	土師器・皿	7.8	5.3	0.8~1.2	1/2	(内・外)ナデ(底外)裏キリ	微砂	淡黄白
27	土師器・皿	7.8	5.2	1.5	底1/1	(内・外)ナデ(底外)裏キリ	微砂	淡橙乳
28	土師器・皿	7.8	5.6	1.4	口(-)底1/4	(内・外)ナデ(底外)裏キリ後ナデ, 板目煎	微砂・赤色粒	淡橙白
29	土師器・皿	7.8	6.1	1.4	1/4	(内・外)ナデ(底外)裏キリ, 底右端キ煎	微砂・赤色粒	淡橙白
30	土師器・皿	7.3	5.5	1.4	1/4	(内・外)ナデ(底外)裏キリ, 板目煎	微砂	淡黄緑
31	土師器・皿	7.3	5.8	1.5	口1-6底1/6	(内・外)ナデ(底外)裏キリ	微砂	淡橙
32	土師器・皿	7.2	5.4	1.4	1/4	(内・外)ナデ(底外)裏キリ, 板目煎	微砂	橙白・赤褐
33	土師器・脚台	8.3	5.9	4.1	脚2/3	(内・外)ナデ(底外)裏キリ	微砂	淡橙灰
34	土師器・付付皿	10.2	-	-	口(-)脚1/2	(内・外)ナデ(底外)裏キリ	微砂	青灰・灰緑
35	土師器・付付皿	9.8	-	-	口1/4	(内・外)ナデ(底外)裏キリ	微砂・赤色粒	青灰緑
36	瓦質土師器・皿	24.8	-	-	口1/6	(内)ハケ目(外)ナデ, 僅	微砂	黒灰・灰~紫灰
37	瓦質土師器・皿	26.0	-	-	口1/6	(内)ハケ目(外)オサエ, ハケ目後ナデ, 僅	微砂	灰白~黒灰
38	瓦質土師器・皿	29.4	-	-	口1/4	(内)オサエ, ハケ目(外)オサエ, ハケ目後ナデ, 僅	微砂	黒灰
39	備前焼・すり鉢	-	-	-	-	(内・外)ナデ, 10条1組の脚目, 自然釉	細砂	灰紫緑/暗赤褐
40	備前焼・すり鉢	-	-	-	-	(内・外)ナデ, 8条1組の脚目	細砂	暗赤褐灰
41	備前焼・すり鉢	-	-	-	-	(内・外)ナデ, 脚目の条数不明	微砂	系灰
42	備前焼・すり鉢	-	-	-	-	(内・外)ナデ, 6条1組の脚目	微砂	暗赤灰
43	備前焼・すり鉢	-	-	-	-	(内・外)ナデ, 8条1組の脚目	微砂	暗赤褐
44	青磁・碗	-	-	-	-	内外面施釉, 内面早花文	精練	灰(釉)透明緑灰
45	青磁・碗	-	5.8	-	底1/2	内外面施釉(高台除く)・貫入	精練	灰白(釉)透明緑灰
46	青磁・碗	-	7.3	-	底1/1	内外面施釉(高台除く)・貫入	微砂	灰白(釉)灰オリーブ
47	青磁・皿	12.8	5.4	2.5	口(-)底1/2	内外面施釉・貫入, 高台削り出し・無釉, 内面・高台底に茶色焼土粒土付着	微砂	淡赤灰(釉)オリーブ
48	白磁・碗	-	6.6	-	底1/2	内面釉	精練	青白(釉)半透明灰白
49	白磁・碗	-	7.4	-	底1/2	内面釉	精練	灰白(釉)淡橙灰

図60 溝22出土遺物2 (縮尺1/4)



番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	磨種	木取り	加工等
W14	杭	33.3	3.9	3.2	クワリ	丸本	下端を面取り状に加工
W15	杭	35.1	4.3	2.4	クワリ	平册	上端に穿孔1ヶ所、孔内には鉄釘残存、片面のみ平坦に加工
W16	杭	22.9	2.6~4.6	2.3	クワリ	楕円	先端台形状に加工、先端に向けて厚み徐々に減じる
W17	杭	20.4	4.2	3.2	クワリ	丸本	下端を片方状に加工、下部に穿孔1ヶ所
W18	杭	45.0	3.6	2.9~4.6	クワリ	丸本	先端を面取り状に加工、片面のみ平坦に加工
W19	杭	47.2	4.1	4.1	クワリ	丸本	本質連の穿孔状の窪み1ヶ所、上部に段を作り出し、薄くなるように加工
W20	杭	63.4	3.6	4.6	クワリ	丸本	下端を丸みせる、側面を残す

図61 溝22出土遺物3 (縮尺1/5)

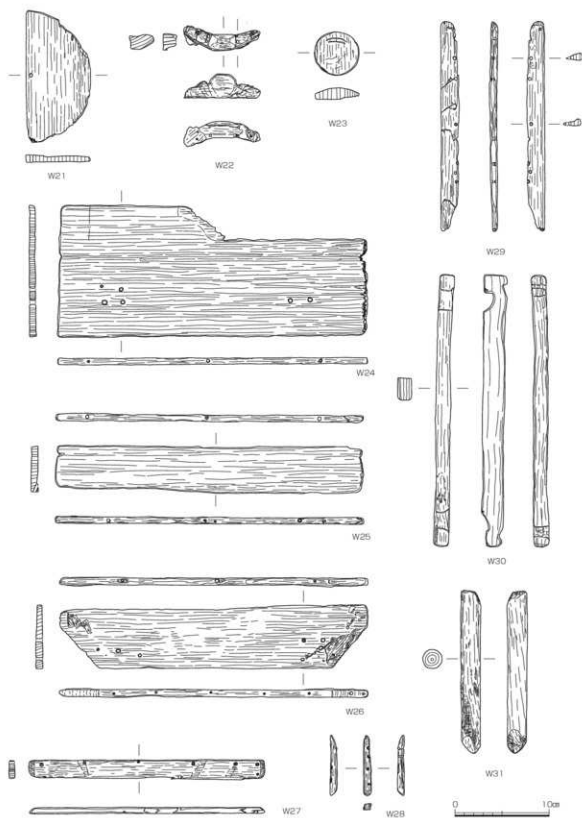
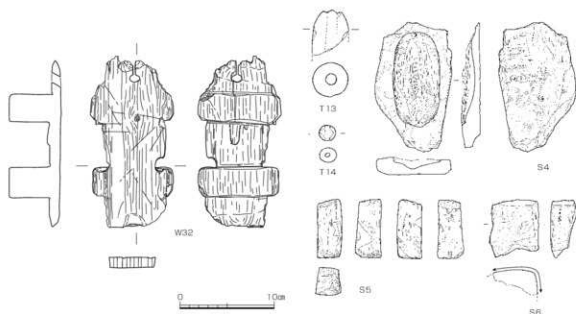


図62 溝22出土遺物4 (縮尺1/4)



番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	素材	本取り	加工等
W21	蓋	14.9	6.8	0.8	スズ	縦目	穿孔1ヶ所
W22	部材	1.6	8.1	2.6	モクレン属	縦目	突出部の両側に3ヶ所ずつの穿孔あり、1ヶ所には本釘残存、左側底面には未貫通の窪みあり(穿孔直跡か)、底面には漆状の黒色付着物あり
W23	円形加工材	4.6	4.7	1.2	コナラ属クヌギ節	縦目	下面は平頭加工、上面は両面
W24	部材	13.9	32.8	0.7	スズ	縦目	左側に4ヶ所、右側に2ヶ所の穿孔、長辺の小口面に3ヶ所の穿孔、中央以外の2ヶ所には本釘残存
W25	部材	5.0	32.7	0.7	スズ	縦目	上辺の本口面に穿孔3ヶ所、中央の穿孔にのみ本釘残存、下辺の本口面に穿孔4ヶ所、中央の2ヶ所にのみ本釘残存、左本口面に穿孔1ヶ所
W26	部材	6.7	32.7	0.8	スズ	縦目	平面に穿孔12ヶ所、未貫通の内形の窪み(穿孔直跡か)3ヶ所、表面に漆状の黒色付着物、上辺の本口面に穿孔3ヶ所、中央以外の2ヶ所には本釘残存、下辺の本口面に穿孔5ヶ所、すべてに本釘残存、右短辺に穿孔2ヶ所、下方の孔には本釘残存
W27	部材	2.1	25.0	0.7	スズ	縦目	穿孔7ヶ所、すべてに本釘残存、両面は斜めに加工
W28	部材	6.4	0.8	0.7	スズ	縦目	穿孔4ヶ所、すべてに本釘残存、両面は斜めに加工、側面に漆状の黒色付着物
W29	部材	22.2	1.9	0.9	スズ	縦目	穿孔9ヶ所、5ヶ所に本釘残存、端部は斜めに加工
W30	部材	28.7	1.6	2.4	スズ	縦目	両面にそれぞれ対になる異なる形状の溝り込み
W31	杖	17.3	2.0	2.0	マン属麻線管束属	丸木	先端を面を作り出すように加工し尖らせる、削皮残存
W32	下皿	18.2	8.8	5.5	スズ	芯持ち材	底面下駄、表面の前縁・後縁に窪みあり、前縁は上方角が削いており前縁と連なる、後縁は後縁の側に穿孔されるが、上面は後面をわずかに抉る

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形態・手法施	胎土	色調
T13	土罐	4.7	3.7	3.7	57.2	孔徑1cm(上)、ナデ	粗砂	灰褐色
T14	土罐	1.6	1.7	1.5	4.8	孔徑0.5cm(上・下)、ナデ	粗砂	灰褐色

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S4	瓶	10.8	8.0	2.0	264.0	板状岩	磨面磨底、海・陸には墨が一部付着
S5	砥石	6.2	2.5	2.7	64.2	流紋岩	2面に砥面
S6	砥石	5.7	5.1	2.7	94.7	安山岩	2面に砥面、砥石か

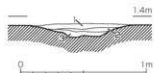
図63 溝22出土遺物5 (縮尺1/4)

遺物および掘り込み面から中世前半と考えられる。

溝24 (図65、図版13)

CK61・62区に位置する。<4層>から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。検出面は標高1.24m、底面は同1.06mで、深さは0.22mを測る。壁面観察から東へ傾斜する。傾きはN78°Eであり、調査区外へ直線的に伸びている。幅は0.54mを測り、断面は箱形を呈する。

埋土は7層に分けられた。1層は暗灰色粘質土、2層は暗灰褐色粘質土、



1. 灰褐色粘質土
2. 暗灰褐色粘質土 (粗砂○)
3. 明褐色粘質土

図64 溝24断面 (縮尺1/30)

3層は暗黄灰色粘質土である。いずれも灰色粘土ブロックを含む。4～7層は暗灰～暗灰褐色を基調とする粘質土であり、粘土ブロックをよく含むが、特に4・5層にはその量が多く、炭・焼土も含む。

遺物は出土しなかったが、掘り込み面より本遺構の時期は中世前半と考えられる。

溝25 (図66、図版13)

CG57・58区に位置する。<10層>で検出した。土坑9・溝19を切る。検出面は標高1.04m、底面は同0.55mで、深さは0.49mを測る。傾きはN35°Wであり、北側は調査区外に伸びるが、CHライン以南では確認できなかった。幅は1.12mを測り、断面は逆台形を呈する。

埋土は9層に分けられた。1・2層は緑灰色を基調とする砂質土で砂質土ブロックを含む。3層は灰色粘質土、4層は淡緑灰色粘質土で砂質土ブロックを少量含む。5～7層は灰褐色を基調とする粘質土である。6層は砂をよく含み、その上下の5・7層は砂質土ブロックを含む。8・9層は、上層と同様に灰褐色を基調とする粘質土であるが、黄灰色粘土ブロックを含む。

遺物は、12号ポリ袋1/4袋分が出土した。吉備系土師器碗の小片10点程である。本遺構の時期は出土遺物および切り合い関係から中世前半と考えられる。

溝26 (図67、図版13)

CH・CI57・58区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.93m、底面は同0.65mで、深さは0.28mを測る。傾きはN37°Eであり、南側は調査区外に伸びているが、CIラインより2m以北では確認できなかった。幅は0.4mを測り、断面は箱形を呈する。

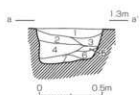
埋土は9層に分けられた。1～5層は灰白～灰褐色を基調とする砂質土で、4層のみ灰色粘土ブロックを含む。6・7層は黄灰色を基調とする砂質土で、6層には暗灰色粘土ブロックを少量含む。8層は壁際に堆積する灰白色砂質土で、灰色粘土ブロックや砂を少量含む。木桶状建造物の痕跡の可能性がある。9層は8層の外側にある土層で、灰色粘土ブロックを少量含む褐灰色砂質土である。

遺物は、12号ポリ袋1袋分が出土した。吉備系土師器碗の小片である。

本遺構の時期は出土遺物から中世前半と考えられる。

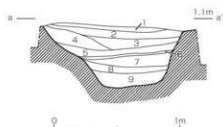
d. ビット

ビットは<4層>および<5層>から24基検出された。しかし、帰属する層位が不明確なものが大多数を占めており、すべてを層位ごとに分離することは困難である。



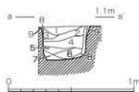
1. 暗灰色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
2. 暗灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
3. 暗黄灰色粘質土 (黄灰色粘土ブロック○)
4. 暗灰色粘質土 (灰色粘土ブロック○、炭・焼土△)
5. 暗灰褐色粘質土 (黄灰色粘土ブロック○)
6. 暗灰色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
7. 暗灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック○)

図65 溝24断面 (縮尺1/30)



1. 淡緑灰色砂質土 (淡灰色砂質土ブロック○)
2. 緑灰色砂質土 (淡灰色砂質土ブロック○)
3. 灰色粘質土 (淡灰色砂質土ブロック○)
4. 淡緑灰色粘質土 (淡灰色砂質土ブロック△)
5. 灰褐色粘質土 (淡灰色砂質土ブロック△)
6. 暗灰色粘質土 (砂○)
7. 淡灰褐色粘質土 (灰色砂質土ブロック○)
8. 灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック○)
9. 暗灰褐色粘質土 (黄灰色粘土ブロック○)

図66 溝25断面 (縮尺1/30)



1. 淡灰白褐色砂質土
2. 淡灰白色砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 灰白褐色砂質土 (灰色粘土ブロック○)
5. 灰褐色砂質土
6. 黄灰色砂質土 (暗灰色粘土ブロック△)
7. 暗灰色砂質土
8. 灰白色砂質土 (灰色粘土ブロック・砂△)
9. 暗灰色砂質土 (灰色粘土ブロック△)

図67 溝26断面 (縮尺1/30)

ピットの分布は調査区はほぼ全域に広がるが、散漫としており空間的にまとまる様相は見いだせない。ここでは、礎石が出土したピットのみ詳述する。

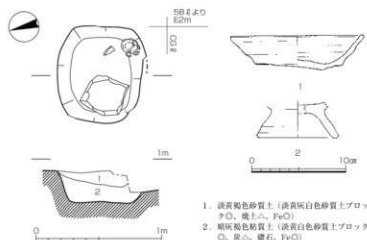
ピット1 (図68、図版13)

CF57区に位置する。<10層>で検出した。検出面は標高0.91m、底面は同0.65mで、深さは0.26mを測る。平面形は方形を呈すると考えられ、東西0.68m、南北0.78mを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土は2層に分けられた。1層は淡黄褐色砂質土で焼土を若干含み、2層は暗灰褐色粘質土で炭を少量含む。両層ともに砂質土ブロックをよく含む。

遺物は、土師器杯・台付皿が出土した。また底面には大きさ0.29×0.3m、厚さ0.1mを測る方形の礎が据え置かれていた。本遺構の時期は出土遺物から13世紀代と考えられる。

本遺構はピットとして報告したが、礎石がピット中央部に配されていないことから土坑の可能性もある。



1. 淡黄褐色砂質土 (淡黄灰白色砂質土ブロック、焼土、FeO)
2. 暗灰褐色粘質土 (淡黄白色砂質土ブロック、炭、礎石、FeO)

番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法地	胎土	色澤 (内/外)
		口径	底径	器高				
1	土師器・杯	14.2	9.2	2.9~4.2	1/1	(内・外)ヨコナデ(或外)籠キリ	微砂	橙白
2	土師器・台付皿	-	8.6	-	跡1/4	(内・外)ヨコナデ	微砂	淡灰褐・橙褐

図68 ピット1・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

第5節 近世の遺構・遺物

近世の遺構は<3層>に対応するもので、A地点の南部において土坑1基のみ検出した(図69)。密集や列状に配される状況はなく、極めて遺構の密度が低い。

a. 土坑

土坑15 (図70、図版13)

CI・CJ56・57区に位置する。<6層>で検出した。検出面は標高1.1m、底面は同0.55mで、深さは0.55mを測る。平面形は長方形で、北端部に若干の破壊を受けており、残存長は東西1.07m、南北1.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。中世の溝22aを切る。

埋土は4層に分けられた。1~3層は灰褐色系の砂質土で、特に1層に灰色粘土ブロックを多く含む。4層は灰色粘質土である。

遺物は、12号ポリ袋1/3袋が出土した。近世陶磁器に加えて銅片や瓦片を含む。

本遺構の時期は出土遺物や切り合い関係から近世と考えられる。

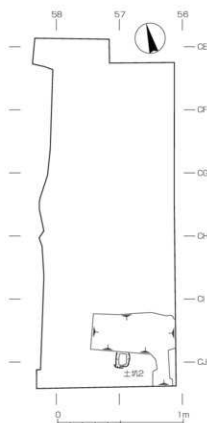


図69 近世遺構全体図 (縮尺1/300)

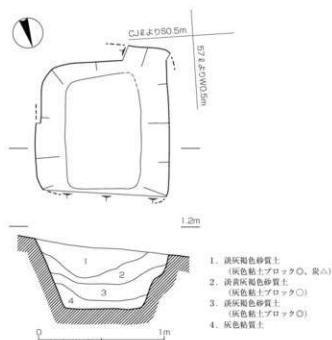
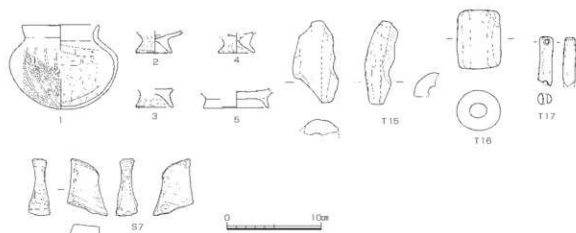


図70 土坑15 (縮尺1/30)

第6節 包含層ほかの出土遺物

包含層出土の遺物量は、全体でコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ 箱) 3箱である。ここでは、遺構は検出できなかったものの完形の遺物、土製品・石製品をあげておきたい (図71)。

1は古墳時代前期の壺、2～4は製塩土器の底部である。1・2は<7層>出土であり、3・4は不明である。5は緑軸陶器の底部であり、<5層>からの出土である。他に土製品と石製品があげられる。<7層>からの出土が多く、土錘 (T-15・16)、砥石 (S7) がある。T-17は土錘であるが出土層位は不明である。



番号	種類・器種	法量 (cm)			残存状況	手法施	胎土	色調
		口径	底径	器高				
1	土師器・壺	8.2	-	8.9	1/1	(内)口縁ナデ、胴部オサエ、タズリ(外)胴部ハケ目後ミオキ	細砂	暗橙
2	土師器・甕埴土器	-	3.8	-	底1/2	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ	細砂	暗橙灰
3	土師器・甕埴土器	-	4.0	-	底1/1	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ	細砂	淡赤灰
4	土師器・甕埴土器	-	3.8	-	底1/2	(内)ナデ(外)オサエ、ナデ	細砂	淡赤橙
5	埴輪陶器・輪	-	6.9	-	底1/1	内外面輪軸(洞落激しい)、高台貼付	細砂	灰(輪)埴灰

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	形態・手法施	胎土	色調
T15	土練	8.7	4.5	-	71.5	孔径1.1cm(上)、ナデ	微砂	淡橙灰
T16	土練	6.2	4.6	4.3	127.0	孔径2.3cm(上・下)、ナデ	微砂	淡橙
T17	土練	-	1.4	1.5	11.8	孔径0.6cm(上)、ナデ	微砂	淡橙

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S7	硯石	4.7	4.5	2.1	45.0	流紋岩	4面に砥面、磨縁にはわずかに磨面

図71 包含層出土遺物 (縮尺1/4)

第4章 自然科学的分析

第1節 鹿田遺跡第26次調査小区画溝群の軟X線写真撮影・観察

波辺 正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

a. はじめに

鹿田遺跡は、岡山県岡山市北区鹿田町に位置し、岡山平野の中心部を形成する旭川砂州上に立地する。また、鹿田遺跡は、弥生時代中期後半以降近世初めの集落跡を中心とした遺跡である。

本報は、鹿田遺跡第26次調査において検出された古墳時代前期前葉のものと考えられる小区画溝群、及びその下層について、栽培の実態を明らかにする目的で、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、文化財調査コンサルタント株式会社に委託実施した、堆積層の軟X線写真観察、花粉分析及び植物珪酸体分析についての報告を、再編したものである。

b. 試料について

岡山大学埋蔵文化財センターによって採取・保管されていたブロック試料より、文化財調査コンサルタント株式会社が軟X線写真撮影試料を切り出した。軟X線写真観察後、各種分析試料を切り出し、分析試料とした。以下の図面は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターより御提供を受けた平面図、断面図をもとに作成したものである。

第26次調査地点の位置を、図1（調査区の配置）に示す。第26次調査では調査区がA・B地点に分かれており、東側のA地点（トレンチ）で試料が採取されていた。

調査区内での試料採取地点を調査区平面図（図2）中に示す。さらに、試料採取地点断面図（図3）中に軟X線写真観察用のブロック試料（OS1、OS2）採取位置を示した。ただし、試料は断面図作成の後に壁面を整形して採取している。このため、後に示す観察試料の画像（地層境界）と本断面図との間でズレが生じている。また、花粉分析、植物珪酸体分析用試料を分取した詳細な位置は、各種ダイアグラム中に示している。

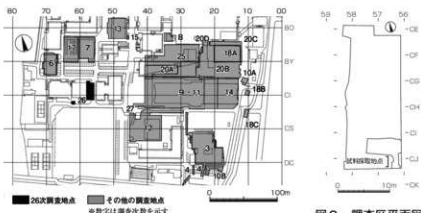
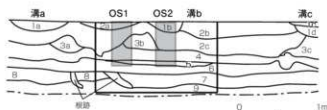


図1 調査区の配置

図2 調査区平面図
(試料採取地点)



- 1a: 淡灰茶褐色砂質土 1b: 淡灰茶褐色砂質土 1c: 灰茶褐色砂質土 1d: 灰褐色砂質土
 2a: 暗灰茶褐色砂質土 2b: 暗灰茶褐色砂質土 2c: 灰茶褐色砂質土
 (2a~2c: 鹿田遺跡基本層序7層: 古墳時代前期前葉)
 3a: 明灰褐色土+粘質土 3b: 灰~灰茶褐色土+粘質土
 4: 淡黄褐色砂質土 5: 灰黄褐色土+粘質土
 (4・5: 鹿田遺跡基本層序8層: 弥生時代後期~古墳時代前期前葉)
 6: 暗灰褐色土+粘質土 7: 灰褐色土+砂質土
 (6・7: 鹿田遺跡基本層序9層: 弥生時代後期~古墳時代前期前葉)
 8: 明灰から明褐色黄色土+砂質土 9: 淡褐色土
 (8・9: 鹿田遺跡基本層序10層: 弥生時代後期)

図3 試料採取地点断面図

c. 分析方法

(1) 軟X線写真観察方法

試験室内にて、25cm×10cm×1cmの透明アクリルケースに入るよう、試料調整を行う。

軟X線写真撮影では撮影用ケースに入れた印画紙に、40kVp・30mAの電流をかけた軟X線を照射し感光させる。撮影された写真はネガであり、軟X線の透過しやすい粘土、植物片は黒く、透過しにくい砂粒、二次的な酸化鉄や酸化マンガンは白く表現されている。

撮影写真を基にスケッチを行うとともに、「土壌記載薄片ハンドブック（久馬・八木：訳監修1989）」に準じて記載を行う。

(2) 微化石調査方法

花粉分析用プレバート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を5段階で示した。

(3) 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

(4) 植物珪酸体分析方法

藤原（1976）のグラスビーズ法に従って実施した。プレバートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ科の機動細胞を中心とした分類群（表1）を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで計数を行った。

d. 分析結果

(1) 軟X線写真観察結果

以下に試料ごとの記載を行う。また、マンガン斑、酸化鉄の検出が多く、根跡と考えられる生痕も多く認められることから、本来土壌化の過程で生成される土壌構造である「ベッド」を、認識することができなかった。

1) OS1（図4）

- ① 2 a層：シルト質粘土で、シルトはブロック状に入る。有機質。酸化鉄が小粒状に分布。僅かにマンガン斑が分布。
- ② 2 c層：シルト質粘土で、シルトはブロック状に入る。有機質。黒～黒褐色のマンガン斑が顕著。酸化鉄は小粒状に分布するが、上位の2 a層に比べ僅か。
- ③ 3 b層：シルト質粘土で、シルトはブロック状に入る。黒褐色のマンガン斑が散在する。酸化鉄は小粒状に分布するが、上位2 c層、下位4層に比べ僅か。
- ④ 4層：極細砂質粘土で、極細砂はブロック状に入る。酸化鉄が小粒状に分布する。上～中部には黒色のマンガン斑が散在する。
- ⑤ 5層：細砂質粘土で、細砂はブロック状に入る。酸化鉄が小粒状に分布し、顕著。黒褐色のマンガン斑が散在する。
- ⑥ 6層：礫混シルト質粘土。有機質に富む。酸化鉄、黒褐色のマンガン斑が認められるが、上位の5層に比べごく僅か。

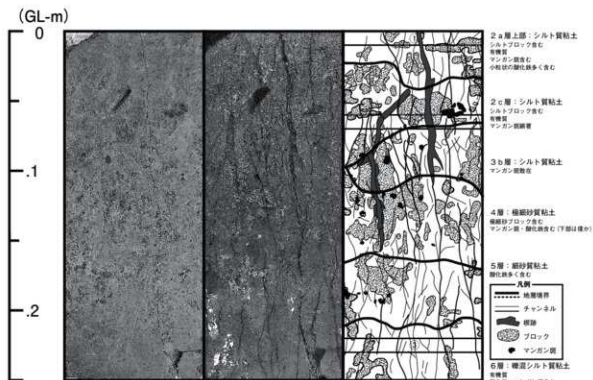


図4 軟X線写真観察結果：OS1
(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)

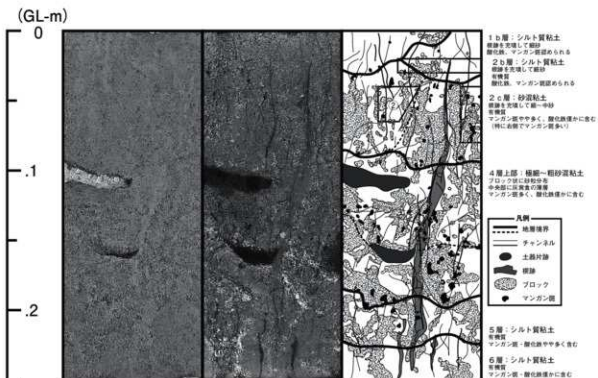


図5 軟X線写真観察結果：OS2
(左：実視 中：軟X線 右：解析結果)

2) OS2 (図5)

- ① 1 b層：シルト質粘土で、根跡を充填して細砂が認められる。酸化鉄、暗褐色のマンガン斑が僅かに分布。
- ② 2 b層：シルト質粘土で、根跡を充填して細砂が認められる。有機質。酸化鉄が僅かに、暗褐色のマンガン斑がやや多く分布。
- ③ 2 c層：砂混粘土で、根跡を充填して細～中砂が認められる。有機質。酸化鉄が僅かに、黒褐色のマンガン斑がやや多く分布する。マンガン斑は、右側に多く分布する。
- ④ 4層：極細～粗砂混粘土で、砂粒はブロック状（根跡？）に入る。土器片混入。有機質。酸化鉄が僅かに、黒褐色のマンガン斑が多く分布する。中央部に灰黄色の薄層が認められ、上下に2分できる。
- ⑤ 5層：シルト質粘土で、根跡を充填して中～粗砂が認められる。酸化鉄が僅かに、黒褐色のマンガン斑がやや多く分布する。
- ⑥ 6層：シルト質粘土で、根跡を充填して中～粗砂が認められる。有機質。酸化鉄、マンガン斑ともに僅かに分布する。

表1 微化石概査結果

地点	試料No.	花粉	微粒炭	植物片	柱状	植物茎断片	火山ガラス
OS1	1	○	△	△	○	○	○
	2	○	△	△	○	○	○
	3	○	△	△	○	○	○
OS2	1	○	△	△	○	○	○
	2	○	△	△	○	○	○
	3	○	△	△	○	○	○

凡例 ○：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる
△：通常に少ない △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

(2) 微化石概査結果

微化石概査結果を表1に示す。

(3) 花粉分析結果

析結果を花粉ダイアグラム（図6・7）と花粉化石組成表（表2）に示す。花粉ダイアグラムでは、分類群ごとの百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている）を、スペクトルで表している（木本（針葉樹）

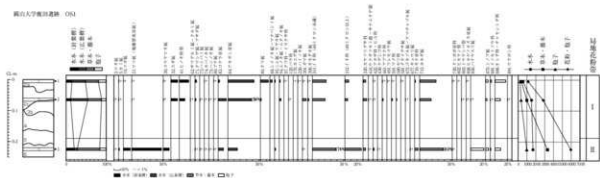


図6 花粉ダイアグラム：OS1

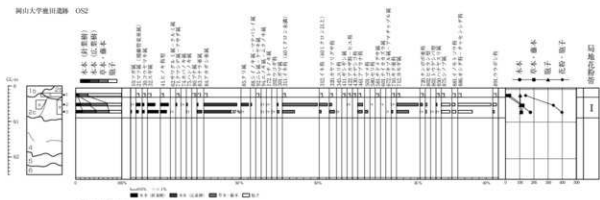


図7 花粉ダイアグラム：OS2

表2 花粉化石組成表

試料番号	OS1			OS2		
	1	2	3	1	2	3
3 <i>Piceae</i>		マノキ属	1 0.6%	1 0.4%		
5 <i>Abies</i>		ヒノキ属	3 1.3%			
10 <i>Taxus</i>	2 0.9%	ツゲ属	26 11.2%		1 0.9%	3 1.4%
21 <i>Pinus (Diploxyloides)</i>	1 0.5%	マツ属 (複雑型葉脈系属)	112 48.3%	4 17.4%	7 6.3%	8 3.8%
20 <i>Sciadopitys</i>	2 0.9%	ウツギヤブキ属	23 9.9%	6 28.1%	3 2.7%	7 3.2%
32 <i>Corymbium</i>	24 11.2%	ササ属	36 10.7%	3 13.0%	12 10.8%	33 15.6%
41 <i>Cyperaceae type</i>		ヒノキ科型	22 9.1%	3 1 4.3%	13 11.7%	19 9.0%
62 <i>Pterocarya Jugoslavica</i>		ササグサ目ノキ属-ケルミ属	1 0.4%			1 0.5%
71 <i>Carpinus-Ostrya</i>	6 2.8%	カマツハシ属-アザダ属	4 1.6%	1 0.4%	1 4.3%	2 1.8%
73 <i>Corylus</i>		ハシバミ属	1 0.4%	1 0.4%		
74 <i>Betula</i>	2 0.9%	カバノキ属	1 0.4%	1 0.4%	1 0.9%	
75 <i>Alnus</i>		ハシバミ属	1 0.4%	2 0.9%	2 1.8%	1 0.5%
80 <i>Fagus</i>	1 0.5%	ブナ属	1 0.4%	2 0.9%		
83 <i>Quercus</i>	5 2.3%	コナラ属	22 13.2%	20 8.6%	2 8.7%	2 1.8%
84 <i>Cyclobalanopsis</i>		アカガシ属	137 56.4%	36 15.5%	4 17.4%	52 46.8%
85 <i>Castanea</i>	28 13.0%	クワ属	4 1.6%			12 10.8%
88 <i>Castanopsis-Panicum</i>		シノノキ属-マツバシイ属	8 3.7%			2 1.8%
92 <i>Ulmus-Zelkova</i>		ニレ属-ケヤナシ属	3 1.4%	4 1.7%	1 4.3%	
94 <i>Celtis-Aphananthe</i>	4 1.9%	エノキ属-ムクノキ属	7 2.9%			1 0.9%
97 <i>Moraceae-Urticaceae</i>	1 0.5%	クワ科-イヌナギ科				
125 <i>Rosaceae</i>		バラ科				
170 <i>Aster</i>	1 0.5%	カエデ属	1 0.4%			
172 <i>Asteraceae</i>		トキノキ属			1 0.9%	1 0.5%
262 <i>Araliaceae</i>		ウコギ科				1 0.5%
220 <i>Sonchitaceae</i>	1 0.5%	ハコノキ属				
301 <i>Typha</i>	1 0.5%	ゴマ属	15 6.2%	2 0.9%		2 1.8%
306 <i>Sagittaria</i>	2 0.9%	ホトケアオイ属	5 2.1%			
311 <i>Gramineae (<40)</i>	48 22.3%	イネ科 (40ミクロン未満)	171 73.7%	11 47.8%	55 49.5%	37 17.5%
312 <i>Gramineae (>40)</i>	14 6.5%	イネ科 (40ミクロン以上)	62 26.7%	3 13.0%	13 11.7%	6 2.8%
320 <i>Cyperaceae</i>	10 4.7%	カヤツリガサ科	10 4.3%	3 13.0%	4 3.6%	16 7.5%
343 <i>Liliaceae</i>		ユリ科				1 0.5%
411 <i>Rumex</i>		ギョウゼンシ属			1 4.3%	
416 <i>Eichornaceae-Pericariae</i>		ウツギヤブキ目ノキ属-サナエダ目	1 0.4%	1 0.4%		
422 <i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	1 0.5%	アカヤナギ科-ヒユ科	5 2.2%	1 4.3%	1 0.9%	
430 <i>Caryophyllaceae</i>		ナデシコ科	1 0.4%	1 4.3%		
461 <i>Cruciferae</i>	2 0.9%	アブラナ科	1 0.4%	11 47.8%	8 7.2%	14 6.6%
491 <i>Simpliciter</i>	1 0.5%	ワカモノ科				
501 <i>Leguminosae</i>	2 0.9%	マメ科	4 1.6%			10 4.7%
580 <i>Umbelliferae</i>		セウゴ科	3 1.2%			
581 <i>Hydrocotyle</i>	1 0.5%	チヂメ科			2 8.7%	1 0.9%
601 <i>Tracheopogonaceae</i>		チイカズラ属				1 0.5%
672 <i>Actinostemon-Gymnostemon</i>		ゴブル属-アマチャヅル属	1 0.4%			
677 <i>Cacumia</i>		キヌワリ属		1 0.4%		
719 <i>Cardioidae</i>	3 1.4%	キナンド科	3 1.2%	13 5.6%	2 8.7%	1 0.9%
712 <i>Asteraceae</i>	57 26.5%	ヨモギ科	45 18.5%	192 82.8%	31 134.8%	34 30.6%
720 <i>Celastraceae</i>	1 0.5%	シソ科	2 0.9%	1 4.3%	4 3.6%	1 0.5%
802 <i>Ulmastachys sieboldii type</i>	1 0.5%	ヒモクリダ科				3 2.7%
803 <i>Ulmastachys serratum type</i>		トゲシロ科				1 0.5%
808 <i>Subgenus Eucopidium</i>	1 0.5%	ヒコガネノコブシ属				
850 <i>Ophioxylon</i>		ハチヤスリ属	2 0.8%	30 21.6%	3 13.0%	2 1.8%
875 <i>Juncifera</i>	9 4.2%	シノブ属	6 2.5%	11 4.7%	45 195.7%	14 12.6%
881 <i>Pteridaceae</i>	5 2.3%	イノモトウケ属	2 0.8%	2 1.3%	11 62.8%	5 4.5%
886 <i>Aspid-Asplen</i>	38 17.7%	オンシロ科-チヤセンシダ科	22 9.1%	22 9.5%	108 409.0%	52 46.8%
891 <i>Polypodiaceae</i>		ウラボシ科	1 0.4%	3 13.0%	6 5.4%	5 2.4%
896 <i>MONOLATE-TYPE SPORE</i>	15 7.0%	華太藻類子	8 3.2%	11 4.7%	43 187.0%	15 13.5%
899 <i>TRI-LATE-TYPE SPORE</i>	18 8.4%	華太藻類子	12 4.9%	37 15.9%	34 147.8%	10 9.0%
木本花粉総数	214 48.1%	243 53.3%	232 28.1%	23 6.8%	111 32.5%	211 44.1%
草本・蕨本花粉総数	144 32.4%	138 34.6%	460 55.7%	67 19.9%	124 36.3%	135 28.2%
孢子総数	87 19.6%	55 12.1%	134 16.2%	307 73.9%	107 31.2%	132 27.6%
総数	445	436	826	307	342	478
含有量 [粒数/g]	399	373	590	142	337	398

右よりカウント数, 百分率

は黒、木本 (広葉樹) は暗灰、草本・蕨本は明灰、孢子は白のスペクトルで表した。左端の [総合ダイアグラム] では「木本 (針葉樹)」、「木本 (広葉樹)」、「草本・蕨本」と「孢子」の割合を示すグラフを示した。右端の [含有量ダイアグラム] では「木本」、「草本・蕨本」、「孢子」「花粉・孢子 (全ての合計)」ごとに含有量 (湿潤試料 1g 中の粒数) の変化を示している。

(4) 植物珪酸体分析結果

分析結果を植物珪酸体ダイアグラム (図8・9) と植物珪酸体組成表 (表3) に示す。

植物珪酸体ダイアグラム (図8・9) では、検出量を 1g あたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

OS1試料No1ではイネが3,000粒/gと、やや多く検出できたが、OS2試料No2では、500粒/gに止まった。ヨシ属やウツギサ族Aなどの湿性植物に由来する分類群やススキ属型、ササ類など乾燥地に生育する分類群のほか、栽培種であるハトムギを含むジュズダマ属型も両試料から検出された。

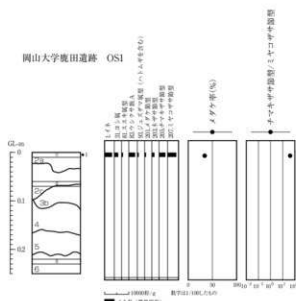


図8 植物珪酸体ダイアグラム：OS1

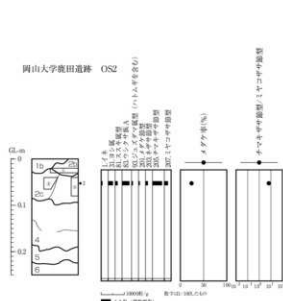


図9 植物珪酸体ダイアグラム：OS2

e. 局地花粉帯の設定

花粉分析結果を基に、花粉帯を行った。

以下に、各（局地）花粉帯の特徴を記載する。また、時間的な推移が明らかになるよう、下位から上位に向かって記載を行った。

① II帯（OS1試料No.3）

マツ属（複雑管束亜属）が高率を占めるほか、アカガシ亜属、ツガ属、コウヤマキ属、コナラ亜属がその他の種類に比べ高率を示す。草本・藤本花粉ではヨモキ属、イネ科（40ミクロン未満）が、胞子ではハナヤスリ属が高率を示す。

② I帯（OS1試料No.2、1、OS2試料No.3、2）

アカガシ亜属が高率を占め、スギ属、ヒノキ科型、コナラ亜属、クリ属が続く。これらの内クリ属は、試料により高率を示した。草本・藤本花粉ではヨモキ属、イネ科（40ミクロン未満）が、胞子ではオンシダ科－チャセンシダ科が高率を示す。

f. 古植生の推定

軟X線写真観察結果では、堆積後に受けた酸化・還元作用によって、マンガンや鉄の検出が極めて多く、土壌化の一つの指標であるベッドが十分に観察できなかった。また、OS2試料No.1では、酸化・還元作用により、花粉・胞子が劣化・消滅したと考えられるデータも得られている。このような状況下で、得られた花粉化石群集の一部には、花粉、胞子の種類によって、選択的に残存（あるいは消滅）した可能性も指摘できる。

以下では、花粉分析結果、植物珪酸体分析結果を基に、調査地周辺の古植生を花粉帯ごとに推定する。

表3 植物珪酸体化石組成表

試料No.	地点	
	OS1	OS2
1 イネ	6	1
	30	5
	0.87	0.15
31 ヨシ属	3	4
	15	20
	0.94	1.28
81 ススキ属型	1	2
	5	10
	0.06	0.13
83 ウシクサ族A	5	6
	25	31
	-	-
93 ジュズダマ属型	1	5
	5	5
	-	-
201 メダケ属型	1	1
	10	10
	0.06	0.06
203 ネザ草属型	2	2
	25	41
	0.05	0.05
205 ナマキヤサ草属型	5	8
	5	15
	0.19	0.31
207 ミヤコザ草属型	1	3
	40	46
	0.01	0.05
プラント・オパール総数	24	30
	490	480
	514	510
試料重量 (×0.0001g)	8930	8680
	227	232
	34.4	23.5
メダケ率 (%)		
ナマキヤサ草属型/ミヤコザ草属型	12.5	6.7
上段 検出総数		
中段 検出密度 (単位: ×100粒/g)		
下段 推定生産量 (単位: kg/m ² ・年)		

(1) II 帯期 (OS1試料No3 (6層))

：鹿田遺跡基本層序9層(弥生時代後期～古墳時代前期前葉)

マツ属(複維管束亜属)が高率を示す。マツ属(複維管束亜属)が高率を示すのは、一般に人為による森林破壊(里山化)が進む中世以降のことである。今回の試料の堆積時期が弥生時代と考えられることから、調査地近辺で局所的にマツ林が分布した可能性が指摘できる。鹿田遺跡は瀬戸内海にごく近かったと考えられており(山本2014)、海岸林(クロマツ林)に由来する可能性も指摘できる。遺跡周辺の丘陵には、カシ類を主要素とし、モミ、ツガ、コウヤマキなどの温帯針葉樹を混植した森林が分布していたと考えられる。また、調査地近辺はアシ等のイネ科草本やガマ類、カヤツリグサ類の繁茂する湿地で、やや離れた所では水田耕作も行われていたと考えられる。また、キュウリ属の花粉が検出され、キュウリが栽培されていた可能性が指摘できる(雑草メロンやウリ類の可能性もある)。

(2) I 帯期 (OS1試料No2 (2c層)、1 (2a層)、OS2試料No3 (2c層左)、2 (2c層右))

：鹿田遺跡基本層序7層(古墳時代前期前葉)

マツ属(複維管束亜属)が低率になり、アカガシ亜属が高率を示す。調査地近辺での沖積作用が進み、海岸が遠のいたために、マツ属(複維管束亜属)の出現率が低下し、周辺の丘陵由来のアカガシ亜属が高率になったものと考えられる。一方、試料によりクリ属が高率で検出された。クリ属は花粉生産量が多いが、散布距離が短く、分布域の近くで高率を示す傾向にある。したがってこの時期に、断続的であるがクリが近辺に生育していたと考えられる。

SO1では草本花粉の割合が減少し、調査地近辺が開放的な環境が拡大したと考えられる。II帯期より分布域が減るものの、引き続きアシ等のイネ科草本やガマ類、カヤツリグサ類の繁茂する湿地であった可能性が指摘できる。一方で2a～2c層には耕作土の可能性が指摘されていた。OS1試料No1、OS2試料No2で僅かながらイネ由来の植物珪酸体や、ハトムギの可能性のあるジュズダマ属型の植物珪酸体が検出されるなど、耕作土を示唆する結果も得られている。ただしこれらの検出密度が低く、花粉化石の量も少ないことから、調査地が水田や畠であった可能性は低い。近辺での耕作、あるいは上位の作土から生物擾乱によってもたらされた可能性が指摘できる。

g. まとめ

鹿田遺跡第26次調査で検出された小区画溝群及び下位層を対象として、軟X線写真観察、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 軟X線写真観察の結果、マンガンを多く検出されていたために、土壌構造が十分に観察できなかった。また一部の試料では、マンガンを鉄の検出に伴う酸化・還元作用に由来する花粉、胞子の劣化消滅が顕著であった。
- (2) 花粉分析の結果を基に2局地花粉帯を設定し、植物珪酸体分析結果を加味して、花粉帯ごとに古植生を推定した。特筆すべき点を以下に示す。
 - ① II帯期(6層堆積時)には、調査地(鹿田遺跡)近辺での、クロマツ海岸林の存在が示唆できた。
 - ② I帯期(2c層堆積時)に、調査地(鹿田遺跡)内あるいは近辺に、クリが生育していた。
 - ③ 2a、2c層からイネ、ジュズダマ属型の植物珪酸体が検出できた。また、イネ科(40ミクロン以上)花粉も検出されているが、これらの層を作土とするには、いずれも量が少なかった。近辺での耕作、あるいは上位の作土から生物擾乱によってもたらされた可能性がある。

引用文献

- 中村 純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究II-数種イネ科栽培植物の注酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, 15-29
 久馬一昭・八木久義監修 (1989) 土壌記載簿片ハンドブック, p176, 博友社, 東京.
 山本悦世 (2014) 鹿田道路, 発掘30年弥生時代を語る!, 岡山大学理蔵文化財調査研究センター報, 51, 1-3.
 渡辺正巳 (2010) 花粉分析法, 必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177, ニュー・サイエンス社.

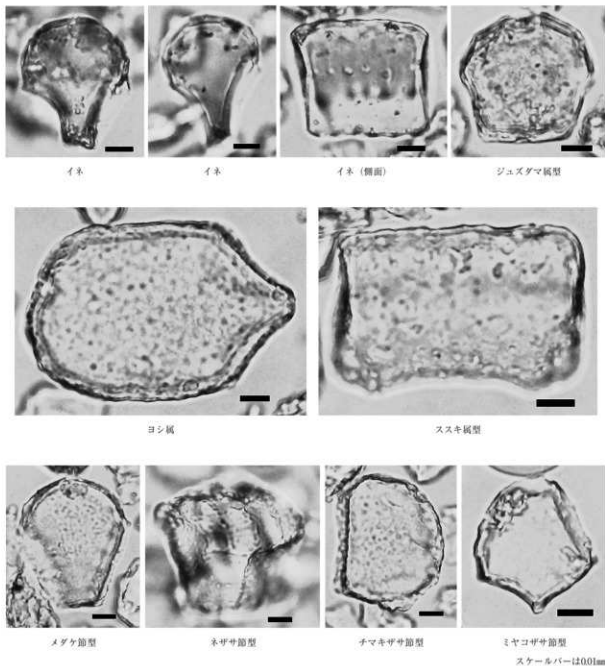


図10 顕微鏡写真：植物珣酸体

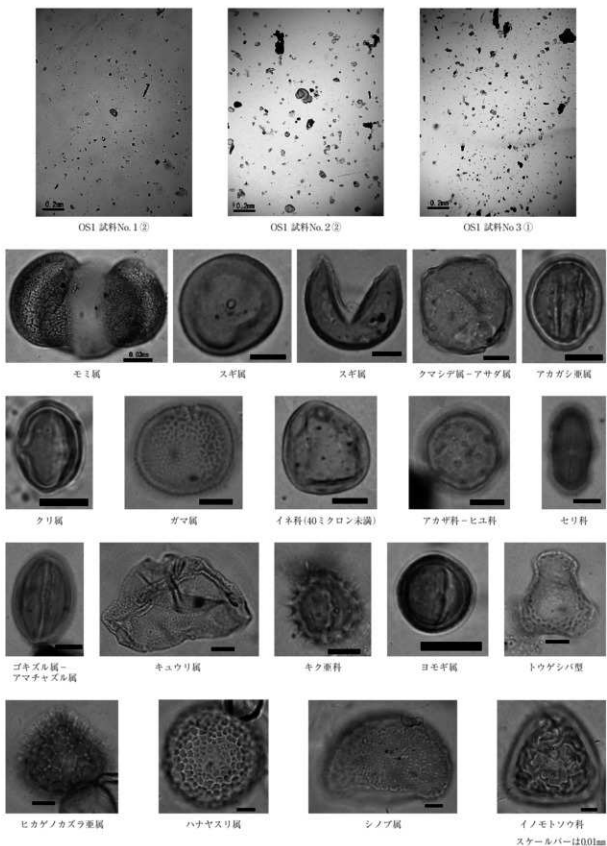


図11 顕微鏡写真：花粉・胞子

第2節 鹿田遺跡第17・26次調査出土木製品類と自然木の樹種

能城 修一（明治大学黒曜石研究センター）

a. はじめに

鹿田遺跡第17・26次調査で出土した古墳時代前期前葉と中世～近代の木製品類と自然木の樹種を報告する。同定不能のもの1点を除いた内訳は、第26次調査の古墳時代前期前葉が6点、第17次調査の中世前半が5点、第26次調査の中世前半が92点、第17次調査の中世が2点、第17次調査の中世後半～近世が3点、第17次調査の近世が11点、第17次調査の近代が1点の合計120点である。

b. 方法

樹種同定は、木取りを観察した後、遺物から片刃カミソリで横断面と、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラル（抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入しておこなった。各プレパラートにはOKUF-1815～1935の番号を付して標本番号とした。標本は明治大学黒曜石研究センターに保管されている。

c. 結果

総数120点の試料中には、針葉樹6分類群、広葉樹11分類群、単子葉植物1分類群の計18分類群が見いだされた。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図1：1a-1c（枝・幹材、OKUF-1862）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞のみからなり、壁には単壁孔が著しい。分野壁孔は小型のスキ型～ヒノキ型で1分野に2～3個。

(2) ツガ属 *Tsuga* マツ科 図1：2a-2c（枝・幹材、OKUF-1908）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、柔細胞の壁には単壁孔が著しい。分野壁孔は小型のスキ型～ヒノキ型で1分野に2～3個。

(3) アカマツ *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 図1：3a-3c（枝・幹材、OKUF-1914）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、放射仮道管の水平壁は重鋸歯をもつ。分野壁孔は大型の窓状で1分野に1個。

なお、放射仮道管に鋸歯の存在は認められるが重鋸歯かどうか確認できない資料はマツ属複雑管束亜属と同定した。

(4) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1：4a-4c（枝・幹材、OKUF-1860）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は少ない。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に2個。

(5) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don ヒノキ科 図1：5a-5c（枝・幹材、OKUF-1833）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量はやや少ない。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は大型のスキ型で1分

野に2個。

- (6) アスナロ *Thuajopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図1・2: 6a-6c (枝・幹材, OKUF-1915)
 垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量はやや多い。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、褐色の樹脂が多く、分界壁孔は小型のS型～ヒノキ型で1分野に2～3個。
- (7) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図2: 7a-7c (枝・幹材, OKUF-1858)
 小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、道管相互壁孔は階段状。放射組織はほぼ同性で2細胞幅位。
- (8) クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl クスノキ科 図2: 8a-8c (枝・幹材, OKUF-1898)
 ごく大型～小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して年輪内でやや小型化しながら疎らに散在する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状で、大型の油細胞をもつ。放射組織は上下端の1列はどうか直立する異性で3細胞幅位、不規則に層階状に配列する。
- (9) タケ亜科 Subfam. Bambusoideae イネ科 図2: 9a (稈, OKUF-1925)
 基本組織中に維管束が不整に配列し、維管束の中には大径の後生木部道管が一对のあり、その髄腔側に原生木部が、表皮側に篩部があって、これらを厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が取り囲む。
- (10) コウゾウ属 *Broussonetia* クワ科 図2: 10a-10c (枝・幹材, OKUF-1865)
 中型でまるい道管がほぼ単独で年輪のはじめに3列ほど配列し、晩材では小道管が10数個ずつ丸い塊をなして散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1列はどうか直立する異性で2細胞幅位。
- (11) イヌビワ類 *Ficus cf. erecta* Thunb. クワ科 図2: 11a-11c (枝・幹材, OKUF-1890)
 大型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2個複合して疎らに散在する散孔材。木部柔組織は7細胞幅位の帯状で、周縁には鎖状の菱形結晶をもつ。放射組織は上下端の1列はどうか直立する異性で4細胞幅位。
- (12) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l. バラ科 図2: 3: 12a-12c (枝・幹材, OKUF-1872)
 小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して斜めに連なる傾向をみせて散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の数列が直立する異性で3細胞幅位。
- (13) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図3: 13a-13c (枝・幹材, OKUF-1926)
 大型で丸い孤立道管が年輪の始めに3列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は単列同性。
- (14) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図3: 14a-14c (枝・幹材, OKUF-1917)
 大型で丸い孤立道管が年輪の始めに1～2列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した厚壁の丸い孤立道管が放射状～火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、単列のものと大型の複合状のものとは異なる。
- (15) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図3: 15a (枝・幹材, OKUF-1909)
 やや大型で丸い孤立道管が年輪の始めに3列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した薄壁の孤立道管が放射状～火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、単列のものと大型の複合状のものとは異なる。
- (16) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図3: 16a (枝・幹材, OKUF-1911)
 中型で丸い孤立道管が放射状に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつで幅の狭い帯状。放射組織は同性で、単列のものと大型の複合状のものとは異なる。

07) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. サカキ科 図3:17a-17c (枝・幹材, OKUF-1907)

ごく小型の孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は40段ほどの階段状。放射組織は単列異性。

08) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図3:18a-18c (枝・幹材, OKUF-1902)

ごく小型の孤立道管が年輪内で小型化しながら密に散在する散孔材。道管の穿孔は20段ほどの階段状。放射組織は異性で2細胞幅位、直立部には大型の菱形結晶をもつ。

d. 考察

木製品類は、曲物や井戸枠、板材、部材などを主体としており、時代を通じて針葉樹の利用が顕著であった(表1)。針葉樹ではスギとヒノキ、アカマツを含むマツ属複雑管束亜属の利用が多く、なかでもスギは中世前半の井戸枠側板や板材として多用されていた。広葉樹では、クリがおもに杭として利用されており、クリ以外の広葉樹では、中世前半の杭にサクラ属(広義)が、同時期の板材にクスノキが目立った。

岡山県内で出土した古墳時代以降の木製品類を見ると、スギが総数1215点中324点ともっとも多く、ヒノキが162点、マツ属複雑管束亜属が120点となっており(伊東・山田2012)、鹿田遺跡第17・26次調査出土の木製品類も同様の素材選択を示している。一方、広葉樹で見ると、クリは総数1215点中26点で、76点のコナラ属アカガシ亜属や68点のコナラ属クスギ節、40点のシノキ属よりも少なく、鹿田遺跡における特有の樹種選択を示すものかもしれない。実際、これまでに鹿田遺跡で出土した古墳時代以降の木製品類743点中でも、クリは31点を占め、コナラ属クスギ節の59点に次いで多く、遺跡周辺にはクリが継続的に生育していたと想定される。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編. 2012. 木の考古学: 出土木製品用材データベース. 449pp. 海青社, 大津.

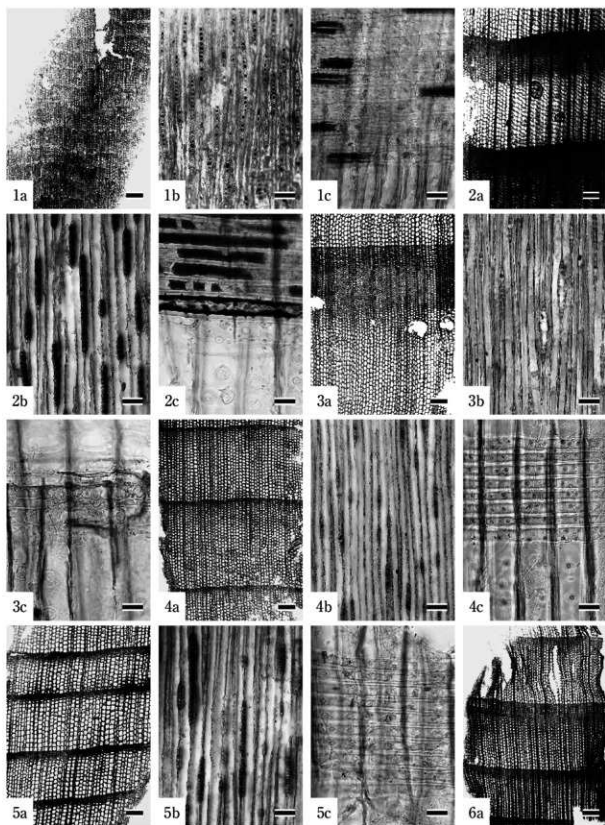


図1 鹿田遺跡第17・26次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(1)

1a-1c: モミ属(枝・幹材, OKUF-1862), 2a-2c: ツガ属(枝・幹材, OKUF-1908), 3a-3c: アカマツ(枝・幹材, OKUF-1914), 4a-4c: ヒノキ(枝・幹材, OKUF-1860), 5a-5c: スギ(枝・幹材, OKUF-1833), 6a: アスナロ(枝・幹材, OKUF-1915), a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=25 μ m).

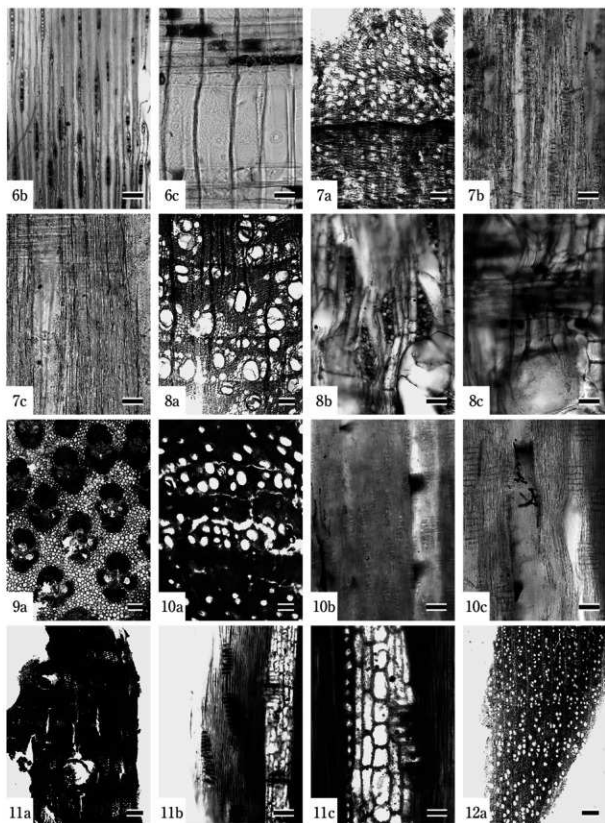


図2 鹿田遺跡第17・26次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(2)

6b-6c: アスナロ (枝・幹材, OKUF-1915), 7a-7c: モクレン属 (枝・幹材, OKUF-1858), 8a-8c: クスノキ (枝・幹材, OKUF-1898), 9a: タケ亜科 (幹, OKUF-1925), 10a-10c: コウゾ属 (枝・幹材, OKUF-1865), 11a-11c: イヌビワ類 (枝・幹材, OKUF-1890), 12a: サクラ属 (広義) (枝・幹材, OKUF-1872). a: 横断面 (スケール=200 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m), c: 放射断面 (スケール=25 (6c), 50 μ m).

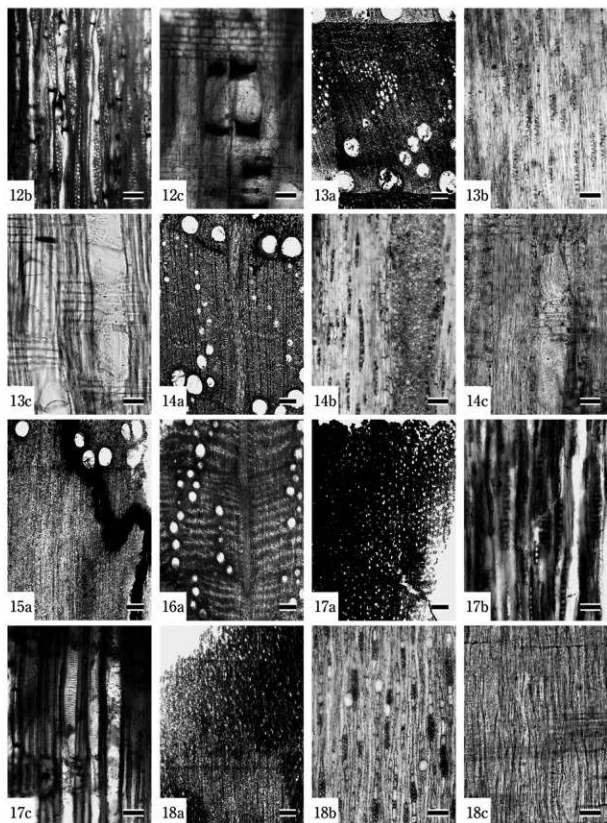


図3 鹿田遺跡第17・26次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(3)

12b-12c: サカラ属(広義)(枝・幹材, OKUF-1872), 13a-13c: クリ(枝・幹材, OKUF-1926), 14a-14c: コナラ属クスギ節(枝・幹材, OKUF-1917), 15a: コナラ属コナラ節(枝・幹材, OKUF-1909), 16a: コナラ属アカガシ坐節(枝・幹材, OKUF-1911), 17a-17c: サカキ(枝・幹材, OKUF-1907), 18a-18c: ツバキ属(枝・幹材, OKUF-1902). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).

表2 樹種一覧 (第26次調査)

OKUF番号	樹種名	SR	製品名	本取り	遺構	時代	国番号	掲載番号		
1815	スギ	S	井戸枠側板	板目	井戸3	中世前半	0640	W6		
1816	スギ	S	井戸枠側板	板目			0640	W4		
1817	スギ	S	井戸枠側板	板目			0640	W7		
1818	スギ	S	井戸枠側板	板目			0640	W3		
1819	スギ	S	井戸枠側板	板目			0640	W5		
1820	スギ	S	井戸枠側板	板目						
1821	スギ	S	井戸枠側板	板目						
1822	スギ	S	井戸枠横棧	板目			0640	W8		
1823	スギ	S	板材	板目						
1824	スギ	S	板材	板目						
1825	スギ	S	板材	板目						
1826	スギ	S	板材	板目						
1827	スギ	S	板材	板目						
1828	スギ	S	板材	板目						
1829	タケ巻科	S	竹筒	一						
1830	スギ	S	板材	板目						
1831	スギ	S	棒状部材	割材						
1832	スギ	S	板材	板目						
1833	スギ	S	不明	追い板目						
1834	スギ	S	不明	割材						
1835	スギ	S	部材	割材						
1836	スギ	S	板材	板目						
1837	スギ	S	板材	板目						
1838	スギ	S	板材	板目						
1839	スギ	S	板材	板目						
1840	スギ	S	板材	板目						
1841	アカマツ	S	棒状割材	割材			溝22	中世前半		
1842	スギ	S	下駄	芯持ち材					0663	W32
1843	マツ属複雑管束系属	S	部材	割材						
1844	クリ	S	板材	割材						
1845	スギ	S	板材	板目						
1846	マツ属複雑管束系属	S	板材	割材						
1847	クリ	S	柱	丸木	0661	W20				
1848	スギ	S	部材	割材	0662	W30				
1849	スギ	S	蓋	板目	0662	W21				
1850	スギ	S	板材	板目	0662	W29				
1851	スギ	S	板材	板目	0662	W24				
1852	スギ	S	板材	板目						
1853	スギ	S	板材	板目						
1854	スギ	S	板材	板目	0662	W25				
1855	スギ	S	板材	板目	0662	W26				
1856	スギ	S	板材	板目	0662	W27				
1857	スギ	S	板材	割材	0662	W28				
1858	モクレン属	S	部材	割材	0662	W22				
1859	コナラ属クスギ節	S	円形加工材	板目	0662	W23				
1860	ヒノキ	S	曲物側板	板目						
1861	スギ	S	板材	板目						
1862	モミ属	S	自然木	丸木						
1863	スギ	S	板材	板目						
1864	マツ属複雑管束系属	S	棒状加工材	丸木	0662	W31				
1865	コウソク属	S	自然木	丸木						

OKUF番号	樹種名	SR	製品名	本取り	遺構	時代	図番号	掲載番号		
1866	スギ	S	板材	板目	溝22	中世前半				
1867	マツ属複雑管束亜属	S	板材	割材						
1868	スギ	S	板材	割材						
1869	スギ	S	板材	割材						
1870	スギ	S	板材	板目						
1871	コナラ属クヌギ節	S	杖?	丸木						
1872	サクラ属 (広義)	S	杖	割材						
1873	サクラ属 (広義)	S	杖	不明						
1874	クリ	S	杖	丸木				D661	W18	
1875	スギ	S	杖	丸木						
1876	クリ	S	杖	半割				D661	W15	
1877	サクラ属 (広義)	S	杖	割材						
1878	クリ	S	杖	丸木				D661	W19	
1879	クリ	S	杖	丸木				D661	W14	
1880	クリ	S	杖	榎目				D661	W16	
1881	クリ	S	杖	丸木				D661	W17	
1882	スギ	S	板材	榎目						
1883	マツ属複雑管束亜属	S	玉状木製品	丸木						
1884	スギ	S	板材	板目						
1885	スギ	S	板材	榎目						
1886	スギ	S	板材	板目						
1887	スギ	S	板材	榎目						
1888	スギ	S	板材	榎目						
1889	マツ属複雑管束亜属	S	棒状加工材	丸木						
1890	イヌビワ類	S	板材	不明						
1891	スギ	S	板材	板目						
1892	クリ	S	杖	丸木						
1893	スギ	S	板材	板目						
1894	マツ属複雑管束亜属	S	板材	板目						
1895	スギ	S	板材	板目						
1896	サクラ属 (広義)	S	自然木	丸木			溝18	中世前半		
1897	ヒノキ	S	棒状木製品	芯なし削り出し						
1898	クスノキ	S	板材	板目						
1899	クスノキ	S	板材	板目						
1900	マツ属複雑管束亜属	S	自然木	丸木						
1901	コナラ属クヌギ節	S	自然木	丸木						
1902	ツバキ属	S	玉状木製品	丸木		D651			W13	
1903	ヒノキ	S	部材	割材						
1904	ヒノキ	S	板材	板目						
1905	スギ	S	板材	榎目						
1906	ヒノキ	S	部材	榎目	井戸1	古墳時代 前期前葉	D612	W1		
1907	サカキ	S	棒状木製品	丸木				D612	W2	
1908	ツバキ属	S	板材	板目	井戸2	古墳時代 前期前葉				
1909	コナラ属コナラ節	S	自然木	丸木						
1910	コナラ属コナラ節	S	自然木	丸木						
1911	コナラ属アカガシ亜属	S	自然木 (?)	丸木						
1912	×		板材	割材			P1	中世前半		
1913	スギ	S	板材	榎目	溝22	中世前半				

※OKUF1914～1935は第17次調査出土の木製品・自然木であるが、該当調査は未報告であるため、ここでは第26次調査出土のもののみ一覧表に掲載した。

第3節 鹿田遺跡第26次調査出土曲物の樹種同定

（株吉田生物研究所）

a. 試料

試料は鹿田遺跡から出土した曲物1点（報告図41-W9、本書35頁）である。

b. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柀目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

c. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種、樹皮1種）の表と顕微鏡写真を示し（図1・2）、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

(1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don) (遺物No.1A, 1B, 1E, 1F) (写真No.1A, 1B, 1E, 1F)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柀目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

(2) 針葉樹 (遺物No.1C) (写真No.1C)

木口と柀目は採取出来なかった。板目では繊維状の仮道管が見られ、放射細胞はすべて単列であった。

(3) ヤマザクラorカバの樹皮 (遺物No.1D) (写真No.1D)

横断面と接線断面は採取出来なかった。放射断面ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。しかし桜、樺の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

◆参考文献◆

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
 鳥地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-F11

表1 岡山大学鹿田遺跡出土木製品同定表

遺物No.	品名	樹種
1-A	曲物（本体）	スギ科スギ属スギ
1-B	曲物（籜）	スギ科スギ属スギ
1-C	曲物（本体の縦じ皮）	針葉樹
1-D	曲物（籜の縦じ皮）	ヤマザクラorカバの樹皮
1-E	曲物（内側の籜）	スギ科スギ属スギ
1-F	曲物（内側紐付細板）	スギ科スギ属スギ

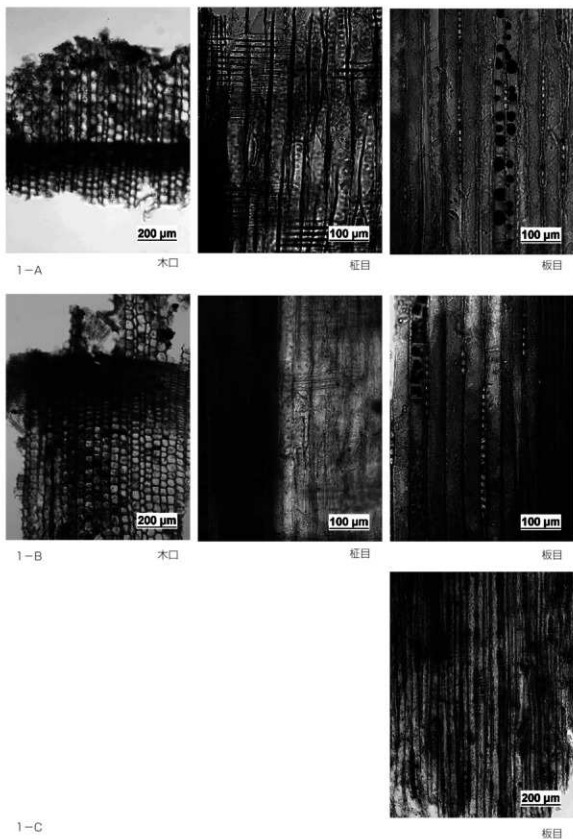


図1 顕微鏡写真1

1-D



放射断面



木口

1-E



砑目

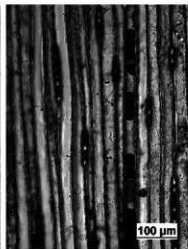


板目



砑目

1-F



板目

图2 顕微鏡写真2

第4節 鹿田遺跡第26次調査出土曲物付着有機物の材質調査

（株吉田生物研究所）

a. はじめに

岡山市に所在する、鹿田遺跡第26次調査で出土した曲物1点（報告図41-W9、本書35頁）には、綴じ具として紐状の有機物が使用されていた。その材質を明らかにする目的で調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

b. 調査資料

調査した資料は、表1に示す有機物1点である。

表1 調査資料

No	品名	概 要
1	紐	曲物の銅板の綴じ部分に使用されていた。束状に遺存している。

c. 調査方法

表1の資料本体から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、有機物の断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した（図1）。

d. 断面観察

横断面：土中で腐朽が進行しているため、明確な組織の形状は認められなかった。辛うじて、植物繊維の繊維細胞かと判別がつく。単細胞ではなく、それほど結束は固くない様子で丸い外形の繊維細胞が複数集まる様子が観察された。

縦断面：同一方向に植物細胞が並ぶ様子が観察された。

以上のような横断面と縦断面の様子から、この有機物はアサ類の可能性が高いと考えられる。

e. 摘要

鹿田遺跡第26次調査で出土した曲物に残存する紐状の有機物の材質調査を行った。アサ類の可能性が高い。

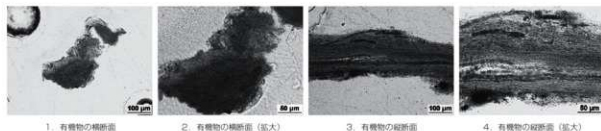


図1 断面写真

第5節 鹿田遺跡第26次調査出土漆製品の塗膜構造調査および樹種同定

徳吉田生物研究所

a. 塗膜構造調査

(1) はじめに

岡山市に所在する、鹿田遺跡第26次調査地点の溝22から出土した漆製品について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

(2) 調査資料

調査した資料は、表1に示す中世の木椀1点である。なお、本資料は破片資料であり、図化はなされていない。

表1 調査資料

No.	品名	写真No.	樹種	概 要
1	漆器片	1, 3	シイ属	内面赤色で、外面黒色の椀の破片。

(3) 調査方法

表1の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

(4) 断面観察

塗膜断面の観察結果を、表2と以下の文章に示す。

表2 漆器の断面観察結果表

No.	器種	部位	写真No.	塗 膜 構 造 (下層から)			
				下 地		漆 層 構 造	顔 料
				膠着剤	混和材		
1	破片	内面	2	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
		外面	4	柿渋	木炭粉	透明漆1層	-

塗膜構造：下層から、木胎、下地、漆層が観察された。

下地：柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地がみられた。

漆層：外見の色が赤色のもの（No.1内面）は下地の上に顔料を何も含まない透明漆層が1層重なり、その上に赤色漆が1層重なっていた。

黒色のもの（No.1外面）は下地の上に透明漆層が1層重なっていた。

顔料：No.1内面の赤色漆層に混和された顔料は、比較的細かくて粒子の大きさがそろっているが、透明度は高い朱であった。

(5) 摘要

鹿田遺跡第26次調査地点の溝22から出土した、中世の漆製品の塗膜断面を調査した。

漆器椀破片の断面を観察したところ、外見が赤色の部分には下地の上に透明漆が1層と朱を混和した赤色漆が1層塗り重ねられていた。外見が黒色の部分には、下地の上に透明漆が1層塗り重ねられていた。下地は炭粉渋下地であった。

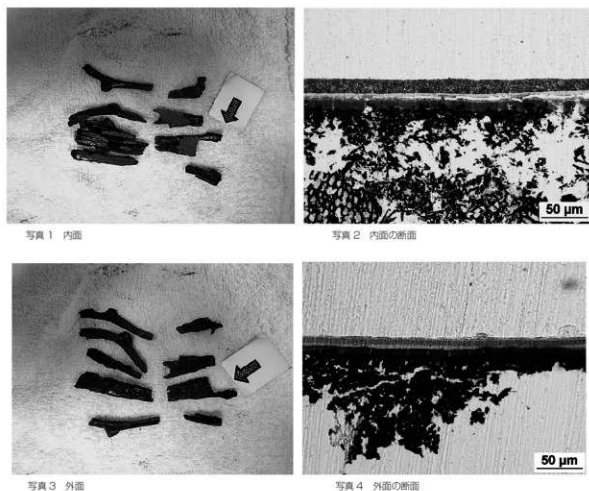


図1 分析資料と塗膜断面

b. 樹種調査結果

(1) 試料

試料は前項で述べた鹿田遺跡第26次調査溝22から出土した漆器碗1点である(表1)。

(2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果(広葉樹1種)の顕微鏡写真を示し(図2)、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) プナ科シイ属(*Castanopsis* sp.)

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管($\sim 300\mu\text{m}$)は単独でかつ大きい。接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柁目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で構状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスタジイがあるが、ツブラジイに見られる集合~複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州(福島、佐渡以南)、四国、九州、琉球に分布する。

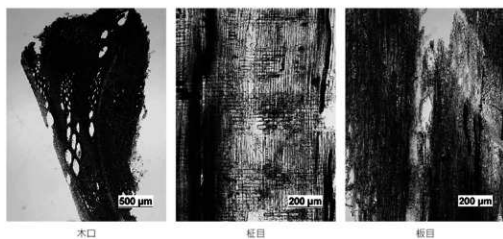


図2 断面写真

◆参考文献◆

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載1～V」京都大学木質科学研究所（1999）
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村西郎・村田 源「原色日本植物図鑑本編1・Ⅱ」保育社（1979）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-F11

第6節 鹿田遺跡第26次調査出土動物遺存体

江川 達也 (笠岡市教育委員会)

本調査では、中世前半に属する哺乳綱が出土した(表1・2)。骨質から哺乳綱であることは推定したが、目の同定が困難であった。以下に動物分類に従って出土資料の説明を行う。

1 中型クラス

中型クラスは3点出土した(ANo.1~3)。四肢骨が3点出土している。ANo.1は、上腕骨の可能性が高い。鹿田遺跡第9・11次調査では、中型クラスに属するシカが中世前半の層から出土している(江川2017)。

2 中～大型クラス

中～大型クラスは3点出土した(ANo.4~6)。四肢骨が2点、部位不明が1点出土している。

3 大型クラス

大型クラスは1点出土した(ANo.7)。四肢骨が1点出土している。大型クラスには、ウシ・ウマなどが属している。ウシは、鹿田遺跡第9・11次調査では中世前半・中世後半～近世初期の層より出土(江川2017)、第14次調査では鎌倉時代・室町時代・近代の層より出土(立石他2014)、第24次調査では中世・近世以降の層より出土し(江川2018a)、また、第20次調査A地点・25次調査では中世の層から出土している(江川2018b)。ウマは、鹿田遺跡第9・11次調査では中世前半・中世後半～近世初期の層より出土(江川2017)、第14次調査では近世の層より出土し(立石他2014)、また、第24次調査では中世・近世以降の層より出土している(江川2018a)。

表1 鹿田遺跡第26次調査出土動物遺存体種名

大分類		小分類			学名
門	上綱・綱	亜綱・亜区・目	科	亜科・属	
脊索動物門 CHORDATA	哺乳綱		目科属種不明		Mammalia order indet.

表2 鹿田遺跡第26次調査出土動物遺存体属性

ANo	遺構名	時期	大分類	小分類	部位名	LRM	難係	部分	成長度	破損	風化	色調
1	溝22	中世前半	哺乳綱	目不明(中型)	四肢骨(上肢骨?)	?	-	骨幹部	?	なし?	viv	Br
2	溝22	中世前半	哺乳綱	目不明(中型)	四肢骨	?	-	骨幹部	?	なし?	viv	Br
3	溝22	中世前半	哺乳綱	目不明(中型)	四肢骨	?	-	骨幹部	?	なし?	viv	Br
4	溝22	中世前半	哺乳綱	目不明(中～大型)	四肢骨	?	-	骨幹部	?	なし?	viv	Br
5	溝22	中世前半	哺乳綱	目不明(中～大型)	四肢骨	?	-	骨幹部	?	なし?	viv	Br
6	溝22	中世前半	哺乳綱	目不明(中～大型)	部位不明	?	-	骨幹部	?	なし?	viv	Br
7	溝22	中世前半	哺乳綱	目不明(大型)	四肢骨	?	-	骨幹部	?	なし?	viv	Br

引用文献

- 江川達也 2017 「9. 鹿田遺跡第9・11次調査出土動物遺存体」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第32冊 鹿田遺跡10」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.213-216
- 江川達也 2018a 「第2節 鹿田遺跡第24次調査出土動物遺存体」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊 鹿田遺跡11」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.76~81
- 江川達也 2018b 「第6節 鹿田遺跡第20次調査A地点・25次調査出土動物遺存体」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊 鹿田遺跡12」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.101, 102
- 立石和也・富岡直人 2014 「3. 鹿田遺跡第14次調査出土動物遺存体」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第29冊 鹿田遺跡8」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター p.74

第7節 鹿田遺跡第26次調査出土種子と種子圧痕

a. はじめに

本節では、鹿田遺跡第26次調査出土の種子及び種子圧痕の同定結果について報告する。

b. 種子

(1) 分析資料と方法

古墳時代の井戸1・2、土坑6と中世前半の井戸3、溝18について、土壌を持ち帰りフローテーション法(0.5mmメッシュ)を行い種子の検出を行った。種子の抽出・洗浄後に選別を行い、写真撮影と同定作業を行った。

(2) 結果

35科61種を確認した(表1、図1・2)。遺構の時期ごとにみると、古墳時代の遺構(井戸1・2、土坑6)から34科58種、中世の遺構(井戸3、溝18)から13科13種を確認した。遺構ごとでは、井戸1では21科37種、井戸2では19科28種であるのに対し、井戸3では7科7種であった。古墳時代の井戸の出土種子構成は似通っており、種類が多い。井戸の廃棄に伴う祭祀との関連がある可能性が考えられる。一方、中世の井戸、あるいは井戸以外の遺構からの出土種子は少なく、自然の流れ込みと考えられる。

c. 種子圧痕

(1) 分析資料と方法

本分析では、鹿田遺跡第26次調査から出土した土器すべてを実見したうえで、何らかの圧痕のある資料5点を対象とし、レプリカ法(丑野・田川1991)を用いて6点の圧痕レプリカを採取した。

<圧痕レプリカ作成方法>

①圧痕土器の選定 → ②圧痕部の洗浄 → ③土器の全体写真の撮影・実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真撮影 → ④離型材(バラロイドB72 5%アセトン溶液)を圧痕部とその周辺に都費 → ⑤シリコーン・ゴム(ニッシン・JIMシリコーンまたはモメンティブ・シリコーンTSE350)を圧痕部に充填 → ⑥乾燥後、シリコーン・ゴムを土器から離脱 → ⑦圧痕レプリカをオスミチウムによって煮沸後、走査型電子顕微鏡(日立S-4800)を用いて表面観察・撮影 → ⑧圧痕レプリカの法量を計測 → ⑨植物の同定

(2) 結果

同定できた圧痕レプリカは4点であり、1科2種を確認した(表2、図3)。弥生時代の溝2からイネ科エノコログサ属を確認した。中世前半の溝22ではイネ科2種を確認した。

本分析における種子および種子圧痕の同定は沖陽子(岡山大学特命教授)が行い、それに基づいて、岩崎志保(本センター)が資料をまとめた。文章は、協議のうえ岩崎が執筆し、全体を両者が調整したものである。

(岩崎志保・沖 陽子)

註

- (1) 機器の使用にあたっては岡山大学医学部共同実験室の協力を得た。

参考文献

- 且野 敏・田川裕美 1991 「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 文化財学会
 中山至大・井之口希寿・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版会

表1 検出種子一覧

科	種	遺構名					写真番号
		井戸1	井戸2	井戸3	土坑6	溝18	
アオイ科	ゼニアオイ属 (フユアオイ?)		●				1
アカザ科	アカザ	●	●	●	●		2
アカザ科	アリタソウ						3
アカザ科	カワラアカザ	●					4
アカザ科	シロザ (アカザ)	●					5
アカネ科	アカネ	●					6
アカネ科	ヘクソカズラ	●					7
アカネ科	ヤエムグラ	●	●		●		8
アサ科 (ニレ科)	ムクノキ				●		9
アワブキ科	ヤマビロ	●		●			10
イネ科	アワ		●				11
イネ科	オヒシバ	●					12
イネ科	キシメソコ		●				13
イネ科	スズメノヒエ					●	14
ウリ科	ウリ類		●				15
エゴノキ科	エゴノキ					●	16
カタバミ科	カタバミ		●			●	17
カバノキ科	クマシデ	●					18
カヤツリダマ科	ホタルイ	●	●				19
キク科	ゴボウ?			●			20
キク科	ヒレアザミ		●				21
キク科	メナシ	●					22
キク科	ヤブコヒラコ		●				23
クワ科	イズビワ	●					24
クワ科	カナムグラ	●		●			25
クワ科	カナムグラ	●					26
ケシ科	ケシ	●					27
ケシ科	ムラサキケマン	●					28
ギク科	ギク科		●				29
シソ科	キラシソウ		●				30
シソ科	クサギ	●					31
シソ科	ヒメジソ						32
スイカズラ科 (レンブクワ科)	ニワトコ		●				33
スベリヒユ科	スベリヒユ	●					34
スミレ科	スミレ		●				35
セリ科	セリ	●					36
センダン科	センダン	●	●			●	37
タデ科	イタドリ	●					38
タデ科	イヌタデ	●					39
タデ科	オオイヌタデ	●					40
タデ科	シロバナサクラタデ	●	●				41
タデ科	赤ソバナウナギツカミ	●					42
タデ科	ミチヤナギ			●			43
ツツラフジ科	アオツツラフジ				●		44
トウダイグサ科	アカメガシワ	●	●				45
トウダイグサ科	エノキグサ	●					46
ナス科	イヌホオズキ		●				47
ナデシコ科	ミドリハコベ		●			●	48
ナデシコ科	ワチヂイソウ	●					49
ハイノキ科	クロキ?		●				50
パウ科	キイチゴ属			●			-
パウ科	フユイチゴ	●					51
ヒノキ科	ヒノキ			●			52
ヒユ科	アオビユ		●				53
ヒユ科	イヌビユ		●				54
ブナ科	カシワの幼果	●					-
マタタビ科	サルナシ	●					55
マメ科	マメ属 ササゲ属	●					56
マメ科	ミヤコグサ	●					57
ミカン科	カラスザンショウ	●	●				58
ミズキ科	ハナイカダ?		●				59

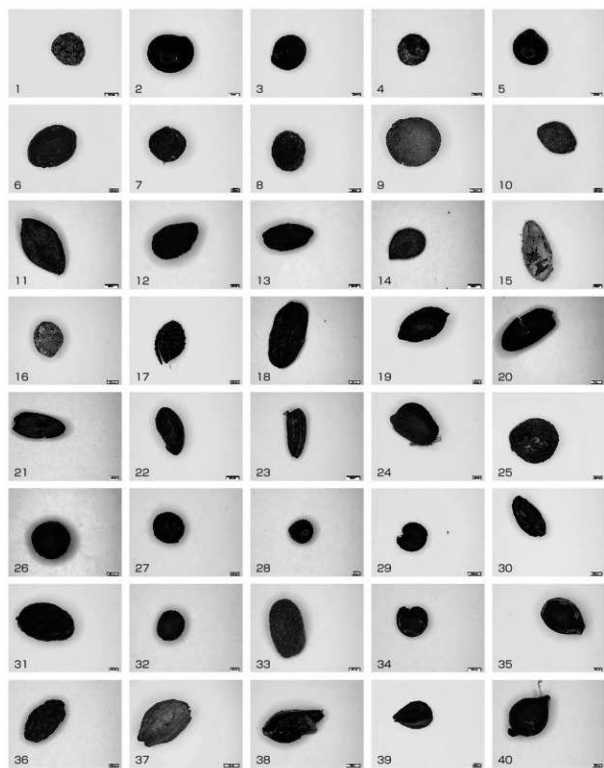


图1 出土种子(1)

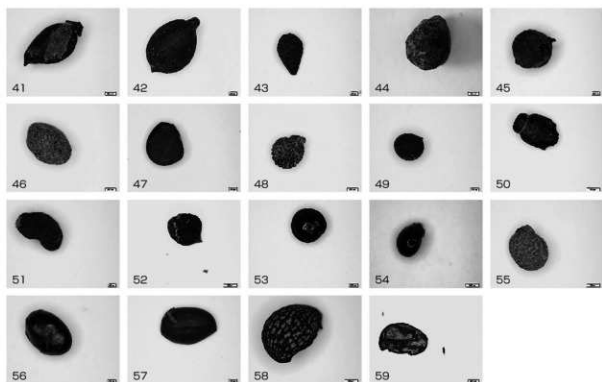


図2 出土種子(2)

表2 種子圧痕同定結果一覧

No.	遺構	報告No.	時期	器種	圧痕 附着部	科	属	種	長さ (mm)	幅 (mm)
1	溝22	(未)	中世前半	椀	内面	イネ	メヒシバ	メヒシバ	7.01	3.33
2	溝22	図59-2	中世前半	椀	内面	イネ	ドジョウツナギ	ムツオレクサ	8.88	1.36
3	溝18	図51-1	中世前半	椀	内面	-	-	-	10.09	1.99
4	溝18	*	中世前半	椀	内面	-	-	-	6.15	3.44
5	-	(未)	中世前半	椀	内面	イネ	エノコログサ属	-	5.37	2.87
6	溝2	(未)	弥生時代後期	-	内面	イネ	エノコログサ属	-	6.12	2.43

※報告No.の(未)は未掲載を示す

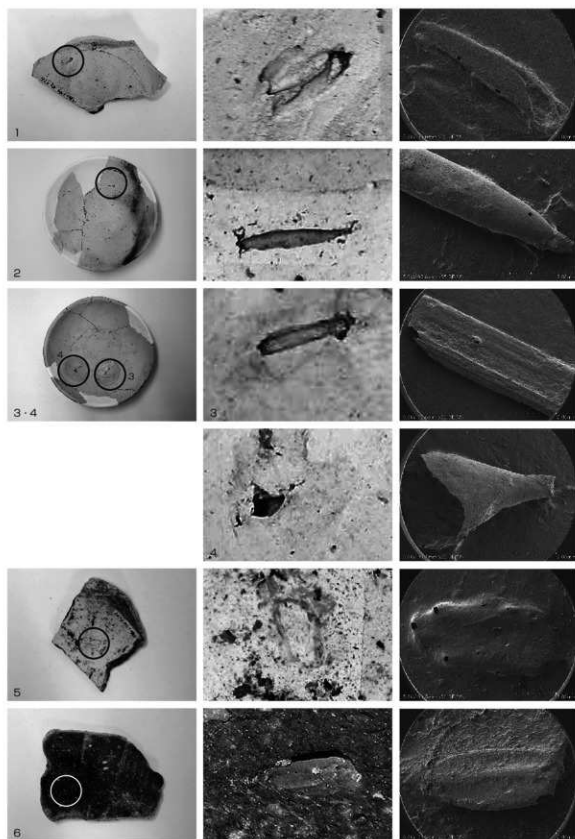


図3 土器圧痕の位置・拡大写真とSEM画像

第5章 結 語

本書で報告した第26次調査地点は、鹿田遺跡の南西部に当たる。この周辺では、第6・7・9・11・20A・25次調査地点の報告書が刊行されており、弥生～古墳時代にかけての集落や中世の屋敷地の展開に関する調査成果が報告されている。本地点では、弥生時代後期～古墳時代前期前葉の井戸・小区画溝群・帯状高まり、古代の土坑、中世前半の井戸・溝、近世の土坑などが確認された。本調査地点の成果は、これら既往の調査成果の広がりについての理解を深めるものとなった。ここでは、遺構の多かった弥生時代後期～古墳時代前期前葉と中世前半の成果を周辺の調査地点の成果と合わせて評価し、結語としたい。

【弥生時代後期～古墳時代前期前葉】

弥生時代後期では、A地点で焼土溜まりと溝、B地点で畦畔の可能性のある帯状高まりが確認された。旧地形は、A地点の北部が高く南東部およびB地点へ向けて低くなる様相を呈す。この遺構配置と旧地形からは、主にA地点は活動域、B地点は生業域であったことが指摘できる。それぞれの活動域の境界は、CJ・CKライン間であると推測できよう。古墳時代前期前葉になると、A地点では井戸や小区画溝群、B地点では溝などが確認された。井戸はA地点でも南部に構築され、南東端部に小区画溝群が展開していた。この時期の地形は概ね平坦である。すなわち、古墳時代になると前代の低位部は埋没してより南方へ移動したために、活動空間が拡大されたことがうかがえる。生業空間も、これに合わせてより南方へ移動したものと考えられる。この変化は、花粉分析の結果からも得られている。弥生時代後期では、近辺にクロマツ海岸線の存在が指摘されるのに対し、古墳時代前期前葉になるとアカガシ亜属やクリが存在していたとする。これは、沖積化などによる海岸線の南下を示していると考えられ、本調査地点の地形と遺構の変化とも整合的な結果であると考えられる。

本調査地点の成果で注目されるものの1つに、小区画溝群がある。溝で囲まれた不整形方形の空間が連続的に展開する状況は、畝と畝間の溝の関係性、すなわち畝の可能性を考えさせた。そこで、土層の軟X線写真観察、花粉およびプラント・オパール分析を実施した。軟X線写真観察では、土層が乱されていたために残念ながら土壌構造を観察することはできなかった。また、イネ由来やハトムギの可能性のある植物珪酸体などが検出されたものの、少量であることから畝の可能性は低いことが指摘された。こうした結果から、本遺構を畝と明確に認定することはできなかったが、今後の資料の増加を待って、改めて評価する必要がある。

本調査地点の周辺では、北側にある第6・7次調査地点で微高地に展開する古墳時代初頭の竪穴住居が、東側の第9・11・20A・25次調査地点で、弥生時代後期～古墳時代にかけての水田域が確認されている。以上のような状況から、本調査地点は北側の集落の縁辺部に当たること、および東側に展開する水田域が本調査地点の南部にまで広がっていたことが明らかとなった。

【中世前半】

本時期では、2段階の遺構の変遷を考えることができる。第1段階は13世紀前葉で、東西方向に走る溝17と南北方向に走る溝18による区画が特徴的である。第2段階は13世紀前半で、前代の溝17・18と重複する形で大型の溝22a・bによって区画され、これが14世紀まで継続する。溝22a・bは、本調査地点の北側にある第7次調査地点の溝20～23に接続すると考えられ、屋敷地の区画をなす。区画の規模は、東西に走る第7次調査地点の溝20～23と本調査地点の溝22b間の距離が南北約57mで、約1/2町であることが明らかとなった。ただし、本調査地点以南では屋敷地の展開はなかったものと思われる。それは、本調査地点の南側における試掘・確認調査によって中世以降の耕作地の広がりが確認されていることによる。溝22aがどこまで南に伸びていたのかは定かではないが、中世前半においても、本調査地点は鹿田集落の南西端部であったと考えられる。(山口)

遺 構 一 覧 表

a. 井戸・土坑・ピット・焼土溜まり

遺構番号	検出標高 (m)		深さ (m)	上面 (残存額) <測定>		底面 (残存額) <測定>		断面形	時期
	上面	下面		形状	規模 (m)	形状	規模 (m)		
井戸1	0.9	-0.55	1.45	円形	1.4×(1.2)	円形	0.48×0.48	Y字形	古墳時代前期前葉
井戸2	0.93	-0.7	1.63	楕円形	1.85×1.6	円形	0.54×0.54	Y字形	古墳時代前期前葉
井戸3	1.15	古: -0.65 新: -0.96	古: 1.8 新: 2.11	隅丸方形	古: - 新: 1.7×1.7	隅丸方形	古: (0.22) 新: 1.62×1.72	筒形	14世紀
土坑1	0.98	0.78	0.2	円形	(0.55×0.5)	円形	(0.43×0.34)	筒形	古墳時代前期前葉
土坑2	1.05	1	0.05	円形	(0.78×0.8)	円形	(0.68×0.7)	皿状	古墳時代前期前葉
土坑3	1.03	0.96	0.07	円形	(0.75×0.5)	円形	(0.6×0.37)	皿状	古墳時代前期前葉
土坑4	1.03	0.54	0.49	円形	直径0.45	円形	0.16×(0.15)	碗状	古墳時代前期前葉
土坑5	0.85	0.39	0.46	円形	直径0.61	円形	0.2×0.26	碗状	古墳時代前期前葉
土坑6	1.05	0.85	0.2	円形	直径0.76	円形	0.56×(0.26)	漏斗形	古墳時代前期前葉
土坑7	1.05	0.67	0.38	楕円形	(0.57)×1.05	楕円形	0.68×0.4	碗状	古墳時代前期前葉
土坑8	0.91	0.3	0.61	楕円形	1.04×1.52	楕円形	0.86×0.47	漏斗形	9世紀
土坑9	0.72	0.5	0.22	長方形	(1.71)×0.93	長方形	0.75×(1.42)	漏斗形	12世紀末~13世紀初頭
土坑10	0.85	0.56	0.29	方形	1.3×1.08	方形	0.92×1.14	漏斗形	13世紀前葉
土坑11	1.21	1.04	0.17	円形?	0.81×(0.15)	円形	0.4×0.14	碗状	中世前半
土坑12	1.22	0.52	0.7	円形	直径0.8	円形	0.43×0.42	漏斗形	中世前半
土坑13	0.97	0.91	0.06	円形	直径0.52	円形	0.43×(0.22)	皿状	中世前半
土坑14	1.05	0.8	0.25	楕円形	0.96×(0.9)	楕円形	0.9×(0.66)	皿状	中世
土坑15	1.1	0.55	0.55	長方形	1.07×(1.2)	長方形	0.6×0.9	漏斗形	中世
ピット1	0.91	0.65	0.26	方形	0.68×0.78	方形	0.45×0.54	漏斗形	13世紀
焼土溜まり	1	0.87	0.13	不整形円形	2.2×(1.1)	不整形円形	2.1×1.36	皿状	弥生時代後期

b. 溝

遺構番号	検出標高 (m)		深さ (m)	断面形	幅 (m) (残存額)	方向	時期
	上面	下面					
溝1	0.88	0.71	0.17	皿状	0.9	N0°	弥生時代後期
溝2	0.8	0.71	0.09	碗状	(0.26)	N25° W	弥生時代後期
溝3	0.85	0.72	0.13	碗状	(0.5)	N24° E	弥生時代後期
溝4	0.85	0.75	0.1	碗状	(0.27)	N45° E	弥生時代後期
溝5	a : 0.96 b : 0.91	a : 0.86 b : 0.76	a : 0.1 b : 0.15	碗状	0.3	N65.5° W	弥生時代後期
溝6	0.92	0.76	0.16	碗状	0.57	N12° E	弥生時代後期
溝7	a : 0.94 b : 0.86	a : 0.8 b : 0.66	a : 0.14 b : 0.2	碗状	0.63	N15° E	弥生時代後期
溝8	0.96	0.79	0.17	碗状	0.54	N73° W	古墳時代前期前葉
溝9	0.93	0.73	0.2	漏斗形	0.76	N104° E	古墳時代前期前葉
溝10	1.05	0.95	0.1	碗状	(0.42)	N19° E	古墳時代前期前葉
溝11	0.99	a : 0.84 b : 0.81	a : 0.14 b : 0.18	碗状	a : 0.76 b : 0.91	N6° E	古墳時代前期前葉
溝12	0.94	0.76	0.18	碗状	0.5	N20° W	古墳時代前期前葉
溝13	0.89	0.54	0.35	碗状	1.46	N19° E	古墳時代前期前葉
溝14	0.79	0.68	0.11	碗状	0.44	N97° E	弥生時代後期
溝15	0.92	0.81	0.11	碗状	0.3	N76° E	弥生時代後期~古墳時代前期前葉

遺構番号	横断標高 (m)		高さ (m)	断面形	幅 (m) (残存値)	方向	時期
	上面	下面					
溝16	0.9	0.82	0.08	陥状	0.3	N76° E	弥生時代後期～ 古墳時代前期前葉
溝17	1.1	0.15	0.95	-	(1.4)	N69° W	13世紀前葉
溝18	0.43	-0.03	0.46	逆台形	0.88	N15° E	13世紀前葉
溝19	1.1	0.8	0.3	逆台形	1.12	N104° E	13世紀前半
溝20	1.01	0.75	0.26	逆台形	0.66	N64° E	中世前半
溝21	0.8	0.47	0.33	陥状	0.72	N12° E	13世紀
溝22 a	1 : 1.38 2 : 1.34 3 : 1.28	1 : 0.4, 0.3 2 : -0.45, -0.23 3 : 0.16	1 : 0.98 2 : 1.57~1.79 3 : 1.12	1 : 逆台形 2 : 二段陥状の 逆台形 3 : 逆台形	1 : 4.48 2 : 6.15 3 : (20)	1 - 2 : N19° E 3 : N12° E	13世紀前半 ～14世紀
溝22 b	1 : 0.85 2 : 0.86	1 : 0.53 2 : 0.33	1 : 0.32 2 : 0.53	逆台形	1 : 1.18 2 : 1.88	N71° W	
溝23	1.33	1.23	0.1	陥状	0.83	N76° W	中世前半
溝24	1.24	1.06	0.22	陥形	0.54	N78° E	中世前半
溝25	1.04	0.55	0.49	逆台形	1.12	N35° W	中世前半
溝26	0.93	0.65	0.28	陥形	0.4	N37° E	中世前半

c. 帯状高まり

遺構番号	上面高 (m)	下面高 (m)	高さ (m)	幅 (m)	方向	形成層
帯状高まり	0.92	0.8	0.12	0.5	N76° E	<10層>

d. 小区両溝群

遺構番号	上面高 (m)	形成層	時期	備考
小区両溝群	1.0	<7層>	古墳時代前期前葉	幅0.2～0.25m程、深さ0.06～0.1m程、断面陥形の溝によって0.55×1.1mの不正方形に空間が区切られる。軟X線写真観察、花粉分析、プラント・オパール分析を実施。

報告書抄録

ふりがな	しかたいせき13							
書名	鹿田遺跡13-第26次調査-							
副書名	医学部動物実験施設改修に伴う発掘調査							
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第35冊							
編著者名	山口雄治(編著)・南健太郎・岩崎志保・渡辺正巳・能城修一・沖陽子・江川達也							
編集機関	岡山大学理蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号							
発行年月日	2019(平成31)年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系	世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
しかたいせき13 鹿田遺跡第26 次調査地点	岡山県岡山市 北区鹿田町二 丁目5番1号	33201	県2208	A地点: 34°39'1" B地点: 34°39'0"	A地点: 133°55'8" B地点: 133°55'7"	A地点: 20140818~ 20141117 B地点: 20141023~ 20141110	A地点: 273㎡ B地点: 22.5㎡ 計:295.5㎡	医学部動物 実験施設 改修
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
鹿田遺跡第26 次調査地点	集落~田畑	弥生時代後期~ 古墳時代前期前葉		井戸・土坑・溝・ 耕作関連遺構・ 焼土溜まり		土師器・製塩土器・土鍾		-
	集落	古代		土坑		須恵器		-
	集落	中世前半		井戸・土坑・溝・ ピット		土師器・木製品		-
	田畑	近世		土坑		-		-

2019年3月29日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第35冊

鹿田遺跡13

編集・発行 岡山大学理蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津島中三丁目1番1号
(086) 251-7290印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市北区津高651
(086) 254-1111代